

国家への遺産

テレンス ラティガン 作
能美 武功 訳

登場人物

ジョージ・マツチャム・シニア
キャサリン・マツチャム
ベツィ
ジョージ・マツチャム・ジュニア
エミリー
フランシス（レイディ・ネルソン）
ホレイシヨール・ネルソン
ロード・バラム
エマ・ハミルトン
フランチェスカ
ロード・ミント
ハーディ艦長
レヴェランド・ウイリアム・ネルソン
サラ・ネルソン
ホレイシヨール
ブラックウッド艦長
海軍少尉候補生
下僕 水夫 女中

時

芝居の主要部分はネルソンが八月二十日英国に帰り、カディ
スに九月十三日再び出発する、この二十五日間、一八〇五年
のこと。「トラファルガーの海戦」は一八〇五年十月二十一
日であり、芝居の最後の場は、このニュースがロンドンに届
いた数日後。即ち十一月五日である。

場

全幕とも屋内。数個の椅子が場にに応じて並べ変えられる。台
詞には、時々扉とか窓が言及されるが、扉も窓もない。観客
よりもむしろ読者の方が、その存在を意識し易い。即ち舞台
は暗示的であり、場の変換は大小の道具でなく照明で行なわ
れる。背景の絵は四枚。場の順序で言えば、バース、ロンド
ン、マートン、トラファルガー。

第一幕

第一場

（照明がつく。バースにあるマツチャム家の一部。居間と階
段の一部が見える。ジョージ・マツチャムが荷造りをしてい
る。下僕がトランクを運んで階段を降りようとしている所。
下僕少し足を滑らし、「畜生！」と言う。）

マツチャム 気をつけるよ。その中にはレイディ・ハミル
トンのブランドーが入っているんだ。

下僕 提督の大砲じゃないんですか。えらく重いです。
マツチャム トムに手伝わせたらいい。

下僕 あいつは奥様がトランクを締めるのを手伝っている
んで。

マツチャム トランク、二つもあるのか。

(下僕退場。マツチャム、階段の上に叫ぶ。)

マツチャム(叫ぶ。) キティ、一つもトランクいるのか。

キャサリン(舞台裏で) 二ついるのよ。

(二番目のトランク、第二の下僕の背にのせられて降りて来る。女中(訳註 これはベッイ。ジョージと同じ位の年十三から十六。)がそのうしろ、化粧箱と二、三の帽子の箱を運ぶ。)

キャサリン(登場) 気をつけて、ポップ、私のラベンダーが入っているんだからね。(突然思い出して大声で) ベッイ、ベッイ、私の宝石箱は?

ベッイ この帽子の箱の中ですわ、奥様。奥様が特別に御自分でそこに・・・

キャサリン そうよ。確かめるために言ったの。

(ジョージ・マツチャム・ジュニア登場。十六歳の中学生。新聞を持っている。)

ジョージ(興奮して。) うちの家族がバース・ガゼットに載ってる。三人とも。

マツチャム ほう、本当か。

ベッイ(宝石箱があるのを確かめて。) ありますわ、奥様。

(ベッイ退場。)

マツチャム ちゃんと宝石箱を帽子箱の中に入れてんだろ。じゃその宝石箱は何なんだ。

キャサリン 追いはぎが出た時の用心。

マツチャム おいおい、この二十五年間バースからロンドンまでの道で、追いはぎなんか出たためしはないぞ。

キャサリン だからと言って、今日出ないっていう保証にはならないわ。(ジョージに。) お前、学校は?

ジョージ まだ三十分大丈夫。お母さん、ガゼットにうちのこと載ってるんだよ。

キャサリン ガゼットに載っていたって珍しい事じゃないわ、ジョージ。ロンドンのタイムズに載っていたって不思議じゃないくらいだわ、もう。

ジョージ だけど、今度には、僕が載っているんだ。

キャサリン あらそう。(マツチャムに。) 一つ発つんですの、あなた。

マツチャム もうすぐだ。馬車は頼んである。だけどトランク二つって言うのは言っておかなかったんだが・・・

ジョージ 僕のところ、読んでもいい? (興奮して読む。)

彼らの長男、ジョージ マツチャム ジュニアは・・・ 2

キャサリン(コーヒーをすすりながら。) もう少し前から読んでみて・・・

ジョージ あ、うん。

(ジョージ、菓子パンをつまみ、食べはじめる。)

ジョージ(速い読み方。) ネルソン卿は海軍省の命令により、突然帰国したが、これが現在までの彼の粉骨、不休の働きに対する当然の報償であることは疑いなくところである。

しかし果たしてこの休息が、彼の余生に渡り続くものであるかどうかは知られていない・・・云々云々。西インドについては云々云々・・・しかし・・・

キャサリン 食べながら読むものじゃありません。それに「もう少し前から」と言いましたよ。

ジョージ エート、じゃこはとばして・・・ここからか。
(読む。)この見方を裏打ちする情報としてネルソン卿はサ
リー州マートンに新築した自宅に自分の一族郎党のほとんど
を招請し・・・

マツチャム(鋭く。)「ほとんど」?

ジョージ ええ。

キャサリン 深い意味はないのよ、きつと。

マツチャム 深い意味があつてたまるか。次は。

ジョージ(読む。)うち、バース在住の三名は、提督の妹、

マツチャム夫人、その夫、著名な金融業者、ジョージ・マツ

チャム(次が大事だと声を上げて。)その息子、ジョージ・

マツチャム・ジュニア・・・

(母親、ここで荒っぽく読むのを止めさせる。)

キャサリン 金融業者。気にいらないわ。金融業者じゃま
るで・・・まるで、ブロー・・・

マツチャム 私は金融に携わっているんだ。

キャサリン でもまるでそれが貴方の生計の道っていう風
に聞こえるわ、これじゃ。

マツチャム これは私の生計の道なんだ。(だんだん怒つ

てくる。)なんだか奇妙な話になってきているぞ。お前の兄

貴が半分神様扱いされるようになってから、お前は半分女神

になった・・・だからお前の結婚相手はお前の地位よりもずつ

と低いところにいるっていう話だ。だがな、我々が結婚した

時のことを考えてみる。まだ娘でバーナムに住んでいた頃の

ことを。相手が金融業者だつていうんで、大喜びだったんだ。

キャサリン(威厳をもってジョージに。)お前、読んでい

るところだったね、ジョージ。その息子、ジョージ・マツチャ
ム・ジュニアは・・・

ジョージ(読む)バースの近くの中学校に通っており、一

週間後、即ち今学期の終了と共に彼もまた、マートンに移る

のであるが、確かに(マツチャムに。)ここを良く聞いて、

お父さん、確かに、ジョージ・マツチャムは、イギリス中で

最も運のよい少年であると自負せねばなるまい。

キャサリン お前、そう思っているんだらう、ジョージ。

ジョージ(両親にない熱心さで。)うん、思ってる。

(マツチャム、彼から新聞をとり、不機嫌に読み始める。ジョー

ジ、自分の鞆に行き、何か熱心に書き始める。宿題のようで

ある。)

キャサリン(マツチャムに。)私達以外に何かある?

マツチャム お前の兄貴が出ている。司祭長つて呼んでい₃

るよ。

キャサリン いいじゃないの。

マツチャム 決して正確とは言えないがね。

キャサリン あのエマについてはどう? 何か書いてある?

(マツチャム、さっと目を走らせる。)

マツチャム いつもと同じだ。

キャサリン 不都合なことは何も出ていないんでしょね。

マツチャム お前、何が言いたいんだ。この話で不都合で

ないことなんて、一体どこにあるんだ。

キャサリン 十分注意して書けばその辺はなんとか・・・

マツチャム 前よりは書き方はずつとひどくなっている。

読むとな、(読む。)レイディ・エイチはクラージス街の彼

女の自宅とマートンの彼女の仮宿との間を常に往き来している。
る。

キャサリン 「仮宿」とはうまく言ったわね。

マツチャム(続ける。)レイディ・エイチはネルソン家における名誉ある女主人としての役割を、寡婦になった現在、再び演ずる機会を得ているのであろう。

キャサリン あの人、もうあと一、二年でも生きていくれたら良かったのに。

マツチャム そうだ。この時期に死ぬなんて、あいつも考えなしの奴だ。(読む。)この女主人の役割は、まだ彼女の

夫、サー・ウイリアムが健在の頃、ネルソン卿、サー・ウイリアム、レイディ・エイチの三人が堅い友情の絆のもとに

トリア・ジュンクタ・イン・ウノ。即ち、三位一体で・・・
ジョージ(宿題に没頭しながら。)それじゃあ、三人から

み合っているように聞こえるなあ。
(間。)

キャサリン(やつと。怒って。)ジョージ、なんてことを！
ジョージ(振り向いて。)ああ、大丈夫だよ。お母さん、

僕だって三人からみ合っていないことぐらい知っているんだ。
ネルソン伯父さんが帆を上げる時はもうサー・ウイリアムが

錨を上げている。これは分かっているし、伯父さんを非難する奴は誰もいないさ。だけど三位一体っていうのはちょっと・

ローマ風だね。
キャサリン それは「バースの誓い」よ。伯父さんとサー・

ウイリアムが大切にしていたモットーじゃないか。
ジョージ(笑って。)それじゃあもつとまずいや。バース

(風呂)に三人で入ったのか。彼女も一緒に。(ローマの集
団浴場だな。)

(ジョージ、笑いだす。止らない。中学生が自分の冗談に笑
う時の笑い。)

キャサリン ジョージ、呆れたわね、ジョージ。本当に呆
れた。笑うのはおやめなさい！(マツチャムに。)あなた、
お願い。

マツチャム やめろ、笑うのは。ジョージ、止めんか。
ジョージ はい、お父さん。

(一、二度、吹き出すのをやつと抑えて、笑い止む。)

キャサリン 呆れた。学校では何を教えているんでしょう。
マツチャム ローマの歴史さ。

キャサリン 本当に呆れた話。この子の年でこんなに恐ろ
しい、こんなにひどいことを自分の伯父さんについて想像す
るなんて。伯父さんを全く尊敬していないっていうことじゃ
ないの。

ジョージ(しっかりと母親を見て。)尊敬していません
て、お母さん。とんでもないです。僕にとってあの伯父さん
は神様みたいな人ですよ。

キャサリン だって、お前今・・・
ジョージ それは冗談は言いました。失礼なことだと思
います。でもあの冗談はイギリス中で言っていることです。そ
れに、言ったって何の害もありません。

マツチャム どうしてイギリス中で言っていると思うんだ。
ジョージ お父さん、僕は子供じゃないんです。

マツチャム(訊いていることの論点を忘れて。)

お前は子

供だ。

ジョージ（論点が外れて安心して。）じゃあ子供でいいです。でも僕はこれから、伯父さん、レイディ・ハミルトンと一緒にあの人達の家に住むんですから……

キャサリン あの人の家じゃないの、伯父さんの家。

マツチャム 俺の家だ。借金を払い終わって貰うまではな。

ジョージ そうするとレイディ・ハミルトンは僕の名誉ある女主人っていう事になるんでしょう？ だって新聞に書いてあるんですから。僕のうちにいるこの「女主人」っていう人を僕はどう考えればいいんですか。お母さん。

キャサリン（困る。しかし、しっかりと。）伯父さんの非常に近い、大事なお友達で、家にいるのは……

マツチャム 家事の助けをするからだ。

（キャサリン、夫をちらと見、荷物の纏めをする。）

キャサリン お前みたいな小さい子供にはまだ分からないよ、この国の錚々たる人物の高貴な関係なんていうものは。

ジョージ（皮肉なしに。）ええ、僕にはまだ分からないと思います、お母さん。特に一人はあのホレイショー伯父さん、もう一人はこの世に生まれた一番奇麗な、一番優雅な女の人だっというんですから。だけど僕に分からないのは、あの「三位一体」っていうやつなんです。まだサー ウイリアムが生きていて、三人で暮らしていた時、みんなは何と違ってこんな事を言っただらう。

（間。ベツイ階段に登場。エミリー（年寄の婦人）を連れてくる。ベツイ、エミリーに部屋の中を「ここだ」という風に指差し、階上上がる。エミリー、敷居のところでおおす

とした態度。）

マツチャム（自分の時計を見ながら。）今のジョージの質問に対する答はお前がやるんだな。さぞかし立派な、申し分のない説明だろうよ。だが今はいい。もっとあとでゆつくりとやって貰うことに……

（この時までにエミリー、勇気を奮い起こして居間に入ってきている。マツチャム、彼女を見、びくつとする。間。）

マツチャム ああ、エミリーじゃないか。驚いたな。会えるなんて珍しいよ。どうだい、元気でやっている？

エミリー ええ、元気でおります、マツチャム様。奥様。

（キャサリン、頷く。）

エミリー あら、ジョージお坊っちゃま。随分大きくおなりになって。

ジョージ そうかな。

エミリー そつですとも。（マツチャム夫妻に。）レイディ・ネルソンから宜しくと申しました。出来れば一言お話ししたいことが……との事です。レイディ・ネルソンは外でお待ちです。

キャサリン この家の外という事かい？

エミリー ええ、さようでございます。

キャサリン 朝の六時に？

エミリー 馬車が出る前に皆様にお会いになりたいと……キャサリン それだつたらもつと早くに来なくちゃいけないかつたんじゃないのかい。

エミリー いいえ、奥様。皆様の馬車の出発が三十分遅れることになったと、分かりまして……。車寄せのところでお

皆様をお待ちしようと思ってみまして、そこで分かったのです。で、こちらに直接参ったのです。

キャサリン で、この通りで待っているっていうのかい。

エミリー はい、奥様。御自分の馬車で。

(間。マツチャム、困ったように妻を見る。キャサリン、冷たく拒否の身振り。)

マツチャム いや、それでも遅すぎだ、エミリー。今になると余計たてこんでいて、ちょっとお相手出来ない。

エミリー ほんの一言だけと仰っておられます。新聞で皆様が今日マートンにお移りになることを知って、どうしてもお会いしたいと。

キャサリン 何故でしょう。

エミリー はつきりとは私には分かりませんが、奥様。でも、

ご主人様へのご伝言ではないかと……

キャサリン どういった伝言?

エミリー もう四年も会っていない夫への、妻からの優しい挨拶ではないでしょうか。勿論不都合なことは何一つない筈です。

キャサリン レイディ・ネルソンに言っておくれ、エミリー。

今の時点、そしてこの状況で私達がお会いして、何の意味もあるとは思えません。そのようなことをなさるのが、全く的外れであることは、レイディ・ネルソンご自身が、一番よくご存じの筈です。それからこのような不作法な振る舞いに、大変迷惑しておりますと。言葉通り、そのように伝えておくれ、エミリー。

エミリー 畏まりました、奥様。無駄です、とは何度も申

し上げたのです。このようなことはなさいますかと……

キャサリン それをお聴きになっていればよかったの、あなたの方。(寛容に。) お前には個人的に何の悪感情も持っていないんだからね、エミリー。

エミリー それはご親切に……どうも。

(エミリー、会釈。退場。)

キャサリン(怒って。) あきれた。こちらの立場なんかどうでもいいって言うのね。私達に何が出来るっていうの。馬鹿! 間抜け! オタンチン! ジョージ、お前、今は聞こえなかつたんだよ。

ジョージ(コーヒを飲みながら。) 聞こえた。

キャサリン トム・ティットのやつがこんなことを企んだって、兄さんに言ってる。見ているがいい。(夫に。) あいつの次の手なんて見え見え。この外で私達を待ち伏せよ、きつと。その傍を通る時、どうしても一言話さないではおかないっていう計算ね。(決然と荷物を取り上げながら。) そっちがその気ならこっちにも考えがある。(夫に。) さあ、行きましよう。

マツチャム 今出るのか? 上策とは思えんな。敵の主力部隊の真ん中に突撃するのは良い戦略とは言えないよ。

ジョージ(にやりと笑って。) ネルソンの言葉ですね。

マツチャム なまいきを言うな。それに俺はネルソンじゃないんだ。

キャサリン 私はネルソンなんですからね。あんなやつ、馬車の傍を平気で通って睨み返してやる。そのぐらい何でもない。なんでもないどころか、いい気味っていう気分だわ。

(キャサリン退場)

マツチャム(ジョージを抱いて。) じゃあな、ジョージ。一週間後、マートンで会う時には受け持ちの先生からの「成績優秀」っていう言葉を期待しているよ。

ジョージ はい、そうなるよう努力します。

マツチャム(優しく。) 通知表にお前がその言葉を書いてもいいがな。

(マツチャム退場)

キャサリン(舞台裏で。) 行くよ、ポップ。

(ポップ登場。 帽子箱をいくつか抱える。)

マツチャム(舞台裏で。) キティ、馬車を裏口に回すようにベツイに言おうよ。

キャサリン(舞台裏で、怒って。) 裏口？ トム・ティットを避けるため？ あなたって一体どういう人なの。

マツチャム(舞台裏で。) 親戚の気持ち傷つけまいと心を砕くぐらいの事はする男さ。

(この時までジョージ、坐って宿題をまたやっている。この瞬間を待っていたかのようにベツイ登場。ジョージに近づく。)

ベツイ 坊っちゃん、お願いがございます。来週伯父様にお会いになれる時、ことづけものをお渡し下さいませんか。お母様にはお願い出来なかつたのです。だって何て仰るか、分かっているんですもの。私の部屋にあるの。もう包んできちんとしてあります。

ジョージ 何なんだい、ものは？ ベツイ。

ベツイ マラリアに效くものです。本であの方のことを読

みました。この持病で時々発作を起こされるって。

ジョージ 薬かい？

ベツイ いいえ、身につけるもの。

ジョージ 態々買ったの？

ベツイ 盗んではきませんわ。

ジョージ そんなことにお金を使ったりしちゃ駄目だよ。

ベツイ 何故でございます。効き目があるかもしれませぬわ。お渡し下さいますか。

ジョージ 勿論。それに誰からっていつこともね。

ベツイ いいえ、そんなことは仰らないで。ただ差し上げて下さい。それだけでいいんです。それからどうぞ必ずお召しになって下さい、と。

(呼び鈴の音。)

ベツイ 馬車だわ。忘れないで下さいね。坊っちゃん。

ジョージ 勿論忘れないさ。高いものだったんじゃないの。大丈夫かい？

ベツイ そんなの、何でもありませんわ。あの方がいらつしやらなければ、私達一体どうなるでしょう。そのことを考えれば・・

(ベツイ退場。ジョージ、宿題に戻る。)

(暫くしてベツイ、驚いた表情をして再び登場。その後ろにフランシス(即ちレイディ・ネルソン)登場。夫(四十六歳)と同年。決して美人ではないが、人に威厳を感じさせる落ち着きと優しい品位がある。ベツイ、居間を指し示し退場。)

フランシス 暫くね、ジョージ。

(ジョージ、ひどく驚く。しかし逃げることは不可能。やつ

と固い公式的な会釈をする。()

ジョージ レイディ・ネルソン。

フランシス(会釈を返して。() もうフランシス伯母さんじゃなくなったの?)

ジョージ(再び会釈をして。() フランシス伯母さん。

フランシス エミリーの言っていた通りだわ。大きくなったわね。その半ズボン、もう小さいわ。あなたの洋服を買う係りは今は誰?

ジョージ 母です。

フランシス 私が買っていた頃の方がちゃんとしていたわ。お前のお母さんは知らないんだよ。子供の成長がどんなに早いものかを。

(間あり。その間観客は、フランシスもジョージと同じ位そわわわしていることが分かる。)

フランシス(おずおずと小さな包を出しながら。() まだお前、飴は好きかい? ハイザートンでお前にと買って買って来たんだけど。

ジョージ(当惑のため声がかすれてくる。() 有難うございます。でも僕、朝食を食べたばかりで。それに菓子パンも。

フランシス そうね。飴なんかはいりっこないわね。() 包を差し出して。() でもとにかく取っておいて。

ジョージ(拒絶する。() いいえ、駄目です。

フランシス あら、余計おかしくしちゃったわ。エミリーも言っていた。そんなことをなさると却っていけませんよって。

ジョージ(きつぱりと、態度を決めて。() もう学校に行く

時間ですので、もしお許し下されば、僕は・・・

フランシス(少し気色ばんで。() 許しません。それに私は、お前の学校へ行く時間は、ちゃんと知っているのです。お坐りなさい、ジョージ。

(ジョージ、威厳のある声に仕方なく従い、坐る。)

フランシス 来週マートンに行くんだね、お前。

ジョージ はい。

フランシス 何曜日?

ジョージ 木曜日です。

フランシス 木曜日には私はロンドンです。サマセット街の私の家。ひとつきばかりそこにいようと思って。

(間。ジョージ無言。ジョージは明らかに言う言葉なし。しかしフランシスは彼に何かを言いつて貰いたい。用件をうまく切り出すためのきつかけが欲しいのである。一旦は権威づくろで言葉は発したが、彼女の極端におどおどした態度は消えていない。)

フランシス このコーヒー、まだ温かい?

ジョージ もう一杯頼んで来る。

フランシス いいの。これでいい。ここに汚れていないカップもあるし、私を朝食に呼んでくれたみたい。お前のお母さんも駄目ね。視線で人をやつつける時には、その視線は相手の身体を射抜かなくっちゃいけないの。頭越しに相手の後ろの方を見るなんて意味ないわ。それにお前のお父さんだって・・・

(笑う。それからシヤンとしようと努めて。() ああ、ジョージ、許してね。お前の前にいて気おくれがして・・・

ジョージ 僕の前で気おくれですって?

フランシス ほら、手を見て。

(フランシス、カップを下におろす。震えがひどくてカップを口を持って行けなかったのである。)

フランシス 馬鹿なことね。

ジョージ ええ。僕でそんな風だったら、さっき入って貰って、お父さん、お母さんに会ったらどうなるんですか。

フランシス ああ、それは平気。あの人達の手が震えるのよ。私の方じゃないわ。手が震えるのはうしろめたいからなのよ、ジョージ。うしろめたさが人を臆病にさせる。さっきのお前、固い会釈をして、「レイディ・ネルソン」だなんて。昔は「大好きな伯母さん」だったのに。うしろめたくてそうなるの。

ジョージ 僕にうしろめたいこと。そんなことがあるんですか。

フランシス お前に何かをやって貰おうとしているの。そんなことをしてはいけない、と、私の良心は言っている。

ジョージ (僕に出来て、してはいけないこと。) 何ですか、それは。

フランシス マートンに手紙を持って行って貰いたいの。

ジョージ 伯父さんに？

フランシス ええ。私の夫に。

(間。ジョージ、眉を蹙める。「厭です。」と言って良心が疼かないような良い言い方がないかと捜す。)

ジョージ どんな手紙なんですか。

フランシス 普通の手紙よ。

ジョージ 何かひどいことが書いてあるの？ レイディ・

ハミルトンは淫売だとか・・・

フランシス レイディ・ハミルトンについては何も書いてないわ。たとえあったとしても昔のあの人のことを思いださせて何になるっていうの。

ジョージ (怒って。) あの人が本当に昔淫売だったって僕に思わせようっていうんですか。

フランシス (微笑む。) 勿論違うわ、ジョージ。昔のあの人はそれから思うと随分変わったもの、そう言いたかっただけ。(バッグを開けながら) ほら、これが手紙。ね、宛名はないでしょう？ それに封印もしなかったの。

ジョージ 何故ですか。

フランシス 私の筆跡も、封印もレイディ・ハミルトンによく知られている。

ジョージ でも僕が自分で手渡せば・・・

フランシス 少なくとも一人はいつでも召し使いがいるわ。四、五人いるんじゃないかしら。あの人そういう事には随分賢沢ってきいている。お手当ても十分出しているでしょうから。(みんなあの人の味方のはず。)

ジョージ (笑って。) それは考え過ぎだよ。

フランシス 考え過ぎではないわ。でもそういう風に思うのなら、これはお前の胸一つにしまっておいて。

ジョージ (まだ笑っている。) あの人が手紙を焼き捨てるとか、そういうこと？

フランシス いいえ、多分、この間出した手紙と同じ運命。

馬鹿なことをしたの。それは郵便で出したの。返送されてきた封筒に「ネルソン卿、誤ってこれを開封せり。但し読み申

さず候。「とあつたわ。

ジョージ 筆跡はレイディ・ハミルトンの？

フランシス いいえ、デイヴィッドソンの。

ジョージ 伯父さんの秘書の？

(フランシス頷く。)

ジョージ レイディ・ハミルトンが書かせたのかな。

フランシス そのようなね。

ジョージ でも、デイヴィッドソンは伯母さんと仲良しだったじゃない。

フランシス そう。昔仲良しで、今そうじゃない・・・いっぱいいるわ。

ジョージ (自分に思い当たり、恥ずかしそうに。)

フランシス (愛情を込めて。)

ジョージ だけど、こんなことってないよ。それに選りに選って、あのデイヴィッドソンがそんなことをするなんて。

ネルソン提督の名誉に関わることじゃないか。立場を考えなかつたのかな。一番そんなことをしそつにない人が、デイヴィッドソンなのに。ねえ、伯母さん、こんなこと言うの失礼かも

しれないけど、伯母さんのことを最近うちではどう言ってるか知ってる？

フランシス 厄病神のトム・ティット？

ジョージ どうしてあんなに大袈裟にするんだらうって。

フランシス 私が、大袈裟に？ 何故。

ジョージ 同情が欲しいんだ。哀れんで貰いたいんだらうって。

て。

フランシス 同情はいや。同情されるのはたまらない。

ジョージ でも、レイディ・ハミルトンに対して敵意はあるんでしょ？

フランシス そう。敵意はある。それは否定しない。でも、今の手紙の話は大袈裟じゃない。本当の話よ。ほら。

(バッグから手紙を取りだし、覆いを除き封筒を見せる。)

ジョージ (筆跡をやつとのことと辿る。)

「ネルソン卿、誤ってこれを開封せり。但し、読み申さず候。A(エイ)・デイヴィッドソン。」

(フランシス頷く。)

ジョージ これがその手紙？

フランシス そう。

ジョージ 何時のこと？

フランシス 一八〇一年十二月十八日。

ジョージ クリスマスカード！

フランシス クリスマスカードだったってということがショククなの？

ジョージ 何時だってこんなことをするのはひどいと思うけど、クリスマスカードを！ 僕がおセンチなのかな。

フランシス 私だっておセンチ。でも今までクリスマスカードだからって特別に考えなかつた。

ジョージ (重々しく。)

「誓えますか、フランシス伯母さん。この中にはあの人を動揺させたり、怒らせたりするものは何もないって。」

フランシス 誓えないわ。だって、もう四年も会っていない

いの。何に対してあの人が怒るか、もう見当がつかない。

ジョージ でも、その手紙には特別なことは何も書いてないでしょう？

フランシス そう。特別なことは何も。夫に捨てられた妻、そしてまだその夫を愛している妻、その妻が夫に宛てて書く一番普通の手紙。

ジョージ（居心地悪く。）伯父さんのことをまだ？ みんなの話では……

フランシス（遮って。）みんなが言っていることは知っているわ。（明るく。）お母様、お元氣そうね、ジョージ。この間、鉱泉を飲む社交場で（訳註 Pump room の訳。）ご両親を見かけたわ。ウイリアム叔父さん、サラ叔母さんもネルソン一族ね。たいしたもの。勿論私は逃げ出した。かわいそうな私。あの人達、私がバースにいることが我慢ならぬいの。ロンドンではそんなことはない。めったに歩かないもの。どう、ジョージ。渡してくれる？

ジョージ はい。

フランシス あの人に。自分で？

ジョージ ええ、勿論。

フランシス 怖くない？

ジョージ ホレイシヨール伯父さんが？ 勿論怖くなんかない。あんなに優しい人はいませんよ。

フランシス そうね。（皮肉なしに。）あの人と一緒に船に乗った人であの人を尊敬しない人は一人もいなかったわ。

（立ち上がる。リウマチのため、難しい。）約束ね、ジョージ。

ジョージ はい、約束です。

フランシス それに勿論お母さんには内緒。

ジョージ（笑う。）決まってるじゃないか。

フランシス（財布を探りながら。）もう三回もクリスマスで会えなくて、贈り物を……

ジョージ（いやだという態度をして。）賄賂はいらない。

フランシス そうね。ご免なさい。（飴の袋を取り上げる。）これも駄目？

ジョージ いいえ、これは戴きます。（袋を受け取る。）有難う、フランシス伯母さん。

フランシス（おずおずと。）勿論私がサマセット街に戻ったって、あの人がこっそり言ってくれば……もし一目でも会えればどんなにか……一回だけでも。二人だけで、どんな短い時間でもいい……って伝えてくれれば……会つてくれたっていう事を誰かに知って貰いたいなんて、そんなことを思つてはいない。こっそりでいいの……あの人が一人でどこかへ行くって、それだけでもいい。（私がそこへ出かけて行く。）……もし話すのが嫌なら、話さなくてもいいわ、ジョージ……でもちよつとしたこと、まだ目が痛むの、とか、そんなことが話せれば……いいえ、それが無理なら同じ部屋にただ坐つてあの人を見ているだけでいい。何も話さないで……ご免なさい。文章になつていないわね。

私の悪い癖。言わないで。今言った事は何一つ。あの人苛々してしまふ。きつと。（再び明るく。）そうね、トム・ティットに待ち伏せされちゃったって言つて頂戴。そして手紙を無理矢理こずかちつてしまつたって。あ、そう、教えて、ジョー

ジ。私のことをどうしてトム・ティットってみんな言うの。

ジョージ 知らないの？

フランシス ええ。

ジョージ 昔はそう呼ばれてはいなかったんでしょ？・・・
若い頃は。

フランシス ええ、多分、呼ばれてはいなかった。

ジョージ 本当に知りたい？

フランシス ええ、知りたいわ。

ジョージ 気にしない？

フランシス 勿論。

ジョージ 歩き方。

フランシス 私の・・・歩き方？

ジョージ そう。トム・ティット。小鳥の歩き方。（礼儀

正しく。）少なくともみんなはそう言っていますけど・・・

フランシス そうだね。リウマチのこの足。小鳥の歩き
方だね。

（二人、微笑む。ジョージは困ったように。フランシスはお
かしそうに。）

フランシス で、ネルソンもそう呼ぶの？

ジョージ ええ。

フランシス お前が自分で聞いたことがある？

ジョージ ええ、あります。（急いで。）でも意地悪な言

い方じゃありません。

フランシス 勿論よ。勿論意地悪なんかじゃ・・・

（今までも何度か出そうになっていた涙がここに来て一気
に出る。痛ましいすすり泣き。ジョージ、どうしようもなく、

ただ眺めるだけ。）

ジョージ エミリーを呼びましょうか。

フランシス いいえ、ほっといて。

（フランシス、自分を取り戻そうと努力する。その間ジョー
ジ、困って伯母を眺めた儘。）

フランシス（やつと。）あらあら。ご免なさいね。

ジョージ（フランシスの正面に坐って。）分からないな。

フランシス 何が分からないの。

ジョージ 皆があんなに伯母さんを嫌うその理由。伯母さ
んは一体何をしたんだろう？

フランシス お父さんやお母さんは何て言ってるの。

ジョージ 何も言わない。でも何かひどく悪いことだって、

伯母さんのしたこと。

フランシス 悪いこと。そうかも知れない。

ジョージ 何なの。

フランシス 最後になって、私かあの女か、どっちかにし

て、と言ったの。

ジョージ でもそれは悪いことじゃないじゃないか。

フランシス それを決めるのはあの人の。

ジョージ それだけのこと？

フランシス そう思うわ。

（フランシス立ち止る。ジョージ、助けようとする。）

フランシス 大丈夫。もういいの、ジョージ。ええ。慥

に他の理由はないかって考えてはみたわ。でも、ないの。

ジョージ じゃあ伯母さんにみんなが敵対しているのは何
故だろう？

第二場

フランシス（厳しい声で。）「貴方の叔父さんのレヴェンド・ウイリアム、あの人は朝のお祈りのお経だつて碌に読めやしない。それなのに何故カントベリーで司祭長席に坐る身分になったの。あなたのおとう・・・あ、これはいいわ。ネルソン卿は確かにイギリス中に大きな影響力をもつ人物だわ。それに親戚には親切。」

ジョージ 「貴方のおとう・・・」まで言つてやめたね、伯母さん。「貴方のお父さんは何故今、東インド会社の社長なの。」と言おうとしたのなら、僕には答がある。リバプール卿が口添えしてくれたんだ。

フランシス リバプール卿にそれを言させたのは、じゃ誰なの。

（間。ジョージ、答なし。あるとすれば涙か怒り。そしてこの二つともジョージ、ぐつとこらえる。）

ジョージ 伯母さんはじゃあ、伯母さんに敵対させるために伯父さんが僕の父を買収したつて言つんだね。

フランシス 私は言つていない。それはお前が言つたの。ジョージ 伯父さんはどうしてそんなに伯母さんを憎むんだらう。

フランシス 分からないわ、ジョージ。あの人のことですよの、何か理由がある筈だわ。何かが。それが何か分かるといひんだけど。

（フランシス、回れ右して去らうとする。暗転。海軍の軍樂隊の音が聞こえる。群衆のざわめきと歓呼。この音は次の場の最初まで続く。）

（ネルソンの姿は我々の普通想像している通り。軍服の正装。四つ星。右目には黒い眼帯。右腕がないため、その袖はチュールニックの中にたくしこまれていて。どつやら窓の外を眺めている様子。外には群衆。海軍次官バラム卿が机についている。バラムは八十歳。最近この地位についたばかり。今まで一度もネルソンに会つたことはないが、ネルソンを恐れていない。また、外国からの侵略の脅威の下にあるこの時期では、この地位は最も危険。しかしこの地位を恐れていない。）

バラム（椅子を指差して。）ネルソン、坐つてくれないか。その窓の傍に立っていると、群衆が興奮するばかりだ。君のここへの訪問を聞き付けて連中はやつて来たよつたな。

ネルソン 私のでいで連中が来たと仰いますか、バーハム卿。

バラム そつらしい。私の名前はバラムだ。バーハムではない。

ネルソン 失礼しました。副官は少なくとも次官のお名前を正確な発音ぐらい知つておくべきです。

バラム それは無理だ。私がこの地位についたのはつい最近だし、この次官という地位だつて最近できたばかりだ。

（ネルソンに席を勧める。）

ネルソン その両方におめでとつを申し上げます。

バラム ありがとつ。仕事に入るか。（書類を取り上げる。）議会の連中から君の取つた作戦につき、次のように言えと言われて来ているんだが・・・

どうぞ省略なさって下さい。別に議會を馬鹿にしている訳ではありません。ただ閣下もご存じの通り、それはいつでも状況次第であれこれ変わるものですから。ですから次官としてはなく、エート・ミドルトン提督としてお話し下さい。(バラム頷く。)

ネルソン では提督としてお答え下さい。私はヴィルノーヴを西インド諸島まで追いかけてそれから帰ってきました。その間イギリスは空(から)にしていたことになりましたが・・・この私の行動に対する評価をお訊ぎします。

バラム 全く空ではない。私が海軍の、ある勢力を配置しておいた。

ネルソン ナポレオンは八時間の制海権を持ちさえすれば、イギリス侵略は可能だと言っています。その八時間を与え、彼の侵略を食い止めるに十分な配置はなされていませんでした。私への評価は？

バラム 事實は・・・

ネルソン 事實はヴィルノーヴにそれを命令する勇気がなかった。しかしそれは私の質問への答にはなっていません。

バラム いや、答になつてはいるだろう。ヴィルノーヴがその勇気を持ち得なかったのは、彼を追っていた人物が何者であるかを知っていたからだ。別の提督であれば勇気が挫けることはなかった筈だ。

ネルソン それは単なる推測で・・・

バラム 君だつてそう思っているんだ。

ネルソン そう。思っています。(ニヤリと笑つ。)
確かに追いかける時に分かつていました。あけすけに言えば、私

が追跡しているということだけで、戦艦一、二隻分多くやつら恐れさせるだろうと・・・

バラム いや、五隻分だ、ネルソン。これが私の評価だ。他の者だつたらもっと多いかもしれない。

ネルソン 次官殿の評価ならば勿論少なすぎるなどと不平は申しません。

バラム 君が話している相手は提督だつたのではないのか。

(間。ネルソン笑つ。)

ネルソン ははあ、気にいりました。皆は今度のお前の上司は気にいらん筈だと言っていました、違いますね、これは。

バラム 有難う、ネルソン。さてと、君の質問は、私だつたらどうしたか、という事だ。あの時、私がツアーロンで指揮を取つており、ヴィルノーヴが大西洋へ逃げ出したとしたら、14

(ネルソン頷く。)

バラム 君のようにはしなかつたらうな、ネルソン。

ネルソン はあ。

バラム ブローニーにはナポレオンの全軍が控えている。こちらは武器といつても鎌とか鍬みたいなものだ。上陸されれば一たまりもない。ヴィルノーヴを追いかけて世界を半分横切るような真似はしない。私だつたら守備一辺倒だつたらう。しかし、なんと言つても私の名前はただのミドルトンだ、

ネルソンではない。

(間。ネルソン笑つ。嬉しくて喜びを抑えられない。)

ネルソン 生まれて初めてです、このような褒め言葉を戴

いたのは。ご親切に。勇気を鼓舞されます。あの時の私の決定は辛く、危険なものでした。閣下にはもうお分かり戴けた筈です。何故私はその、議会の私に対する声明文を読まないで欲しいとお願ひしたか、その理由が。その文章は今の閣下のお言葉の百倍はあるでしょうが、意を伝えるところ、閣下の十分の一もないでしょう。お言葉身に沁みました、次官殿。

バラム ほほう、次官に戻ったか。

ネルソン（笑う。）次官殿は次官殿ですから。それに勿論海軍省にも敬意を払っています。（調子を変えて。）しかしあの追跡の時の苦しさ……

バラム 分かる。

ネルソン 急にこんな大きな賭に走った自分、あまりに無謀な賭、それも単なる直感で、思い付きで踏み切ったこの決定……なんていう危険にさらしたんだ、この自分の……

バラム 評判を。

ネルソン（急に黙る。）ああ、次官殿はそうお考えで……

バラム 失礼した。勿論君の祖国だ、危険にさらしたのは。

ネルソン より大切？ 勿論私は自分の評判、名声を誇りに思っています。それに、お気づきでしょうが、さっきの群衆の歡呼、あれが私は好きなのです。しかし個人の名声と祖国の安全を比べるなど、どうして出来ましょう。野党のフォックス氏の考えです、それは。

バラム フォックス氏の演説は最近とみに愛国的になつてきたな。革命家としてのナポレオン、それに熱を上げていたのが、冷めてくるのに反比例してイギリスへの愛が高まつて

来ているようだ。

ネルソン（誠実に。）反比例だろうが、正比例だろうが、イギリスへの愛が他の何かから影響を受けるというのは理解出来ません。イギリスを愛するという事は、人を愛すとか、物を愛すとか、理念を愛すとかそんな事とは違つたのです。自分の国だから愛すというのでもありません。それがイギリスだから愛すのです。そしてもしこのイギリスを愛さないなら、そんな奴は勝手にしろ、です。ヴワラ・トウ。それだけのとき。フランス人ならこう言うでしょう。フォックス氏の議論は愛国心を安物にしているだけです。

バラム 分かった、ネルソン。君の愛国心はよく分かったよ。

ネルソン それではまた仕事の話に。我が国存続のためには攻撃あるのみ、とお考えですね。これは私の考えでもありませんが。

バラム 最も大胆な手段、それがいつでも最も安全な手段

なのだ。これは君の言葉じゃなかったかな、ネルソン。

ネルソン 戦争をする、それは勝つたためにするのではない

でしょうか。

バラム 誰もがそれに賛成するとは限らない。この島に留まつていることで、平和が保てると思つているものもある。

ネルソン 平和？ ナポレオンと。

バラム それが可能と思つているものもある。

ネルソン 平和が？ あの男は自分で王冠を被り、世界の

皇帝であると自称して……

バラム 「世界の」とは言わなかった、ネルソン、「フラ

ンスの「どまりだ。まだ。

ネルソン それはつまり、「ヨーロッパの」の意味です。そして次は「世界の」とくる。次官、この現代のシーザーは全世界を席捲するつもりでいます。現に言葉に出して宣言しています。こんな男と平和ですって？ 気違いざたです。

バラム じつと守りを固めていれば、そのうち飽きてきて我々をそのままにして置くだろう。こう考えるのもいる。

ネルソン（軽蔑するように。）そうですね。皇后を抱くに飽きれば、次はチユイルリー公園で庭師の仕事でもするでしょうよ。次官、我々の相手は世界の支配者たるの自信を持っている男です。そのことを隠してもいない男です。自由、平等、博愛の名のもとに勝手なことを言っています。しかし、この自由、平等、博愛の意味がこの男に分かっているともお思いですか。（心配そうに。）ピット首相はあの男の公けの演説をちゃんと研究しているんでしょね。

バラム 心配はいらない。そこは怠りない。

ネルソン 成程。それならあの男の次の行動は分かっている筈です。世界を席捲するためには、まずこの島を破滅させねばならない。従ってこの島はまずあの男を破滅させねばならない。これは議論の余地のないところでしょ。

バラム その通り。しかし問題はこの島がそれをいかにして実行するか、その方策だ。

ネルソン 溝の後ろにただじつと隠れて、奴がそれを越えてくるのを待ち受ける、これは駄目です。我々の方がそれを越えて奴に攻撃をかけるのです。勿論、鎌、鍬のよゆうなちやちな武器ではなく、我が国の工業が作りうる最上の武器で武

装して。

バラム それをどこに上陸させる。

ネルソン どこでも。ヨーロッパの海岸線は三千マイルあります。いくらナポレオンでもその長い距離のどこにでもいるという訳にはいきません。しかし私の意見をピット首相に述べるとなれば、ナポリ王国です。最近我が軍との連絡がつかしました。ここはナポレオンのアキレス腱と言われているところです。（重要なことはそこにはないといった風に。）勿論誤解のないよう申し上げておきますが、個人的な執着があつての提案ではありません。

バラム（用心深く。）追放されたナポリ王国の国王及び女王に対する君の深い友情関係は聞き及んでいる。

ネルソン（おかしがって）では故ナポリ大使の夫人に対する私の友情関係は。

バラム 新聞は読んでいる、私は。

ネルソン それから漫画も見ておられる。

バラム（堅く。）そちらの方はめつたに。

ネルソン もっとしばしばご覧になることをお勧めいたします。なかなかよく描けています。ただあれではレイディ・ハミルトンが私に比べてちょっと大きすぎます。しかし漫画だけでは本当のことは分かりにくい。あ、何の話でしたしょ。

バラム ナポレオンをナポリで撃つ、というところまで。

ネルソン そう。しかしそこだけではない。ポルトガルでもスペインでも、それから遠征軍をリスボンにも・・・

バラム（急に遮って。）話し中を失礼、ネルソン。ここは

海軍省であつて、陸軍省ではない。ヨーロッパ大陸のどこを攻撃するにせよ、海上の完全な、徹底的な制覇が必要と思つてどうか。

ネルソン 勿論です。それが必要条件です。

バラム（大声で。）それをどうやるんだ。

ネルソン 敵艦隊を絶滅させて。

バラム 言うだけなら易しい。

ネルソン 実行が易しいのです。敵の連合艦隊は今カデイスにひきこもっている。（あそこでは長居はできない。）まもなく出て、攻撃をかけて来る筈です。あそこではあれほど大きな艦隊を養つていくだけの容量がない。

バラム 誰がその話をした。

ネルソン（優しく。）カデイスの收容能力なら自分の掌（たなごころ）を差すようによく知っています。

バラム（声を上げて。）そのことじゃない。敵の連合艦隊が今カデイスにいることを誰から聞いたのか。

ネルソン 駆逐艦ユーリアラムのブラックウッド艦長に。艦長はカデイス沖のコーリングウッド提督からの至急便を持っていました。

バラム あれは私宛てだ。

ネルソン 私の家はポーツマス通りにありますから。

バラム ピット首相もまだその手紙を読んでいないぞ。

ネルソン まだ！ ダウニング街までもっと足の速い使者を雇うべきです。首相はこの時点ですでに手をうっていないければならないことがあります。例えば……

バラム 失礼だが、ピット首相より前にこの私が今何をし

ていなければならぬかを教えて貰いたい。

ネルソン 喜んで。コーリングウッドの艦隊を補強すべく、持っているすべてを送り出さねばなりません。数週間後に、敵はカデイスから出て来ます。そこを我が軍がたたき潰すのです。全滅させるというのが正しい言葉でしょう。このチャンスは二度と巡ってくることはありません。

バラム 馬鹿なことを聞いていいかな。持っているすべてを送りだすと言つたが、その中にネルソンが含まれているのか。

ネルソン いいえ。含まれていません。

（問。）

バラム その気力がないと……

ネルソン 気力？（ほとんど餌にかりそうになり、立ち上がろうとするが、抑える。）次官に思いだして戴かなければなりません。私は病氣休暇を戴いているのです。事実私は非常に重い病氣に罹っているのです。

バラム 重すぎて再び出撃することはできない、ということか。

ネルソン 重すぎて再び出撃する気力が無いという事です。

バラム ピット首相は悲しまれるだろう。首相は勿論それを希望するし、また当然それはこの国の希望でもある。

ネルソン この国も首相も、私に要求するところが大きすぎます。（怒つて。）ロード・バラム、私はびつこです。片目しかない。病氣で殆ど死にかけています。みんな首相および我が国に奉公した結果です。そして今はもうお役ご免になっているのです。戦艦も水兵も指揮官も、今までで最高の状態

にあります。おまけに敵に遭遇した時の我が軍の作戦はもう既にできていて・・・

バラム 君の作戦だね、ネルソン。

ネルソン（肩をすくめて。）コーリングウッドがそれを使えばそれは勿論彼の作戦です。それに彼は使う筈です。敵の絶滅にはこれしかないのですから。

バラム その作戦を訊いてもいいのかな。

ネルソン またいつか、日を改めて。今はある婦人を待たせていますので。

（ネルソン立ち上がる。）

バラム（かなり固い表情で。）すまんが、ネルソン、暇な時にでもそれをメモにして私に見せてくれないか。

ネルソン 喜んで。では失礼してよろしくごさいますか。

（バラム無言。固い間。）

（ネルソン、突然絶望的な哀願の調子になって。）

ネルソン ああ、お願いです、次官。少しは私のことを哀れと思って下さい。私の今の境遇を少しは考えてみて下さい。

バラム 君の今の境遇、それは分かっているつもりだが。

ネルソン 十分ではありません。その顔に出ています。その顔は「俺は認めない。」と書いてあります。私は「俺は認めない。」という顔を見るのが嫌いなのです。誰からも認められない。それほど子供っぽい男なのです。それが次官殿であればなおさらです。次官、次官殿の最後の恋はいつでしたか。

バラム 慥か、少尉の時だった。

ネルソン そう。私も少尉の時恋をしていた。いや、あれ

は恋だったろうか。まあいい。しかし提督という地位で恋をすること、この年で、四十六歳の跛（ちんば）の男が恋をする。氣遣い沙汰です。これ以上はない幸せ、それにこれ以上はない苦しみです。同情して戴きたい。いや、同情が無理なら、せめて多少の理解を要求したいのです。私はあれに丸二年間会えませんでした。二年間軍艦の船室の中です。一度もその間陸にあがったことはありません。マリリアの熱に襲われ、船酔いに悩まされ、疑惑と嫉妬で胸はさいなまれ・・・（急いで。）嫉妬に根拠がある訳ではありません・・・ああ、その気になつたら告訴してやろうと思つた人物が何人いることが。全くひどい中傷です・・・しかし中年になつてある女に夢中になる。これには理由もへちまありません。その女のことしか考えられなくなる。そういうことです。（バラム、⁸机をじつと見つめる。他のどこを見ていいか、バラムには見当がつかない。）しかしこれはもういい。こんなことを話そうと口を開いたのではなかつた。どうか事実だけを見て判断して下さい。私は丸々二年間あれに会えなかつた。それから五年の期間をとつても会つたのはほんの数回。何故ならナポリ勤務を免ぜられてから、議会は私をあれから引き離すことにひどく熱心になつたからです。次官、お願いです。どうかこの事実をお考え下さい。

バラム 事実関係は分かっている、ネルソン。それに同情もしている。

ネルソン それなら次官のその「俺は認めない。」という顔をなんとか・・・

バラム 私の顔は自分の感じていない事は表現できない仕

第三場

組みになっている。君のこの話の場合だが、これは認めるとか認めないとか、そういう基準で考えられるものではない。ただそういうものとして受け入れるしかない類（たぐい）のものだ。

ネルソン 理解と哀れみをもってですか。

バラム 哀れみをもってだ。

ネルソン 哀れみと軽蔑をもって。

バラム 違う。私が軽蔑しているのは、この自分だ。この鈍くて散文的な心の持ち主は、その華やかで絢爛たる君の問題 中年になってある女に夢中になる。その熱 を理解する能力がないのだ。（書類を出しながら。）これを取っておいてくれ。

ネルソン 何でしょう。

バラム 大西洋での君の最近の戦績に関する海軍省の評価だ。読む価値がある。それに熟練した君のことだ。読むのほんの一、二時間もあればすむだろう。

（間。ネルソン、バラムを見る。相変らずその顔に、公式な「俺は認めない。」という表情を見てとる。ネルソン、書類を受け取る。）

ネルソン（御辞儀をする。）畏まりました。

バラム（立ち上がりながら。）では頼む。

（ネルソン、さっと部屋から退場。バラム、それをじっと見る。再び外の楽隊の音が聞こえる。今度はその当時の陽気なはやり歌。）

（暗転。再び遠くから万歳の声が聞こえる。）

（照明がエマ・ハミルトンの肖像画に当たる。彼女の十代の時に描かれた絵である。もう一つの照明がひどく黯くちやになつたベッドを照らす。客席からは寝ている女の髪の毛だけが見える。最後に必要な照明が全部ついて、ロンドン、クラージス街、エマ・ハミルトンの寝室兼化粧室が現われる。寝室内の化粧室の部分は幕で仕切られている。フランチェスカが、ジョージ・マツチャム・ジュニアを化粧室に導き入れる。フランチェスカはエマの付人。中年。ナポリの百姓の出。エマが三、四年前、ナポリからイギリスに連れて来た女。しかし全く英語を学ぼうとせず、必要最小限の英語しか話さない。ジョージ、ひどく落ち着かない様子。このように奥まった所へ案内され、行儀に気を付けようと、気を張り詰めている。）

フランチェスカ（指差して。）ここに待つ。

（フランチェスカ、寝室の部分に入る。ジョージ、絵を見つめている。フランチェスカ、女主人の肩を揺する。）

フランチェスカ *Escolenza*.（ご主人様。）

エマ（動かない。）うるさい。

フランチェスカ *Escolenza, il Signorino Matcham sta qua.*

（ご主人様、マツチャム様がいらつしやいました。）

エマ（寝返りをうって。）お前間違いだね、フランチェスカ。まだ真夜中だよ。

フランチェスカ *Vi piacerebbe, non e vero? Quante volte stanotte?（ワインですな、きつと。これで今夜は何杯目ですか？）*

(フランチェスカ、幕のうしろに入る。)

エマ (後ろからフランチェスカを呼んで。) *Stai zitta, cetina* . (お黙り。馬鹿。)

(エマ、起きてベッドの上に坐る。髪は乱れて、寝不足のため目は膨らんでいる。勿論今が彼女の女盛りではない。彼女の四十年の人生の中で最も美人の時は疑いもなく、現在ジョージ化粧室で見ている肖像画の時である。フランチェスカ、グラスを持って入って来る。グラスの中には赤ワインが入っている。これをエマにわたす。)

エマ *Con cognac?* (ブランデーは、入っているね。)

フランチェスカ *Naturalmente.* (ええ、勿論。)

エマ *Naturalmente* とは何ですか。今朝は偶々ひどく欲しい気持ちになっているだけ。(グイと飲み、もう一方の手で七の数字を示す。)

フランチェスカ *Eccellenza?* (七つ。)

エマ お前の質問への答だよ。

フランチェスカ *Sette? Ancora un anno a mare e Puffi!*

(七杯? そんな調子ですと、旦那様がもう一年海にいらして帰って来られた時には、お払い箱ですわ。プーフ。(訳注 プーフと言つ時、手で首を切る仕種をする。)

(フランチェスカ、エマに鏡と櫛、それに化粧箱をわたす。)

エマ 随分失礼なことを言つね。何故お前なんか雇つたんだらう。

フランチェスカ *Puffi! Un no di vostra eccellenza e sarebbe la vittoria di Napoleone* . (でも今は奥様が「ちよつと」「いや」と仰りでもしよつものなら、あの方すくナポレオンに負けてお

しまいですわ)

エマ (髪を熱心にとかしながら。) それでお前、私に「いや」と言わせたいの?

フランチェスカ *Qualche volta e necessario.* (時々には必要ですわ。)

エマ *Mai.* (駄目。)

フランチェスカ *Ne anche per fare Merton piu bello?* (このマーロンをもう少し綺麗にするためでも?)

エマ そんなことはどうでもいいのよ。どつせその気になればこんなお屋敷、もう一つだつて作れるんだから。ねえ、フランチェスカ、私はいやつて言えない性分なの。誰にだつて。特にあのネルソン。偉大な、私の愛する、雷(いかずち)の神ゼウス オリンポスの主にはね。

(この時、大きな身振り。その拍子に鏡が手から離れ、部屋の反対側に飛ぶ。)

エマ 畜生! いまいました鏡。割れたか。割れていたら、これから七年の間運が悪いつていじや。

フランチェスカ *No, no, eccellenza. Non e successo niente.* (いいえ、いいえ、そんなこと。)

エマ 鏡に写る姿を見たつて喜びはわなくなっていたんだだけ、今度はどうかしら。

(フランチェスカ、鏡を渡す。)

エマ 前よりもつと悪い。(髪をとかすことを続ける。)

そのジョージ マッチャムつてごんな子。
フランチェスカ *Un ragazzo qualunque.* (普通の子供ぢやわ。)
エマ ネルソンの甥で普通の子なんていうのはある訳がな

いでしよう。どう？ 私。

フランチェスカ *Bellissima Emma Hamilton, come sempre.*
(いつもの美人のエマ・ハミルトン。)

エマ 嫌なことを言つね。(フランチェスカに蹙め面をする。その子を通して、それからワインをもう一杯。

フランチェスカ *Con cognac? (ブランドー入り?)*

エマ *Pochissimo, pochissimo. (ほんの少くね。)*

フランチェスカ *Mangiare dopo? Faresti meglio.* (あとで食事をする？ 何かお召し上がりになつた方がいいですわ。)

エマ 今朝は胃が何もうけつけない。でも、そうね。お風呂の時コールド・マトンでもつまもう。

(フランチェスカ、ジョージに近づく。ジョージ、帽子をいじくりながら、固くなって立っている。)

フランチェスカ *Sua eccellenza vi aspetta.* (奥様がお会いになります。)

(ジョージ、意味が分からず、居心地悪そうに立つた儘。フランチェスカ、手振りで招く。)

フランチェスカ *Venite, Venite.* (こちらへ。)

(ジョージ、緊張の極。絵に最後の一瞥を与え、フランチェスカに従い、寢室の部分に入る。そしてベッドに近づく。エマ、ジョージを迎えるために頭をそちらに向け。ジョージ、何かの間違ひではなかつたかと不安そうに立ち止る。フラン

チェスカ、そのまま化粧室の方に進む。)

エマ(両腕を差し伸べながら。) あら、ジョージなのね。可愛い子。こちらに来て。キスさせて頂戴。

(フランチェスカのようなごく親しい人物に話す時以外は、

そして、自分を完全に制御している時は、エマは即座にちやんと礼儀に叶つた話し方が出来る。それを観客は理解する。

現在では訪問してくるイギリス貴族達の嘲りの対象になつてはいるが、彼女がかつて確かにナポリの英国大使夫人であつた事を納得させるものである。彼女にはかなり強い訛りがある。ペダンチックにその地域を限定すれば、それはリンカーンシャーの訛りである。それから、表現を態と粗野にする癖がある。これは自分の出身が卑しく素性の知れないものであることを隠すまいとする誇張した正直さから来るものである。

しかしそれにも拘わらず、観客は彼女がかつて、ウイリアム卿の主催した、各界の名士を招いた、上品な晩餐会を取り仕切り、この国の錚々たる人物達と親密な・・・多くの場合、ごく親密な・・・関係にあつた女性であることを見てとることが出来る。)

エマ 許して頂戴ね、ジョージ。こんな、ベッドでなんか、あなたの訪問を受けたりして。でも、今朝はちよつと訳があつて、身体の調子がよくないの。

(フランチェスカ、グラスを一杯にして持つて来る。)

エマ(ジョージに。) こんな時にはこれって、医者に言われているの。

ジョージ はい。お大事に。

エマ そのうち大丈夫になるわ。心配しないで。

(ジョージに向かつてグラスを上げ、グイと一気に大量に飲む。その後ゲップ。抑えようとしたのが、うまく抑えられずに出てしまつ。エマ、ジョージの腕を掴む。)

エマ ねえ、ジョージ。あなた、ここに來られて嬉しいん

でしよう？ このマートンに來られて。

ジョージ ええ、勿論です。

(次の台詞の間、召し使いの行列が寢室部分を通り過ぎて、化粧室へ進む。まず下僕が風呂桶を運ぶ。次に下女達がタオルと夜着などを、その次に下僕達が湯気の上がつっている湯を、大きな容器に入れて運ぶ。最後にこれらを指揮する女中頭。)

エマ (ジョージを見ながら。) そう、あなたの顔、言われなくてもマツチャム家のものだわ。お父さまがあんなにこの町で重要な地位について、あなた嬉しいでしょう。(ジョージ、あまり嬉しくない様子で頷く。)

エマ そう、私のネルソンは随分頑張ったわ、このことでは。私が頼みこんだもの。ネルソン家の人達は皆厚遇されなくちやいけないの、イギリスから。そう、あなたが甥のジョージなのね。このマートン・クラージス街に最後にやって来たネルソン家の人。(ジョージの身体に触れ、親しみを示す。ジョージ、余計固くなる。) 先週はそれはもう大変な来客だったのよ。マートンのこの家は満員。大臣方、公爵達、伯爵達。でもこんな人達、私、鼻もひっかけない。本当よ、ジョージ。私が好きなのはネルソン家の人達だけ。だって、あの人と私がかち合っているもの、それは何でも大好きなんだから。あの人の家族は私のものなのよ、ジョージ。分かるでしょう？

ジョージ はい、レイディ・ハミルトン。

エマ レイディ・ハミルトンは止めて。

ジョージ では何とお呼びすれば・・・

エマ 伯母さんよ、勿論。エマ伯母さん。(彼を見て。) 貴方、お父さんのお気に入りね、きっと。目のあたり私のネ

ルソンに似ているもの。

ジョージ (熱を込めて。) え、本当ですか。

エマ お気に入りっていうこと？

ジョージ いいえ、目が伯父さんに似ているっていうこと。

エマ あの人のかわいそうな目。(化粧を続けながら。)

そう、あの人の目に似ているわよ、ジョージ。自慢？

(ジョージ、この分かりきった質問には答ええない。)

エマ 勿論自慢ね、ゼウスの甥だつてことはあなたもオリンポスの神々の一人つていうことだもの。私、あの人のことを時々からかって雷(いかづち)の神ゼウス、つて言つてやるの。でもそう遠くないわ・・・私の気持ちでは。

(ぱつと芝居の姿勢になつて、しかしそれほど大袈裟ではなく。グラスをかざしながら。)

エマ おお、いかづちの神ゼウス。全ての神に君臨する神よ。(ほとんど、ワインをこぼしそうになる。) 畜生！ 跳ねとびやがつて。ベッドがしみになつちゃう。(フランチェスカ登場。)

フランチェスカ *Quallo è tafeta verde?* (緑色のタフタになさいますか?)

エマ あんなものが着られますか。外は黒山の人のなのよ。緑じゃまるで道化じゃないの。自分で選ぶわ。(ジョージに。) ちよつとこれを。(グラスをジョージに渡し、ベッドから降りる。) そうよ、ジョージ、あなたの伯父さんは、本当の英雄。後にも先にもこんな人は出て来ない。良い人で偉大な人。普通は両立しないの。悪で出来ているこの世では。(フランチェスカ、部屋着を着せる。エマ少しよろめく。) ちゃんと

支えて、このボケナス。(ジョージの顔を見て。)ご免なさい。頭痛のせいなのよ、ジョージ。それにあの人と私、ゆうべ随分遅かったの。

ジョージ 宮廷ですか。慥か新聞で、舞踏会があったつて。

(次の台詞の間、召し使いの行列、しきりの幕のうしろから出てくる。風呂の用意がすみ、出て行くのである。エマ、疲れ果てて椅子に坐る。)

エマ(そっけなく。)いいえ、宮廷ではないの。あの人と私は、そう、あまり宮廷には参内しないの。とにかくこの国にはね。ナポリの宮廷は違うのよ、勿論 ナポリの女王……ああ、あの方、世界で一番の私の友達。ああ、お会いしたい。ねえ、ジョージ、私とあの方はとつても、とつても近い間柄だったのよ。だから時々は……そうね、さびしくなったり、あの恐ろしいジャコバン党のことを思って脅えたりした時……だってあいつらにあの方の妹を殺されたんですものね、あのかわいそうなマリー・アントワネットを……そんな時は私達、同じベッドで一晩中一緒に寝たのよ。それにあのナポリの王様だって。王様はいつだって私をたててくださったわ。でも、寝るつていつたって女王様と同じじゃないわよ。だけど、何、一体。このイギリスの貴族つて言っているもの、それにあのドイツの貴婦人、あんなもの、私に言わせれば「王家」なんてものじゃ、ちつともありはしない。

(下僕、盆の上に名刺をのせて登場。エマに渡す。エマはワインをがぶ飲みしているところ。)

エマ(名刺を指差しながら。)ロード・ミント。ネルソン

の古い友達。ネルソンの、というより、私達二人の友達。でも長い間、会っていないわ。(下僕に。)お通しして。あの人、スコットランドかどこかに住んでいるの。随分さびれたところ。昔はどうだったか知らないけれど。ウイーン大使だったのにあんなところに住んで。ネルソンと私、そこに行ったことがあるの。(フランチェスカに。)お湯冷えない?

フランチェスカ Gi' stanno due brocche ancora piene (まだお湯は丸々二杯ございますわ。)

エマ(ジョージに。)あの人私達のことを追つてマートンにやってきたのよ。

フランチェスカ L'ambasciatore Minto. (ミント大使殿です。)(ミント登場。四十代。上品な服装。立ち居振る舞いも洗練されている。)

ミント(御辞儀をし、エマの手にキス。)(レイディ・ハミルトン。本当に暫くでございました。お会い出来て洵に嬉しうございます。)

エマ あなたに口をきいてあげるかどうか分からないわよ、ミント。ウイーン以来、私のことを蛇を避けるように避け続けて。

ミント レイディ・ハミルトン。ウイーン以来、私はあらゆる人間から身を避けて来ました。なにせロックスパークシャーに住んでいましては……

エマ それは違いますよ。私は知っています。宮廷にはいつも参内していた筈です。

ミント(肩をすくめて。)ああ、宮廷ですか。それは仕方がありません。しかし他の場所には決して。

エマ それに昨夜の舞踏会にだって行った筈。賭けてもいいわ。

ミント ええ、行きました。お一人をお捜ししたのですが・

エマ 私達は招待されなかったの。それはあなたもよくご存じの筈。

ミント 見落とされてしまいましたね。

エマ 見落とし。見落としなんかであるもんですか。どんなことがあっても私達を招待しないつもり、あいつら。私は構わない。でもあの人が気の毒。二年前西インド諸島のことが終わってそれから後は精々が宮廷でのお茶会、それどまり。

ミント、あなただっけかなり暇をかけているじゃないの。ネルソンがイギリスへ帰って来たと聞いてからあなたの根城のロックスバークシャーから出て来ようと決心するまで。会って嬉しいからこないやみも言っんですからね、勿論。

ミント この町でちょっとした仕事があつて。

エマ 私に会う為なら仕事はなかったのね。ネルソンに会う為なら仕事があるの。(ジョージに。)ロード・ミントは世界中の誰よりもネルソンに好かれているの。勿論、私の次ですけど。そうね、ミント。

ミント そつであればよいのですが、レイディ・ハミルトン。でも二番手が私だと言つても、一番手とは差が、どんなに謙遜な言い方をしたつて、「大きい」です。

エマ(ミントの視線が丁度さまよつてゐるあたりの自分の身体を隠しながら。)
「大きい」?

ミント いえ、申し上げたかつたのは、私は女性でもない

し、容姿だつて残念ながらとても太刀打ちは出来ないと・・・

エマ 女性でない。容姿で太刀打ち・・・駄目ね。ピント外れの台詞。これはジョージ・マツチャム・ジュニア。ネルソン提督の甥。

ミント はじめまして。

ジョージ はじめまして。

(この場の終まで、エマとミント、ジョージを終始無視する。ジョージ、先程エマにおされてベッドに坐らせられたその位置に不本意にも留まつた儘。グラスを持たされていて、エマ、時々それを取つて飲む。フランチエス力は化粧室に行つたきり。)

ミント(エマに。)信じて下さい、レイディ・ハミルトン、只今申し上げた言葉はたとえ多少褒め言としての外れであり、ましようとも、その意図するところにおいて、決して間違つてはおりません。その素晴らしい姿態、これはいつでもレイディ・ハミルトンならではのものです。

エマ あらあら、よくもまあ。あなたが女だつたら「ばいた」と怒鳴り付けて、追い出している所ね。そう、太つたのは幸せのせい。ねえ、これだけは言わせて、ミント。私にとつて問題になる唯一の人、その人からは何の文句もないの。このことでは、とにかく私のネルソンが来年また海に出て行つたら、私瘦せて瘦せて、影法師みたいになるの。見ていてご覧なさい。

ミント 来年?

エマ(荒々しく。)一年間の休みが取れないつていうの?

ミント(肩をすくめて。)一生、休みはないでしょう。

エマ 一生なし。貴方や政治家たちがそんな勝手なことを言っている、その一生も長くはないわ。でもそんな勝手なことは言わせない。貴方にだって政治家にだって。このことではあの人、私に誓ってくれたの。軽々しい誓いじゃなかったわ。

ミン ト それはそうでしたでしょう。

エマ 軽々しく破られはしないはず。(ミン トに諫めるように指を振りながら。) だからお節介は厭よ、ミン ト。貴方だって、他の誰からだって。分かるわね。

ミン ト お節介？

(二人はベッドの両端にいて、ジョージの頭越しに話す。)

エマ 貴方の考えなんかお見通しよ。皆と同じように貴方も私達二人を引き離したいの。出来れば何千マイルも向こうの海の涯に。次の選挙で議席を二、三個失いはしないかと気が気じゃないの。ネルソンは自分の妻でない女と暮らしている(これでね)。駄目。選挙民にこんなことを聞かせては。これは悪いこと。スキャンダル。こんなことを聞かせてピットに首相の地位を危うくさせるなんていけないわ。

ミン ト ちょっと思ひだして戴きます、レイデイ・ハミルトン。私はホイッグ党です。それから貴族議員です。選挙民におべつかを使う必要はないのです。従つてお疑いは無用でございます。

エマ お疑いは無用ではないわ。ホイッグでもトリーでも、平民でも貴族でも、王様でも女王でも、みんな同じ。みんなネルソンが必要な。掛け値なし、純粹のネルソンが。貴方方はみんな私達二人を引き離そうとしている。そのあと

言う言葉は決まっている。「イギリスの為にやったのだ。」(勝手な話。) 本当は自分達のための癖に。なんて馬鹿な考え。イギリスが本当に必要としているもの。それはね、ミン ト、生き生きして幸せなネルソンなの。失恋して元氣のないネルソン、憧れで半分死んでいるネルソン、そんなネルソンじゃないの。それで私のことは・・・貴方は私なんかどうなったって構わないの。(指を振って。) 貴方方の誰一人考えてもみない。ネルソンが死ねば私はゴミ箱行き。それが私に分かつていないでもお思い？ ミン ト。だからお節介はなし。分かるわね。

(問。)

ミン ト 「ばいた」という汚名は甘んじて受けましょう。性別は別にして。しかし「お節介」はやめて戴きたい。どうでしょう。だから単に「ばいた」では。

エマ(荒々しく、誠実な笑い。) そんな風に罵れたら貴方が好きになるわ、ミン ト。

フランチェスカ(登場して。) = bagno di vostra eccellenza si sta affiebando. (お風呂がさめてきまして・・・)

(エマ頷く。立ち上がる。以前よりは立ち上がり方が楽。)

エマ 貴方が「大きい」と言ったことから私、怒り始めたのね。「大きい」・「確かに凶星。大きくて目立って、旗竿の役目をして貰いたいのかしら。(再び笑う。)

ネルソンは私にその役目をして欲しいかも知れないわね。自分の旗を上げるのに楽ですもの。でもあの人旗は今の儘でも十分一本立ちしているのよ。

(ジョージからグラスを受け取り、大きく一飲み飲む。ミン

ト、エマの笑いに加わる。()

エマ ゆづべはあの人の旗、マストに釘で打ち付けられて、「降伏はせぬぞ」の意志表示。それに信号は「一晩中「接近戦」。(エマ、再び笑う。グラスを戻す時、ジョージに気づき、笑い止める。)

エマ ジョージ、隣の部屋へ。私もあとから行きます。ミント、貴方も。

ジョージ (早く部屋を出たくて。) はい、レイディ・ハミルトン。

エマ エマ伯母さん。

ジョージ 失礼しました。エマ伯母さん。

(ジョージ、控えの間へ行く。出て行くこととするミントを、エマ、呼び止める。)

エマ あの子、あれが分かったかしら。

ミント あの頃の年になれば大抵の事は分かります。それに面白がることにかけても、我々にひけは取りません。

(エマ、控えの間の入り口に現われる。ジョージが再び絵に見入っているのを見る。)

エマ 本物よりも絵の方が好きなのね、ジョージ。

ジョージ いいえ、滅相もないです。レイディ……

エマ 「滅相もない」お前の年で私がそんな言葉が使えていたら、私は今頃公爵夫人ね、きつと。

ミント (控えの間に入って来ながら。) 今からだって公爵夫人の線がありますよ。

エマ エマ・ブロンテ公爵夫人。ネルソン子爵夫人。たいした肩書きね。でもある事が成就するためには、その前にど

うしてもおこななければならぬ事というものがあるの。分かるでしょう、ミント。そう。バースの冬はリュウマチにはあまりよくないという噂ね。

ミント あその湿気がひどく體に悪いとか、何かの報告にありました。

エマ (グラスを上げて。) その湿気の健闘を祈って！ どんなトムも、どんなテイットもその湿気にやられてしまえばいい。こう言ったところでそんなに下品な意味はないのよ、ミント。私のことをこの五分間じろじろ見ながら貴方が考えていたような下品なことだね。(ジョージを呼ぶ。) ジョージ、ミント卿と話をしているね。でもこの人の私についての話は一言だって聞いちゃ駄目よ。私のことが嫌いで嫌いでたまらないっていつ人なんですからね。それも理由は嫉妬なの。

ミント おやおや、これではまるで「ばいた」は私じゃなく²⁶

くそちらの名前ではありませんか、レイディ・ハミルトン。(エマ、化粧室へ向かう途中で笑う。グラスを飲み干し、幕のつしろに隠れる。ミント、控えの間でジョージに近づく。)

ミント (間のあと。) さっきのあの人の言葉は勿論冗談だ。分かってる筈だね。

(ジョージ、面食らって当惑している。無言。それが一番安全。ミント、テーブルの上の飲み物の盆からワインを注ぐ。)

ミント 一緒にやる？

ジョージ いいえ、結構です。

ミント 許しが出ていない？

ジョージ いいえ、許しは出ています。

ミント じゃ、やるつ。(グラスに注ぎ、それをジョージ

に渡す。)その顔付きをなおさなくちゃ。

ジョージ 顔付き?

ミント レイディ・ハミルトンに初めて会った時は、誰でも必ずそんな顔になるんだ。シヨックだね。特にうぶな若者の神経には響く。それに君はネルソン卿の甥だ。他の誰よりも君に一番響く。その顔は驚きの顔だ、マツチャム君。それは取り除かなければ。マートンではその顔は流行らない。君の健康を祈って!

ジョージ (少し飲んで。)有難うございます。

ミント (感心して。)これはいいワインだ。誰が金を払うんだろう。君の伯父さんじゃないな。伯父さんには金はない。こんなに上等なワインなら一本分払えるかどうかだって疑わしい。(再び飲んで。)うん、上等だ。

ジョージ レイディ・ハミルトンは裕福だって思っていました。

ミント 金以外の福ならね。ウィリアム卿は彼女に借金しか遺さなかった。あ、そうだ。彼女の話はするなと厳命を受けていたんだ。君は学校に行っているの?

ジョージ はい。

(この時までにジョージ、また肖像画の方を向いている。)

(間。)

ミント 何処の?

ジョージ バースです。

ミント 学校は面白いかね。

ジョージ (ぼんやりと。)ええ。

ミント それは良かった。

(間。ジョージ、明らかに会話をしたくない気持ち。少なくともこういふ話題は。)

ミント (絵を指差して。)アリアドネーだ、まるで。慥かこの時は十六歳だった。かなりませた十六歳だ。

ジョージ (ゆっくりと振り返って。)レイディ・ハミルトンのことをお好きなんですか。

ミント マツチャム君、どうやら君は伯父さんの奇襲戦法の血を引き継いでいるようだね。

ジョージ すみません。

ミント あやまることはない。私はいつだって本当のことを言うんだ。嘘をつく必要がある時は別だが。私はレイディ・ハミルトンが好きだ。きつぶがよくて、悪気がない……忠実に情熱的で、それに親切だ。

ジョージ 親切?

ミント 非常に。勿論あの人の敵に対しては別だが。しかし敵と言っても大体はナポリの革命家達に限られている。

ジョージ 僕は身近にいるあの人の敵のことを考えているんです。

ミント (眉をひそめて。)成程。でも何故その人のことを気にしたりするんだ。

ジョージ その人は僕の伯母さんですから。

ミント いろんな事情から、その人は君の伯母さんじゃなくなつたんだ。今はエマ伯母さんなんだ。もつと飲んだ方がいい。さっきの顔付きがまた出て来た。

ジョージ いいえ、結構です。(絵を指差して。)ああ、僕には分からない。一体どこが……(言い止む。)

ミント 分からないって、何が……
ジョージ いいんです。こんなことを訊くべきじゃなかったんです。

ミント 訊くべきじゃないだろうな、マツチャム君。(ジョージが謝ろうとするのを手で止めながら。)その質問が不適切だからじゃない。たとえ訊いたとしても答がないんだ。ネルソンはどこが良くってこの女と……それが君の質問だろう？(ジョージ、頷く。)

ミント 人が他人のどこが良くて好きになるか、この質問は世界が始まって以来ずっと問われて来た。またこの世の終まで問われ続けるだろう。しかしこれに対するちゃんとした答なんか、めったにあるものじゃないんだ、マツチャム君。
ジョージ でもあの人は偉大な人です。(熱を込めて)ね、そうでしょう？ 偉大な人なんでしょう？

ミント そう。
ジョージ あの人の業績によつて？ それともあの人の人物そのものが？

ミント その質問はハーディ艦長に訊いた方がいい。ネルソンの旗手だ。業績も人物も彼の方がよく知っている。私が話せるのはただ「恋に落ちてしているネルソン」のみだ。

(間)
ジョージ 自分の妻をあの人にいいようにさせて放つておいているネルソン。僕はそれがどうしても分からないのです。

ミント 君の伯母さんだった人をね。いいようにするってどういうことかな。バースに毒入りのパイでも送ったのかい。
ジョージ (怒って。)伯母さんを見捨てさせるために、あ

の人は家族中の人を買収したんです。

ミント (肩をすくめて。)買収なんかされなくつたって、みんなとつくに見捨てている。それに買収はあの人がやったんじゃない。ネルソンのしたことだ。

ジョージ (怒りで固くなつて。)それは違う。嘘だ。
(間)

ミント マツチャム君、君に決闘を申し込む訳にはいかない。まだ若すぎる。だがお行儀のために尻をひっぱたく程子供でもない。君にはどうしても今の言葉を取り下げて貰わねばならない。

ジョージ すみません。本当に失礼しました。でもまさかネルソンがそんなことを。まさか。信じられない。それだけの意味です、僕が言ったのは。
(間。ミント、ジョージをじっと眺める。)

ミント (肩をすくめて。)フン、そうかも知れない。とにかくそんなことはどうでもいいことだ。君のかつての伯母さんは年二千ポンドで完全に満足している。それに加えて過去の栄光というものがある。

ジョージ それは違います。

ミント (微笑んで。)またかい？

ジョージ それは違つたということを、僕が知っているという意味です。最近僕は伯母に会いました。伯母は悲しんでいるのです。

ミント ほほう。涙か。涙といってもそう簡単には信じられない。君もいつかはこのことを学ぶだろう。特にこの場合、夫から見捨てられたとは言つても、年二千ポンド。楽に暮ら

せる寡(やもめ)なんだ。

ジョージ 伯母の場合は本当の涙です。

ミント 最後に会ったのは？

ジョージ 一週間前です。伯母は伯父宛の手紙を僕に託しました。

(間)

ミント そんなものをネルソンに渡してはいけない。決して。

ジョージ 渡されなければならぬのです。

ミント ねばならない？

ジョージ ええ、誓ったのです。

ミント フン、中学生の誓いじゃないか。それとも君は伯父さんの心を乱したいのか。

ジョージ いいえ、とんでもない。そんな。

ミント じゃあ、その手紙は私に渡しなさい。千切って捨ててしまおう。いや、それより、そのまま送り主に戻した方がいい。

ジョージ 一度送り主に戻された事があるのです。開封されて。それなのに読まれないで。ですから僕が渡す事を引き受けたのです。今度はしっかりと受け取って貰うために。

(間) ミント、ここに到ってこれまでの慇懃さをすっかり失っている。冷静さをなくしているのはミントの方である。()

ミント 誰が戻したのだ。

ジョージ 秘書のデイヴィッドソン。

ミント 誰の命令で戻したんだ。開封された手紙を。

ジョージ 封筒には、ネルソンの命によりとありました。

正確に言うなら「ネルソン卿、誤ってこれを開封せり。但し読み申さず候。」です。でもロード・ミント、これは順当に考えれば……

ミント ネルソン卿の今の生活を考えれば、何も順当には考えられない。

(間)

ジョージ それはひどいです。僕はそんなこと、信じません。

ミント 君の無礼はこれで三度目だ。しかし今のは許す。私もそれは信じない。

(間の後)

ミント しかし、デイヴィッドソンはレイディ・ハミルトンから指示を受けたらどうか、それは違つたらう。

ジョージ でもあの人が封を切つたに違いありません。そしてデイヴィッドソンに言ったでしょう。これはひどく悪意のある、意地悪な、人を誹謗する手紙だ。だから読んではいけないと。そのよつなことをあれこれ言つて、結局デイヴィッドソンの方から「送り返ししましょう」と言わせるようにしむけた。これが僕の推論です。

ミント(よく考えて) それはなかなかうまい推論だ、マッシュラム君。多分そんなところだったらう。

ジョージ ではもう伯父さん自身のしたことではないと考えて(下さいますね。)

ミント したことであるとかないとかそんなことは考えていない。私の考えているのは、君が持っているその手紙がネルソンに渡らないようにと、それだけだ。マッシュラム君、そ

の手紙を私に渡したまえ。

ジョージ いやです。

ミント 私は到って穏やかな男だ。暴力は好まない。こんなことは生まれて初めてだ。力付くで何かしようという気がむらむらと起こっているぞ。それに私にたてついている人物は私より弱いときている。(脅かして。) すぐその手紙を出すんだ。マツチャム君。

ジョージ しまつて鍵がしてあります。

ミント その鍵はあるのか。

ジョージ いいえ。(上ずつた声で。能弁に。) 咽に刀を突き付けられても平気です、ロード・ミント。僕が手紙を渡す人はたった一人です。その手紙の宛先の人です。

(間。)

ミント どこかで聞いたような台詞だ。最近ベティが演じた芝居だな。

ジョージ バースに來たのを見ました。

ミント 今私は刀を下げてはいない。今どころか、この二十年下げたことはない。マツチャム君、英雄の真似事をやっている場合じゃないんだ。君が鍵をかけてしまつていゝものは火薬なんだ。それを君は伯父さんの顔の真ん前で、爆発させようとしている。伯父さんが傷つくだけじゃない。これは請け合つ。君も傷つくんだ。ひどく傷つく。それもただ嫉妬に狂つた妻が君の膝の上にちよつと涙をこぼしたという、それだけの理由でだ。

ジョージ (間の後、静かに。) あの伯母さんの泣き方、僕はあんな風に泣いた人を今まで見たことはありません。少な

くとも大人が。深い深い心の奥底から出て來るような泣き方だつた。まるで病氣に罹つていゝような、見ていて辛くなつてくるような。一生あれを忘れることはないと思ひます。

ミント 忘れるようにしなくちゃいけないね。

ジョージ 無理です。それに忘れたいとは思ひません。

ミント それなら少なくとも君だけに留めて置かなきゃ。トム・ティットが涙を流したのを見た。その君を、伯父さんは決して有り難いとは思わない。それは保証する。

ジョージ 何なのでしよう、伯父さんがあんなに伯母さんを嫌うようになった本當の原因は。

ミント 私は知らない。それに他の誰だつて知つてはいないと思ふ。ただ私は心から君に頼む。あの手紙はどうか渡さないで欲しい。

(ジョージ、首を振る。)

ミント (急いで。) じゃ、少なくとも明日の夜まで待つてくれないか。

ジョージ ええ、じゃあ、この二十四時間だけなら。

ミント その間にレイディ・ネルソンに會つて話をしなければ。弾倉にはいつていゝ火薬に火がつくのを止めるんだ。一体やれる仕事だろうか、これは。どうせ私は吹っ飛ばされて粉々になつてしまふんだらう。それに死んだつて、追贈のメダル一つ家族に残されはしない。

(エマ、部屋着に袖を通そうとしながら化粧室から飛び出てくる。走つて寢室を横切つて控えの間に向かう。)

エマ 今まで一番多い群衆よ。(あの人の人氣!) 私、お風呂の窓から見ていたの。

ミント そんなことをなさっていいんですか、レイディ・ハミルトン。

エマ 随分恥ずかしがりなのね、ミント。私の裸の姿なんて今まで何度も見せたことがあるわ。あの友達、それが好きなの。

ミント それは分かっていますか・・・

エマ（遮って。）あの人達ったら赤ん坊を持ち上げてあの人に見せるの。祝福してくれて。（ジョージを抱いて。）ジョージ、あなた誇らしいでしょう？

ジョージ ええ、レイディ・ハミルトン。

エマ エマ伯母さんよ。もう少して窓から万歳って言う所だったわ。

ミント やっていたら漫画家がさぞ喜んだでしょう。

エマ 漫画家？ あんな連中おしっこでも引つ掛けてやればいいのよ。

（ネルソン登場 前場と同じ服装。海軍省から帰ってきた所。ネルソン、ミントとジョージには気がつかない。）

エマだけを見ている。）

エマ 約束を守って下さったのね。

ネルソン 守らないとも思ったのか。（熱烈に抱きしめる。）

エマ あの狡い海軍省へいらつしやる時は何時でも心配。あその人はその気になりさえすれば、明日にでも貴方を行かせる事ができるのですもの。一年間は大丈夫なのね。

ネルソン 期限は言わなかった。

エマ（怒って。）約束なさった筈よ・・・

ネルソン カディスに今は行かない。これだけはなんとしても聞き届けて欲しい、と言った。しかしとにかく一年は大丈夫だ。心配はいらない。丸々一年は約束するよ。

エマ（キスしながら。）心配だわ、ネルソン、私。

ネルソン 無駄な心配だよ。

（長い貧るようなキス。）

エマ（引き離して。）つれがあるのよ。

（ネルソン、他の二人を見る。視野の点で問題があり、見えなかったのである。）

ネルソン やあ、ミントじゃないか。呼び出しに応じてくれたのか。これは嬉しい。実に有り難い。あまり嬉しくてうまく言葉にならないな。北部に行っていたせいかな、痩せたんじゃないか。マートンでは太ってもらう。エマの主婦役は完璧だ。この物価高で少し金がかかり過ぎるくらいはあるが、³な。

エマ そのへんでおしまいよ、ネルソン。みんな貴方のためにしている事ですからね。他の誰の為でもないの。（ジョージを指差して。）これがマツチャ・・・

ネルソン（優しくジョージを抱いて。）これが誰かぐらい分かっているよ。しかし大きくなったな。お前だと分かるのに暇がかかったじゃないか。さてよ、私が最初に艦長になった時はいくつだったかな。その時の私よりお前の方が立派だ、¹なあ、エマ。

エマ 私に分かる筈ないでしょう。その頃私達、まだ会っていないんですもの。

ネルソン（微笑んで。）会っていないくて良かったよ。

エマ ネルソン！（なんてことを仰るの。）

ネルソン（急いで。）いや、海軍のためには、さ。僕のた
めにはそりや、会っていたらなあ、と・・・

エマ もっとひどい話。ジョージが聞いていて何て思うか
しら。エマ伯母さんのネルソンに及ぼす影響が国家にとつて
害がある、そう聞こえるわ。

ネルソン（ジョージに、静かに。）私の言いたかったのは
だね、ジョージ、もし若くしてレイディ・ハミルトンに会つ
ていたら、私のそれ以後の軍人としての経歴はゼロだったろ
う。なにしろ命が、失うにはあまりに大切なものになって、
命を賭けて何かをする気を失せさせただろうからな。

エマ それならいいわ。船乗りにしては文章を作るのが上
手。そうね、ジョージ。

ネルソン（急に気がついて。）エマ、どうしたんだ。ちゃ
んと服を着ていないじゃないか。この人達がいるというのに。

エマ あらネルソン、この人達、人じゃないでしょう。一
人は子供だし、もう一人は・・・だってロックスバーから出
て来た山猿じゃない。

（下僕、銀の盆の上に名刺をのせて登場。）

エマ（名刺を読む。）ハーディ艦長。お通しして。
（下僕退場。）

エマ ハーディは確かに「人」のうちだわ。それにあの人、
私が冬の厚いものを着ていたって、バビロンの売春婦ぐら
いにしか見やしない。でもとにかく着替えてこなくちゃ。

ネルソン 私も行こうか。

エマ 貴方の大切なハーディ艦長をここでお迎えするのは、

あなたの務めでしょね。

ネルソン どうもぞつとしないね。その理由は君が一番良
く知っている。

エマ 臆病者。自分の旗艦艦長を怖がりたりして。たいし
た英雄！ 怖いって言ってやりなさい。そうすれば気が楽に
なるわ。

（ネルソンにキスして、寝室に進む。入るところで、フラン
チェスカが待つており、二人、幕のうしろへ退場。）

ネルソン コペンハーゲンでの時よりも群衆はさらに多く
なったようだ。二年間でこんなに増えるとはな。時にはロン
ドンをお忍びで歩いてみたいもんだ。だけどうちやたらそ
れと気づかれずにすむかな。

ジョージ（言葉通りに受け取つて。）ホレイショー伯父さ
ん、肩章とか勲章とかを全部とつて平服で歩いたら・・・

ネルソン（短い間のあと、機嫌よく。）ジョージ、お前の
言う通りだ。お忍びが出来ないというのは結局私の虚栄心の
せいなのだ。

ジョージ いいえ、僕はそんな事は・・・

ネルソン（ミントに。）この子の言っているのは本当だ、
ミント。次官との会見の際でも平服を着ようと思えば着ら
れたのだ。現在退役中なんだからな。（自分の肩章を微笑み
ながら触つて。）しかし私はどうやら自分の業績を人に知つ
て貰いたいらしい。いやな性格だ。（ミントに。）赤ん坊み
たいだと昔言われたが、これもそれに当たるな。

ミント もうあの失言はお許し願えませんか。
ネルソン いや、お許しは与えられないな。（ジョージに。）

昔、彼が言った言葉にね、陸上では私は赤ん坊だ。但し海上では……まあ、これはいい……

ミント 海上では、アレキサンダー大王。

ネルソン アレキサンダーだったかな。いずれにせよ、ジョージ、これは誇張だ。ひどい誇張だ。

下僕（登場して。） ハーディ艦長です。

（ハーディ登場。老練な水兵。世界中のどんな人物の前に出てもびくともしない。唯一の例外があるとすれば、現在彼の目の前にいる人物、ネルソン。ネルソン、無言で彼を抱く。振り向いてジョージを紹介する。）

ネルソン 甥のジョージ・マツチャム。

（ハーディ、一礼。）

ネルソン それからミント卿。知っているな。

ハーディ（握手しながら。） はい。これは光栄です。

ミント 光栄は私の方だ、ハーディ艦長。

（気まずい間。ネルソン外目（そとめ）にも落ち着かない様子が分かる。）

ハーディ レイディ・ハミルトンは？

ネルソン 着替えているところだ。そう、ちょっと見て来なければ……失礼して……

（ネルソン、寝室の方へ進む。）

ハーディ いらっしやる前にちよつと……次官にはもうお会いに？

（ネルソン頷く。）

ハーディ ヴィルノーヴの行方について何か情報がありましたか。

（間。この瞬間をネルソンは一番恐れていた。）

ネルソン そう。あつた。

ハーディ 何処ですか。北ですか。

ネルソン いや、南だ。正確に言うとかディス。

ハーディ（興奮して。） カディス？ カディスですか。あそこなら長くはいられない。

ネルソン そうだ。いられない。

ハーディ カディス。こんないいニュースは聞いたことがない。袋の鼠だ。何隻ですか。

ネルソン 三十隻以上。

ハーディ で、我々は何隻集められますか。

ネルソン 十分な数。

ハーディ じゃ、同じ数だけ？

ネルソン 同じ数だけ誰が必要と言った、ハーディ。私は十分な数と言ったんだ。

（ハーディ、嬉しそうに笑う。ネルソンの腕を掴む。）

ハーディ これはいいです。これがニュースになる時、その言葉を連中はデカデカと書くでしょう。で、ヴィクトリーは何時出発ですか。

（間。）

ネルソン（注意深く話す。） まもなくの筈だ。集められる船は全て集めてからになる筈だからな。

（間。ハーディの顔に現われる失望の表情をネルソン明らかに嫌っている。）

ハーディ 集められる船？

ネルソン（微笑む。） それに集められるすべての艦長も。

(また間。ハーディ無言。)

ネルソン 君にヴィクトリーを指揮して南に下るよう命令が出るのも、この二、三日のうちだろう。

ハーディ (長い間の後。) 分かりました、閣下。

ネルソン あれはまだ働ける船だ。特に今度のようなごちゃごちゃした接近戦では。多分コーリングウッドも自分の旗はロイヤルソヴリンよりもヴィクトリーの方に上げるんじゃないか。私も指揮を取るとなれば、真新しいロイヤルソヴリンよりも、二年間使い古したヴィクトリーの方を選ぶだろう。(少し困ったような会釈をして。) では失礼する。

ハーディ (同様に困ったような表情。) はっ。失礼。

(ネルソン、寢室へ下がる。ベッドに腰掛けて、床を見つめる。全く動かない。)

ハーディ (控えの間でやっと。) ラムが欲しい。

ミント レイディ・ハミルトンは置かない。

ハーディ (怒る。) ラムを置いてないって？ それで提督の女と言えるか。

ミント ピントが外れている・・・ものもある。

ハーディ ものものもある？

ミント ワインならいいものがあるぞ、艦長。それから勿論ブランドデーも。

ハーディ フランス野郎の飲み物だ、そんなものは。(怒って。) イギリスのものなんかここには何一つありはしない。

いや、あったか。(壇を持ち上げる。) ジンだ。売春婦の飲み物だが、まあいいか。こいつはピントが外れていないって訳ですか、ロード・ミント。

ミント (優しく。) 提督は二年間外国暮らしだったんだ、艦長。

ハーディ ええ。私だってそうなんですけど・・・健康を祈って。(ジョージに。) 健康を。

(ハーディ一気に飲み干し、また注ぐ。陰鬱な放心。ミント、ジョージからハーディに目を移し、また逆に目を移す。二人ともシヨックと幻滅の表情。)

ミント (間のあと、少し悪戯の雰囲気も込めて。) 艦長、さつきマツチャム君が訊きたいと言って、僕が待てと止めた質問があるんだ。それは、ネルソンの偉大さは、そのなした事によるものなのか、それとも彼自身が偉大なのか、と言う事なんだが。その質問は艦長に訊いた方がいいだろうと言っ
てね・・・

ハーディ (間のあと、ぶつきら棒に。) 両方ですよ。彼の人物が偉大でなくてどうしてあれだけの事をなしたか。

(当然人物が偉大で、なした事が偉大なのです。)

ミント (ジョージに。) これが答だよ、マツチャム君。

ジョージ ネルソンの天才がなければ戦いには勝てなかつただろうっていうことですか。

ハーディ 天才？ 天才なんて海では何の役にたたない。

「何の役にも」が言い過ぎなら、「たいして」だ。いつも敵の風上に立ち、適切な攻撃時期、適切な攻撃場所を選ぶ。それだけのことだ。勿論ネルソンにこの才能はある。しかしそれよりもっと大切なこと、天才と言えること、それは戦うに適切な戦艦と、戦うに適切な人間を持つことが出来る能力だ。

ジョージ (奇妙だ、という表情。) イギリスの船も水兵も、

フランスよりはずっと良いんでしよう？

ハーデイ 新聞で読む限りそうなっている。しかし、あちらの船とこちらの船、あちらの人間とこちらの人間、一つ一つを取って見た時、どちらがどうか、私には自信がない。しかし全体として比べた時どちらかが優秀だとすれば、それは一体誰がそうしたのだ。

(寢台でネルソン、突然ベッドから立ち上がる。どうやら意気銷沈の状態は終わっている。ネルソン、幕の後ろの化粧室に入る。)

ハーデイ (恐ろしい勢いで。) イギリスの水兵っていうものがどんな人物達が知っているか、マツチャム君。「樫の木理入れられた連中だ。少なくとも五分の四は。ありてい言えば、チャザムがポーツマスで誘拐されて来たんだ。頭をぶん殴られて、この野蛮な、世界でも有数の奴隷の生活に。ニューゲートの監獄でも、あの蛆虫だらけのまじいパンよりは、少しはましな食物が出る筈だ。それに看守への口答えに九本縄の鞭で二百回もぶつ叩かれるだろうか。つまり二百かける九つて言つことだ。それを見れば誰だって、マツチャム君、君だつて。いや、ロード・ミント、貴方だって、いやでも上官に従う気持ちになる。それからラムのがぶ飲みだ。これで攻められりゃ、いやでも戦う気にさせられてしまう。しかし誰のためか、誰が勝つか、そんなことに連中が構っていられるか。お二人にお訊きしましょう。お二人がそういうイギリスの水兵だったとします。さてフランス軍が我々に勝つてピカデー広場にギロチンがおつ立てられた。お二人はどう思

いますか。悔しくて胸が痛みますか。反対に我々が勝つたとします。提督の健康にラム一杯の乾杯でもする気になりますか・・・

ジョージ (急いで。) ナイルの戦争の前に、水兵達はネルソンの為に杯をあげたではありませんか。

ハーデイ そう。ネルソンに。それが君の答だ、マツチャム君。私は、今日、この売春婦の飲み物で、ネルソンのために乾杯する気はない。今はとてもそんな気分じゃない。しかしあの時連中は確かにネルソンの為に杯を上げたんだ。ネルソンの指揮する部隊ならどんな酷い部隊でもそこで働こうと言う。ネルソンが怪我をしたと聞けば、女のように連中は泣くのだ。ネルソンがどうやってこういう事が出来たか、私には到底分からない。もしそれが奇跡でなかったら、それに確かに奇跡でもなんでもないんだ。それならそれはネルソンの人物が偉大だったからとしか言いようがないじゃないか。(グラスの中を見て。) このジンもひよつとするとイギリス製じゃないかも知れないぞ。

ミント ナポリではジンも作っている。かなり飲める奴をね。

ハーデイ ネルソンはあんな糞つたれの場所へ行くべきじゃなかったんだ。(陰気に。) お二人ともその気になったら、私の今の言葉をネルソンの前で言うのなら言つて下さい。男らしくその責任は取りましょう。

(エマ、化粧室から出て来る。後にネルソン。マートンへ馬車で出かけるために正装している。控えの間に進もうとする時ネルソン、エマを留めて抱擁する。)

ミント かなり辛いものになるぞ、それは。

ハーデイ 今の状態より辛くはないでしょう。ヴィクトリーにコーリングウッドの旗を上げる？ そんな旗、俺が自分で引きずり下ろしてやる。

(エマ、控えの間にはいる。ネルソンその後に登場。)

エマ ハーデイ艦長！ まあ光栄ですわ。

ハーデイ それは私の方です、レイディ・ハミルトン。

エマ 相当な数になっているわ、群衆。(ハーデイに。)
艦長、貴方がここに入る時、万歳の声があがりました？

ハーデイ 私は知られていない人物ですから、レイディ・ハミルトン。

エマ(優雅に。)
知られていていい筈なのに。でもすぐですわ、そうなるのは。(大きな身振りをして。)
ネルソンの傍にいる人物は誰でもいつかは華やかな舞台に。ミント、私達の馬車にどうぞ。ネルソンはその方がいいと・・・
ネルソン(優しく。)
いいとは言わなかったよ、エマ。その方が相応しいといったんだ。良いかどうかは分からない。

エマ そうでしたわ、ネルソン。

(フランチェスカ、寝室から急いで出て来て、エマに小壘を渡す。エマ、それをさっとバッグに入れる。ミント、これを見逃さない。)

エマ ここから相当距離があるのよ、ミント。途中の旅が楽しいわ、きつと。ジョージ、貴方とハーデイ艦長は後ろの馬車に乗って頂戴。馭者が訊いたら教えてやるのよ。自分達が誰かを。行く先は分かっている筈。

ネルソン(ジョージを見て。)
おやおや、ジョージ。お前、

大きくなっているんじゃないか。お母さんに言っただけで新しくズボンを買って貰わなきゃ駄目だよ。それに上着もだ。こういう事にかけてはフアンニーの右に出る奴は・・・
エマ(警告するように。)
ネルソン、貴方、トム・ティットのこと、お褒めになるの？

ネルソン(軽く。)
褒めているんじゃないよ。子供の服を買うのが名人だと言ったところで・・・

エマ 新学期が始まるまでに、四、五着作ってやらなくちゃ。それも最上の仕立で。これは約束。

ネルソン 随分高いものを拵るんだらうな。エマらしく。(エマにキスして。)
じゃあ一着だけ。

エマ それに新しい靴。仕立てた服に似合うのを。(堂々と退場。)

ネルソン(ミントに。)
一緒に旅行出来てよかった、ミント。ちよつと金のことで相談したいんだ。銀行の連中が、長期支払のことで言ってきていて・・・(悪戯っぽく。)
こういう問題では私はなにしろ・・・赤ん坊なんだから。

ミント ええ、それは・・・そうです。

(二人、エマの後に続く。)

ミント それに、赤ん坊といえば、ホレイシアーお嬢様のことをまだお訊ねしていませんでした。

(この時までに二人は部屋を出ている。)
ネルソン(舞台裏で。)
ああ、ミント、あれは可愛い奴だ。実に可愛い。私の自慢だ。それにエマの自慢でもある。

ミント(舞台裏で。)
五歳になられるのでしたね。

ネルソン 四歳と五ヶ月だ、正確には。

ジョージ（ハーディに。）僕達も下りるんですか。

ハーディ いや、まだ。連中に万歳をさせてからだ。我々はそれを受ける理由はない。やり過ぎしてから出よう。

ジョージ 僕は扉の所で見ています。

（ジョージ退場。ハーディ、一人残ってグラスの中身をぼんやり眺める。それからエマの肖像画を。突然激しい動作でグラスの中身を絵にかける。新たにジンを注いでいる時、ジョージ帰ってくる。当惑したような表情。）

ハーディ どうだった。元気のよい万歳だったか？

ジョージ ええ。元気な……でも……

ハーディ でも……何だい。

ジョージ 笑っていた奴がいたんです。

ハーディ フン。

ジョージ（全く啞然とした表情。）ネルソンを笑うなんて！（ハーディ、一気にジンを飲み干し、ジョージの肩を優しく叩く。）

ハーディ レイディ・ハミルトンと一緒にね。

（暗転。少し前に始まっていた万歳が最高潮に達する。次に弦のオーケストラが優しい音楽を奏する。これは多分、パースの温泉の社交場で大評判の曲である。）

第四場

（照明がついて、レイディ・ネルソンのロンドンの家の階下の部屋を現す小さな場所を照らす。ミントが椅子から立ち上がる所。フランシス、傍に立っている。若い時のネルソンの肖像画が目立つ所にかけてある。この場ではレイディ・ネル

ソンは杖をついている。）

フランシス いいえ、とんでもない。お陰で何年も会えなかった貴方に会えましたわ。そう言えば、お訊ねするのを忘れていました。奥様、ご家族は如何ですか。

ミント ええ、元気です。

フランシス それは良かったわ。

ミント では譲歩はなさらないと。

フランシス 譲歩……今の場合、この言葉は適切ではないわね。もしジョージが約束を破る気になれば、それはジョージの勝手です。私は決して怒りはしないとよく彼に言っておいて下さい。

ミント その伝言を伝えれば、いよいよ自分の約束を守る決心を固めるでしょう。

（ミント、この言葉を、まるでカッコづきの、誰か別の人間の台詞であるかのように言う。フランシスの静かな答えがそのカッコを取り去ってしまう。）

フランシス そうね。名誉を重んじる子だね。あの甥のジョージっていう子は。

ミント その名誉を重んじる子供が、手紙の仲立ちをした為に、ひどく叱責されるのは構わないというお考えなのですか。

フランシス 叱責？ 何故でしょう。あの子の伯父も名誉を重んじる人物なのですよ。

（間。ミント、自分の敗北を認める。）

ミント それではお暇（いとま）を、レイディ・ネルソン。フランシス 玄關までお見送りしたいのですけど、最近上

手に歩けなくて。お聞きになっていらつしやるでしょうけど・
・小鳥の歩き方。

(ミント、会釈して回れ右する。)

フランシス ちよつとお待ちになつて。貴方のこの訪問は
少なくとも一つのことには成功したようだわ。私、良心のこ
とを言われて少し心配になつてきた。(訳註 ジョージが叱
られはしないかと。)ミント、貴方、メモ用の紙を、持って
いるわね。私から甥に伝言をしましょう。それを書き取つて
下さい。それに私がサインをします。

ミント 分かりました。

(ミント、ポケットからノートと鉛筆を取り出す。)

フランシス でもまずこのことは言わせて頂戴。貴方は私
が仲立ち役として中学校の生徒を選んだことを非難しました
ね、ミント。貴方の考えでは私の家族で、他に誰が相応しい
と言つのですか。

(ミント無言。)

フランシス 家族でなければ、共通の友人でもいいです。
あげられますか。例えば貴方を?

(ミント、とんでもないという身振り。)

フランシス じゃあ、他に誰が。それに郵便は試験済みで
す。途中で邪魔が入るのです。

ミント 海軍省では。

フランシス 海軍省が郵便より頼りになるとお言い? 私
の友人は今海軍省に何人残つてゐるかしら。

ミント レイディ・ハミルトンが死ねばいいと思つてゐる
者が、海軍省にはいくらでもいます。

フランシス(死ねばその人達も違つてくるでしょう。)(
も死んではいけません。ジョージがいません。今から文
章を言いますから、必要ならもつと適切なものに直して下さい。
(書き取らせる。)(ジョージへ。ミント卿は、私がお前
に渡した手紙をネルソンに見せるべきではないと言つていま
す。それは本当にそうかも知れませんが。私はお前にそれを決
めて貰おうと決心しました。それを判断することが出来るよ
うに、あの手紙を見る許可を与えます。どんな些細なこと
でもいい、ちよつとでも私の夫を悲しませることが含まれて
いると思つたら、その手紙を焼き捨てるのがお前の義務であり、
また私の望みでもあります。)

(ミント、書き取つてゐる。)

フランシス ミント、貴方には弁護士³⁸の経歴があるわ。もつ
と適切な文章に書き換えても構わない。趣旨さえ同じであれ
ばいいのですから。白紙にサインして置きましょう。文章は
どうぞ作つて下さい。

ミント 言われた通りここに書き留めました。ここにサイ
ンを戴いた方がいいです。

フランシス 分かりました。

(ミント、フランシスにノートを渡す。フランシス、サイン
する。)

フランシス 貴方を信用している、ということは今の私の
言葉で分かりましたね。

ミント この件に関しては、私は自分自身が信用出来ない
のです。

フランシス 信用出来ない? 何故?

ミント 私は勇気のある男ではありません。そのせいでしょうか。近づいてくる雷の音、大乱戦の音、がもう聞こえていくような気がしているのです。

フランシス（相変わらず非常に優しい声で。）まあまあ、本当に申し訳ありませんわ。静かで平和な貴方の家庭生活にそんなメロドラマを引き起こす、私とその種なんですものね。

（ミント、ノートポケットにしまって、初めて微笑む。）

ミント 危険でもいい、飛び込んで行こう、というその精神。それには感服致します、レイディ・ネルソン。

フランシス 有難う。今の状態ではそういう精神がないと生きてゆけないの。

ミント ええ、分かります。

フランシス 貴方、マートンに帰るのね。

ミント（時計を見て。）夕食に間に合つようじや。それに、時間には決して遅れないようにとの厳しい命令です。

フランシス あの方、芝居をなさるのね。

ミント ええ。芝居の真似事を。多分。

（ミント、帽子とステッキを取り上げる。）

フランシス 自分の馬車でいらっしゃるような不注意な真似はなさらなかつたでしょうね。

ミント ロンドンには私の馬車はありません。でも持っていたとして、もし、それでこのサマセット街に来たら、不注意な真似をしたことになるのですか。

フランシス この通りの北、七号の家と、通りの南、五十号の家、この二つがいつも警戒中。

ミント それでは、このサマセット街の二つの家にメロド

ラマがある、ということですね。

フランシス 窓を見張るのはメロドラマじゃありませんわ。私に会いに来る人物が誰であるかを知っておくことが、あの人には重要なのです。理由はよく分かります。

（間。）

ミント ではこれで・・・

フランシス（急いで。）お引き止めして申し訳ないんですけど・・・今ではこういうことを訊ける人が誰もいなくなつて・・・頼りは新聞だけ。それに新聞にはこんなことは書いてないし・・・あの人の良い方の目・・・痛むんでしょうか。

ミント ええ、少し・・・と思います。

フランシス 酷使するんでしょうね。書類を読み書きする時は必ず目覆いをしなければいけないんです。何時でも必ず守るようじや。

ミント はい。レイディ・ネルソン。

フランシス（微笑もうとして。）勿論、私から言つては駄目よ。

ミント（笑わない。）はい、申しません。

フランシス 目覆いはいつでも手近にあるように。でないとすぐ忘れるのです、あの人。このことをレイディ・ハミルトンによく。それから、ロード・ミント・・・できたら・・・これが楽な仕事でないことは分かっているのですが・・・でも、もしあの人に、私があの人敵ではなく、愛し続けている妻であつて、いつでも機会があればあの人のためにどんなことでもする気持ちでいるのだということ・・・分かつて貰えるようにして下されば・・・

(ミントが無言なので。)

フランシス　こんなことを言っても無駄ね。今、貴方はあの人の味方で、私の味方ではないもの。咎めたりはしませんわ。北七号と南五十一号の見張りつきでは誰だつて両方の味方にはなれない。咎めなければならぬのはこの現在の状況ですわ。私、やっと分かりました。

ミント　でも分かつていらつしやいますか、レイディ・ネルソン。ネルソンの友達や家族で、誰一人この状況を良しとしている者はいないのです。それどころか、この状況を変えることが出来るものなら全存在を抛(なげう)つてもよいと思つてゐるもの……この中には私も含まれますが……だつてゐるのです。

フランシス　じゃあ、どうしてそうならぬのかしら。

ミント　何故なら、変えるのは不可能だからです。誰がどうやっても変えることは出来ない。どうやつてもです、レイディ・ネルソン。こうなるように運命が定められているのです。お分かりですね。

フランシス(低い声で。)　どうやらあの人は私から永遠に去つて行つたらしい。それが分かつてきました。ええ、今分かりましたわ。(少し気を取り直して。)　でも私から去つて、どんな女のところへ行つたといつのでしよう。あの人の評判に泥を塗ることしか出来ない、そんな女のところへ。そして、もう泥を塗つてしまつた。違いますか。

ミント　そういう女をネルソンは選んだのです。そして愛してゐるのです。それに愛されてもいます。あの女のもとを去ることは決してないでしょう。

フランシス　そうね、それは認めます。

ミント　本当にお認めになりますか。それは希望を捨てるという事を意味しますが。

フランシス　時々私、希望は……

ミント　希望はいけません。どうぞ、レイディ・ネルソン。これだけは是非にとお願い致します。希望を持つということ、それは絶望するということ事でありませぬ。希望を殺すことによつてのみ、絶望を殺すことが出来るのです。

フランシス　では私は希望を殺さねばなりませんわ、

ミント　それが一番良いのです。(これは)奥様に良かれと思つてこう申し上げてゐるのです。どうか信じて下さい。

フランシス　私は自分に良かれと思つてゐないのです、

ロード・ミント。あの人によかれと思つてゐるのです。これは信じて下さいませぬ。

ミント　信じます。

フランシス(急に荒々しく。)　でも、もし私が希望を捨てるのならあの人も希望を捨てて貰わねばなりません。私を「バースの病人」とはもう言わせません。身体が弱つてきてないでませぬ。私は死にませぬ。あの人を喜ばせる為は何でもしましょう。でも死ぬことだけは、死ぬことだけはしません。この事はあの人にお話しになつて結構です。そのお気持ちになれば。それから、これは私からと言つてもよろこびますわ。

(ミント、無言。その間、フランシス、涙が出そうになるのを必死で耐える。傍目にもそれと分かる努力で、やっと涙を零さないですむ。それから杖の助けを借りて立ち上がり、辛

うじて一礼する。)

フランシス ではこれで、ロード・ミント。

(フランシス再び立ち上がる。背中を真直にし、頭を昂然とそらせて。)

ミント(御辞儀。)失礼します、レイディ・ネルソン。

(ミント退場。フランシス、不動のまま立つ。背景に若いネルソンの肖像画あり。暗転して行く間、肖像画のみに照明があたる。それも暗闇に消える。)

第二幕

第一場

(照明があてられ、マートンの居間と食堂が示される。前前場とは異なり、今回はこの二つの部屋は隣り合っていない。

一つの部屋から他の部屋へ移るには、長い廊下を通る必要がある、ある時間がかかる。食堂の奥には階段が見える。これは寝室に通じている。現在の舞台は居間。二つのうち大きい方。エマが芝居を演じているところ。観客の注目はエマ一点に集められる。エマは古典的な衣装を纏って、多分シンドルス夫人からの借り物の、独特の表情をして、右手を上げて立っている。)

エマ このようにして、この偉大な英雄は倒れた。そして全国民は彼の死を悼んだ。しかしその者達のなかで、この女ほど彼の死を悼んだものがあるだろうか。この女、即ち彼があらゆる女の中から、愛し守るべきものとして、選び、また女も、彼を心の奥底に慈(いつく)しみ、自分自身の命よりも大切なものに思い、そして彼の子供を生んだ女・・・ト口

イのアンドロマケー。

(この辺りになると我々は彼女の観客が見分けられる。ジョージ・マツチャム父子、キャサリン・マツチャム、レヴェランド・ウイリアム・ネルソン(ネルソンの一歳年上の兄。その妻サラ、その息子ホレイシヨ(ジョージと同年。))ミント、ハーディ、もう一人の艦長のブラックウッド(カデイスからの伝令を務めた男。))それにネルソン。ネルソンは他の者達と少し離れて坐っている。玉座の位置。エマの演技は勿論主にネルソンの為になされている。他に女中達がいる。中でフランチェスカが舞台監督の役割を果たしている。キャサリン・マツチャムはバックでハーブシコードを弾く。但しフランチェスカやエマが望むようにはうまくタイミング(キュー)を掴んでいない。)

エマ しかしまだ彼女は、自分の偉大な夫の死を知らない⁴¹でいる。

ハーディ(ミントに囁く。)偉大な夫って誰ですか。

エマ(ミントが答える間を与えず、ハーディにきつとした目を向けて。)ヘクトール、ヘクトールが戦いに出ていたのだった。トロイの王子、あのヘクトールが。(この際、だつてはつきりした台詞は勿論ハーディの為のアドリブである。ハーディ、満足して頷く。)そしてアンドロマケーは花で縁取られた紫のマントを着て、自分の部屋に坐っている。

(これがエマの肩に紫のマントを着せるフランチェスカへの合図。エマはその後、幸せな期待をもって長椅子に横になる。)

エマ そして夫が戦いから帰って来た時にと、女中達に湯浴みの用意をさせる。

(エマ、命じる行為を身振りで行なう。キャサリン、風呂を用意する女中達の動きをハーブシコードで表現するが、ページを捲る時の不手際で中断される。エマ、鋭く彼女を睨みつける。)

エマ しかし突然トロイの城壁から大きな叫び声上がる。そしてアンドロマケーは椅子から飛び上がる。

(エマ、フランチェスカの適切な助けによって、長椅子から立ち上がることが出来る。)

フランチェスカ *Attenzione.* (お気をつけて。)

エマ そして城壁の方へと走る。ああ、彼女の見たものは、何て言う悲しい光景。まさか、まさかヘクトールが殺されたのでは? (フランチェスカに。) 言って頂戴。死んではないと。死んでいるんじゃないと。死んではないと。

フランチェスカ (しっかりと。) *Emoto.* (死にました。)

(フランチェスカ、紫のマントをエマの肩に着せ直す。)

エマ ああ、その言葉は言わないで。私の命、私の愛、私の全て、それが今塵(ちり)と化しているのか。

フランチェスカ *Polvere.* (そして塵に。)

(フランチェスカ、全ての役目を終え、観客に加わる。)

エマ ああ! ああ! ああ!

(長い悲しみの絶叫、三度。)

エマ ヘクトールは逝ってしまい、私はもうたった一人なのか。

(エマ、これを感情を込めてゆっくり言う。短い瞬間ではあるが、我々はひよっとしてエマはプロの女優としての才能も、持ち合わせているのではないかという気持ちになるほどである。)

る。しかし、それは一瞬であって、エマ、次の瞬間には、天に両腕を上げ、「悲劇の型」に戻っている。)

エマ では黄泉(よみ)の国の帝王よ、私もそこへ連れて行っておくれ。ああ、お前たち、おつきの者達! 早くここへ。私の傍へ。火葬の薪を用意しておくれ。私はあとを追って死ぬのです。

(女中達に種々の指示を下す身振りあり。その後、今度はフランチェスカの助けなしに、長椅子に横たわる。悲劇の型。マントが古典的な襷の形になるように、さらに注意して、横たわる姿勢を決める。)

ミント(この間、マツチャムに。) アンドロマケーは自殺するんではかね。

マツチャム(嘔き返す。) エマ・ハミルトン版では、少なくて。

エマ(まだ襷を直しながら。) ああ、悼ましい。悲しいこと。なんていう悲劇の日でしょう。意地悪な運命、悲しむべき運命!

ミント(ネルソンに囁く。) 誰ですか。台詞を作ったのは。

ネルソン(レヴェレンド・ウイリアムを指差し。) 兄のウイリアムだ。

エマ ああ、お前達、おつきの者達よ、私ほど惨めな人間がこの世にいるだろうか。この国に愛され、神々に愛されたヘクトール、死んでいった英雄ヘクトール。彼の為にアンドロマケーは泣くのだ。

(レヴェレンド・ウイリアムはネルソンの言葉を聞き取って、ミントが彼の文学的才能を褒めたと思い、頭を縦に振って)

る。)

エマ この世の王冠が溶けてなくなってしまうた。戦いを飾る花輪が萎み、物のけじめは失われ、回り来る月の下には、何一つ際だったものが無くなってしまったのだ。(訳註 アントニーとクレオパトラ 福田恒存訳。)

ミント(ネルソンに。)兄さんのウイリアム?

(ミントの声、少し大きい。エマ、ミントを睨みつける。ウイリアムも明らかにシユンとする。ネルソン微笑む。少し困った顔。)

ネルソン 時々はもう一人のウイリアムも手伝ったな。

エマ(少し声を上げて。)武人の柱が倒れてしまった。年端もゆかぬ男女が大人と肩を並べるといのか。(訳註 アントニーとクレオパトラ 福田訳。)偉大なヘクトールは死に、残るのはお互いの不信感のみ。トロイを守る大きな盾は失われ、国中が悲しみに沈んでいる。

(キャサリンはいつのまにか、鎮魂の曲から葬送行進曲に移っている。)

エマ ヘクトール、私もまいります。ヘクトールの妻という私の地位に恥ずかしくない勇気を! 私は炎。私は空気。まいりますわ、ヘクトール。かわいそうな、かわいそうな、アンドロマケー。ああ、我が夫、ヘクトール!

(アンドロマケー、短刀で自害。長椅子に倒れる。)

(あとは沈黙。)(訳註 これは地の文としてあるが、台詞かもしれない。)

(アンドロマケー死ぬ。大きな拍手。エマ・ハミルトンについて書かれたものによると、彼女の演技の目撃者のほとんど

全員が、英雄を演じる時の彼女の稀有な才能、心地よいソプラノの声、大袈裟に演じる事を好む傾向、を認めている。これらの特徴は、今なされている演技の中で十分に示されねばならない。台詞のトチリとか、思い付きで出たまらずいアドリブ アントニーとクレオパトラからの引用は、レヴェランド・ウイリアムの元の台本には入っていない も、この場合、少々無理もない話である。何故なら夜も随分更けて遅いことでもあり、またブランドーとシャンパンをかなり大量に飲んでから。深々と観客に頭を下げた後、ネルソンにも御辞儀をするのだが、その間にもう既にフランチェスカからグラスを受け取っているのが我々にわかる。エマ、それを待ち切れぬかのようにすすする。もし我々が注意深い目を持っているれば、彼女がすすっているのはシャンパンではあるが相当ブランドーが効いているらしいことが分かる。)

ネルソン ブラボー、エマ。ブラボー。

(ネルソン、エマにキスする。)

ネルソン 最高の出来だ、私の見た中で。

ミント(エマに。)いつものように素晴らしいです、レイディ・ハミルトン。このお芝居は、私は初めてでしたが。

エマ おはこなのよ。でも今夜は上がってしまった。こっそり妊娠した尼さんみたい。(レヴェランド・ウイリアムに) あら僧服をけがすようなことを言ってしまったって……

(レヴェランド・ウイリアム、にやりと笑って僧服を守る。)

(訳註 具体的にどうい動作をするのか不明。)

ミント あのアドリブはちょっと戴けませんでしな。

レヴェランド・ウイリアム いや、真に迫っていました。

(ミントに。)もう一人のウイリアムが入れた台詞、あれは私の作ったものじゃないんです、ロード・ミント。レイディ・ハミルトンは時々台本にないものを入れるのが好きで・・・
エマ エマですよ、兄さん！ 何ですか「レイディ・ハミルトン」とは。私も「ネルソン司祭長殿」とお呼びした方がいいのかしら。

レヴェレンド・ウイリアム(おべっかづかいの一家の中でも、一番のおべっかづかいである。)そんな、とんでもない。(ミントに。)私が言おうとしていたのは、エマは時々台本にない台詞をはさむのが得意で、シエイクスピアのクレオパトラはエマの一番好きな芝居の人物・・・

ミント 勿論。

エマ 勿論でどう言う意味、ミント。

ミント 勿論、本当に演じたいのは、「前代未聞の小娘」といった役柄でしょうけど。

エマ 「前代未聞の小娘」？ 「前代未聞の」ならいつだって演じてみせる。「小娘」だって、午後十時以降なら自分になった気で演じられる。

(観客達はそこここに小グループになって分かれる。ミントとエマは二人だけの組。)

エマ(感心したように。) よく危機を脱したわね、ミント。 頭の回転が速いわ。 恋に目が眩んだアントニー、その話がちょっとでも出ようものなら、平手つちものだったわ。(ブラックウッドの方を向く。)

エマ ブラックウッド艦長、この家は初めてでしたわね。それに、私の芝居も初めて・・・

ブラックウッド(吃りである。この状況の為に、余計ひどくなっている。)ナ、ナ、ナポリで、わ、わ、わたくしは、お、お、おくさまの芝居を・・・

エマ そうそう、ナポリで見えて戴いたわ。貴方の船がナポリに停泊して、亡くなった私の主人と一緒に船にお邪魔した時のことですわ。

ブラックウッド(思い出そうとするが駄目。惨めな気持ちで。)エー、エー。た、たしか、こ、古典のものを・・・

エマ そうでしたわ。でも何でしたっけ。

ブラックウッド エー、エー。何かきよ、今日のより、も、もっと、た、楽しい・・・

(すぐ傍に、にこやかにネルソンが立っているの、よけい上がってしまう。)

ブラックウッド つ、つまりその・・・こ、恋人の死を悲しんでいる、ふ、婦人の話では、な、なかったという・・・

こ、ことですが・・・

エマ(救いようもなく。)夫の死・・・

ブラックウッド あ、あ。夫の死です。ええ、ナポリでは、その・・・た、楽しい、ふ、婦人を演じられて・・・

エマ ナポリでは楽しい気持ちでしたわ。そのため、きつと。で、その婦人の名前を覚えていらして？

ブラックウッド(興奮して。)バッカスの女・・・そう、そうでした。奔放に、真に迫って、え、演じていらっしやいました。

エマ でも、今夜の私の芝居は・・・そうね、楽しいものではなかったわ・・・でも、こ感想は？

ブラックウッド ええ、まったく惨めで……（訳註 原文の *pitiful* には「演技がまずい」の意あり。）

（不幸にもこの時だけ吃らず、はつきりと「惨め」と発音する。）

ブラックウッド エー、わ、私の言いたかったのは……

ネルソン（助け舟を出す。一歩踏み出して。）なあ、ブラックウッド、君が私に言った感想は「胸を打つ」だったかな。

ブラックウッド そ、そうです。む、胸を打たれました。ほ、本当に、こ、心から胸を打たれました。

エマ 嬉しいわ。艦長さんに褒めて戴くなんて、そう簡単にあることではありませんわ。特に戦艦ユーリアラスの……（ネルソンに向かって、手を口にあてる。）

エマ あら、間違ったかしら。

ネルソン いや、エマ、たいしたもんだ。よくちゃんと名前を覚えていたな。実際ウィルノーヴについての情報をカディスから運んでくれたのは、このブラックウッドのユーリアラスなんだ。

エマ ええ、そうでしたわ。で、明日にはもう船にお帰りになるのでしたわね。

（エマ、フランチェスカからブランデー入りのシャンパンを受け取る。他の召し使いはすべて退場しているのに、フランチェスカが残っているのは、ただ、このエマへの飲み物の供給のため、のみである。ネルソンの親達は部屋の一隅にかたまっている。固い表情である。王侯貴族を前にした時のように儀礼的な微笑を浮かべている。エマに芝居の感想を言っていない外からの客はハーデイのみであるが、そのハーデイは

一人、部屋を出て、その奥にあるホールを歩いているのが見える。歩いているうちに、食堂につき、そこに入る。海図がテーブルの上に置かれてあり、ネルソンが既にカディスでの海戦の作戦の指示を与え終わっている模様。ハーデイ、海図をじっと眺め、海図上にあるナイフ、フォーク類を動かさ始める。エマ、ハーデイが居間から去って行ったことを非常に意識している。）

エマ（ブラックウッドに。）ねえ、艦長さん。ネルソンの艦隊については私、隅から隅まで聞かされていること、お分かりでしょう？

ネルソン（微笑んで。）コーリングウッドの艦隊についてね。

エマ もしネルソンが行けば、当然ネルソンの艦隊だわ。

ブラックウッド 勿論です、レイディ・ハミルトン。

ネルソン しかしネルソンは行かない。ネルソンは留まる。

エマ（鋭く。）そう。留まるの。幸せなことに。

ネルソン 全く、恐るべく幸せに、だ。だからあれはコーリングウッドの艦隊だし、明日ユーリアラスが発射するのもコーリングウッドの艦隊に加わるためなのだ。

エマ（グラスを上げて。）航海のご無事を、艦長。

（ブラックウッド、御辞儀。）

エマ（ネルソンに。）コーリングウッドが貴方の代わりを務めて戦えば、きつとあの人に伯爵が与えられるわ。

ネルソン 不満かい？

エマ 不満であるもんですか。コールの奴が叙勲式で陛下のケツナメをやったって……あ、また僧服の前で失礼を、

レヴエランド。

(ウイリアム、またにやにや笑って僧服を守る動作をし、御辞儀する。)

エマ だって、お陰で私のネルソンを手元においておけるんですもの。

(エマ、自分の腕をネルソンの腕にからませる。そして、回りを一瞥し、ハーデイの姿を求める。)

エマ 私のアンドロマケの演技で一番心をうったものって何でしたかしら。ブラックウッド艦長。

(エマから台詞あり。すぐ、フランチェスカもつ一杯を渡す。)

ブラックウッド(砲口がこちらに向かないことを切に祈っていたのだが。)

はい。そ、それについてですが、エー、レイディ・ハミルトン、へ、ヘクトールが出て来た時、わ、私は、も、もつと偉大な国家の救い主が頭に浮かびました。

エマ あまりすぐには浮かんで欲しくないわね。その救い主はまだ生きているし、私はもつと生きていて欲しいの。友達面をして、裏に回って無理矢理神輿(みこし)を上げさせようとしている人達、そんな人達は無視して。

(再びエマ、食堂に通じる扉を見る。しかしハーデイは相変わらず食堂に留まって、作戦のことを考えている。エマ、シャパンを飲み干し、グラスを置く。再び英雄の演技の型にはいる。)

エマ おお、それでもなお、彼はヨーロッパの守り神なのだ。エート、次の台詞は？

(エマ、ネルソンの腕を上上げる。ハーデイ、食堂を出る。)

エマ そつそつ。彼の足は大海原をまたいだ・・・でも、

過去形はこの際変だわ。あの人の脚は大海原をまたぎ、王も

大守も、あの人の仕着せを着て歩き、諸々の国々、島々ことごとくあの人の懐からこぼれ落ちる銀貨のようだ。(訳註

アントニーとクレオパトラ 福田訳。)

(ハーデイ登場。)

ネルソン エマ、ちよつと・・・

エマ 私はクレオパトラの台詞を言っているだけよ。(ハーデイに。)

ばいたのクレオパトラ、そう呼んでいるそうね、私のことを。貴方の船の将校さん達は。

ネルソン わるい冗談だ。なあ、エマ。

エマ でも、この台詞はシェイクスピアのもの、たとえジプシーの売春婦の口から出た言葉でも。(シェイクスピアが

言わせているのだから。)

あの馬鹿な年寄りのローマ人について言っていることはちゃんと的を射ているし、それにネルソン、貴方にも当て嵌まるわ。艦長、あなた聞いているの？

(ハーデイ、礼儀正しく頭を横に振る。ネルソン、経験から、これが内輪喧嘩の発端になるうとして、これを感じとって、素早く軽い調子で言う。)

ネルソン あの場面での、エジプトの女王の台詞には少し誇張があるように思うがな。

エマ(大きな声で。)

私は誇張はしていません。私がこの世の柱を見る時、私が見ているものは偉大なゼウスその人ですわ。

ハーデイ(ミントに、はつきり聞こえるように。)

まだ目が見えるんでしょうか。(あれだけ飲んだ後で。)

(エマ、彼の方を向く。下品な言い返しをぶつつけるつもり。)

エマはこれで音に聞こえている。しかし、それよりもつと含みをもたせて、ということは、もつと危険なものが後に控えていることが分かるように、静かに話す。）

エマ 聞こえましたわ、ハーディ艦長。これは私の家です。その私の家に態々訪問して下さるお客様達に、少々多めのブランドーとシャンパンの乾杯で、私が光栄の意を表して何が悪いのでしょうか。勿論あなたのピューリタンの精神では、多少、多過ぎのブランドーかもしれません、それがあなたに何の関係があるのでしょうか。

ハーディ それなら一向に構いません、レイディ・ハミルトン。このお屋敷があなたの家だったのでね。さつきはそれが分かっていませんでした。この私の固いピューリタンの精神のせいでしょう、きつと。

(ハーディ、売り言葉に買い言葉が出来て嬉しいという顔。ネルソン、自分にとって、最も不幸な争いになり得ることを察して急いで止めにはいる。)

ネルソン マートンは私の家だ、ハーディ。それに君の家でもある。そう、ここにやってくる誰の家でもあるのだ。そして勿論、エマの家でもある。エマ、頼む、ハーディ艦長は私に話があるんだ。明日ブラックウッドがコーリングウッドに持って行く私の作戦についてももう少し詳しい指示を得たいと言っている。明日早朝の出発なので……

エマ(苛々とネルソンを押しやって。) 艦長、あなた、まだ私の演技について何の批評も話してくれてないわ。私の酔っ払い演技に、どつやら心から飽き飽きしたご様子ね。

ネルソン エマ……

ハーディ 飽きるなんてとんでもないです、レイディ・ハミルトン。それから酔っ払いなんてそんな風には見えませんでした。これまでに何度かかの有名なレイディ・ハミルトンの演技」について聞き及んでおりましたが、それを見せて戴いた今、ヴィクトリー号に乗船する同僚の将官達の無聊(ぶりよう)を慰めることが出来るでしょう。先程あんなにも素晴らしく命を吹き込まれたあの婦人の話を連中にしてやりません。コーリングウッド提督の艦隊に加わるためにカディスまで行く途中、将官達も何らかの楽しみはなければなりませんから。

エマ それでは、その将官達にどうぞお話し下さい。私があんなにも素晴らしく命を吹き込んだ婦人、その人の名はアンドロマケードと。将官の方々もあなたと同程度にしか古典の教養がなさそうですからね。それから、この婦人はピューリタンの意味でなく、ギリシャ古典の意味で言いますとね、貞淑な妻、トロイの王子、ヘクトールの操正しい妻なのです。ですから、この婦人がヘクトールと一緒に住んでいた家はヘクトールのものであるし、アンドロマケードのものであるのです。

ネルソン(ここに至っては厳しく。) エマ、もうこんな馬鹿げたことは止めるんだ。ハーディが言いたかったことは、ただ……

(エマが全く自制を失いそうになっている事をネルソン、正確に見て取っている。しかしネルソンはまだ微笑をたやさないうつろめしている。ネルソンの親戚達はウイリアムの導きにより、急いで部屋を出ているところ。ジョージだけが、この

場の成り行きを深い悲しみで眺めながら、なんとか留まっていようとしている。ミントは耳を澄ませてはいるが、同時に飽き飽きしており、この時までには本を出して、読んでいる振りをしている。）

エマ（ネルソンを押しやって。）ハーディ艦長の言いたいことぐらい私には分かっています。それにこの人だつてちゃんと知っていて言っている。私があなたの妻ではないと、ネルソン。教会の認めた正式の妻ではないと、それを言いたい。いいですか、艦長、教会なんか糞くらえよ！ 私はね、この世の正しくて正直なもの全てにかけて言いますけど、ここにいるこの人、ネルソン、の正式な唯一の妻なのです。それにこの人の子供、ホレイシア・ネルソンを生んだのは、この私なのです。

ネルソン（警告するように。）エマ、止めるんだ。馬鹿な真似は止める。

エマ（癪も常軌を逸して、今や誰も止めることが出来ない。）この家に今いる人達全員に、はっきりと言いましよう、艦長。ネルソンの家族、ネルソンの友達、それに、ネルソンの召し使い達には、はっきりと言いましよう。私はネルソンの妻なのです。さあ、乾杯の用意！（いいですか。）老いばれ国王ウインザー、その妻のドイツ野郎、二人とも梅毒に罹ってしまえ！

（グラスを飲み干し、グラスを肩越しに後ろに投げる。）

エマ　これが私の王家への乾杯よ、ハーディ。あの二人以外に対しては、この私、エマ・ハミルトンは、正式なホレイシヨ・ネルソンの妻なのです。

ハーディ　それに例外がもう一人。即ち、レイディ・ネルソン。

（間。ネルソンが口を開く。エマ、抑えられた形。エマが口をきっていたら、もつと激しいものになっていたところ。）

ネルソン　ハーディ、今のは許し難い。

ハーディ　私は失礼します。

ネルソン　今は許さん。

（ハーディ、それでも出て行くこと、動き始める。突然ネルソンの威厳のある声が響く。）

ネルソン　ここに残るんだ、ハーディ。これは命令だ。

（ハーディ、立ち止る。これは彼が決してあらがえない声である。しかし、エマは続ける。）

エマ　この男色野郎にこの家をさっさと出て行って貰いましょう。二度と足など踏み入れさせるものですか。ネルソン、それは貴方への私の命令です。

ネルソン　君の命令は大抵は聞くが、エマ、これは駄目だ。

エマ　あら、そうですね。それは私がこの家を出るということですね。フランチェスカ、私の馬車をすぐこちらに回して頂戴。

フランチェスカ　Subito, eccellenza, subito.（畏まりました、奥様。すぐに。）

ネルソン　フランチェスカ、今の言葉に従うことはない。この部屋をすぐ出て行きなさい。お前が必要になった時には奥様はベルを鳴らして呼ぶ。

（ネルソンのめつたに聞かない強い命令口調を聞き。フランチェスカ奮える。躊躇。エマの方を決心がつかず茫然と見る。）

(間)

フランチェスカ(ついにナポリの征服者に深い御辞儀をし
て。) *A vostro ordine, signoria.* (仰せの通りに、ご主人様。)
(フランチェスカ、急ぎ出る。出て行くときに十字を切つて。)
Jesui Jesui (ああ、イエス様。)

ネルソン(エマの方を向き。) エマ、ハーディ艦長に謝る
んだ。国王陛下と女王陛下に対して君は言つてはならないこ
とを言っている。それからブラックウッド艦長にも謝るんだ。

エマ 謝る? ネルソン、貴方どうかしているんじゃない?

ネルソン この二人は海軍に奉職している。その海軍は国
王陛下のもとにある。だから国王をさっきのように罵るのは
許されない。少なくとも彼らの聞こえる所ではだ。分かるな。
決して許されないのだ。

エマ あの老いぼれの気違いに忠誠を誓っているから、っ
ていふの?

ネルソン そうだ。

エマ ベッドで誰かさんが誓つた言葉よりは神聖な誓いつ
ていふのね、勿論。

ネルソン(静かに。) どんな誓いも同じ程度に神聖なんだ、
エマ。教会でいやいやながら行なわれた誓い、それは破られ
なきゃならないこともある。その誓いの下では幸福がないか
ら...

エマ 幸福がない。これはいいわ。今話していたのが結局
それでしよう? 私のベッドよりも、トム・ティットのベッ
ドの方に幸福がある。そんな風に感じているのなら、さっそ
とあっちに行つたらいいじゃないの。

ネルソン(声を上げずに。) エマ、君はそこでそんなこと
を言つてみんなの笑いものになっている。笑いもの、これは
私が何よりも嫌うことだ。さあ、二人の艦長に謝るんだ。そ
うすればさっきのことはすべて忘れよう。

エマ(軽蔑したように。) そうしたらまた私を愛して下さ
るつていふのね。じゃあ、それを誓つて。

ネルソン 君のことはいつだって愛しているんだ。そんな
ことに誓いはいらぬ。君はそれをよく知っている。

エマ そんなこと知らないわ。もし知っていたら、謝るだ
の謝らないだの、そんな話はない筈でしょう。

ネルソン(鋭く。) エマ、頼む、やってくれ。私のため
だ。

(間あり。エマ、グラスを飲み干す。)

エマ お願ひされているよりはもつと立派にやってみせま
すわ。国王への不遜な気持が私にない事を示すために国歌を
歌いましょう。これなら文句はないでしょう。(お釣りが来
るくらいですわ。)

(ハープシコードに近づく。)

エマ それに芝居を終にするには国歌が一番相応しいわ。
キティー、キティーはどこ?

ジョージ 僕が呼んで来ます。(呼ぶ。) お母さん! お
母さん! 早く来て。ハープシコードで国歌を弾いて下さい
て。

(訳註) イギリスの国歌は、

God save our gracious King!

Long live our noble King

God save the king.

Send him victorious,

Happy and glorious,

Long to reign over us,

God save the king.

神よ、我々の誉れ高き王にいや栄えを。

我々の王に長き命を。

神よ、いや栄えを。

彼に勝利あふれる、幸福な、

栄光ある命を与えよ。

我々を末永く治めよ。

彼にいや栄えを。）

(キャサリン、息を切らして駆け付ける。)

エマ キティ、あなた、国歌を弾いて頂戴。私が歌うから。

キャサリン ええ、それは。喜んで。

(キャサリン、席に坐り、弾き始める。親戚の残りの者達も、

いざいざはどつやら終わったらしいと思ひ、部屋に帰って行く。

エマ、全員が入って来るまで待つ。それからネルソンの

方を向き、彼に面と向かって歌う。)

エマ (歌う。)

Join we great Nelson's name,

First on the rolls of Fame,

Him let us sing.

Spread we his fame around,

Honour of British ground,

Who made Nile's shores resound,

God save my king.

(有名な人のリストの一番上)

我々はネルソンの名前を加える。

そして彼を称えて歌おう、

我々は彼の名声を広げる。

それはイギリスの名誉なのだ。

かつてナイルの河岸が彼への歓呼で

こだましたのだ。

神よ、私の王に栄光を。)

(エマ、深い御辞儀をする。「私の王」とは誰を指すか、こ

れにより完全に明らかにさせる。)

エマ (ぶっきら棒に。) 歌詞はこれしか知らないの 知

りたくないの。

(全員ネルソンを見る。エマの「謝罪」をどう受けとめたら

よいか、その答をネルソンから得るために。ネルソン、礼儀

正しく拍手する。)

ネルソン いいぞ、エマ。歌い方が実にいい。いつもなが

ら、ひどく褒められた気分になったよ。

(唐突にエマから視線を移してハーディの方を向き。)

ネルソン ハーディ、食堂で話がある。ひどい雨だ。庭で

話そうと思つたが、論外だ。ブラックウッド、君も来てくれ。

コーリングウッド宛の書簡をもつと詳細に調べておく必要が

ある。

ブラックウッド はっ、分かりました。

ネルソン では皆さんはこれで・・・寝室の方へ上がりま

すか。

(これは王の命令に等しい。全員低い呟き声で従う意を表明する。)

ネルソン では一人づつに言うのは省略して・・・どうぞおやすみなさい、みなさん。明日の朝までぐっすり。

色々な声 おやすみなさい、ネルソン。お兄さん、伯父さん、等々。

(ネルソン頭を下げる。それから静かにハーディとブラックウッドを部屋から導き出す。三人が食堂の方へ進んで行くのが見える。この時までにはエマ、ハーブシコードの椅子に坐っていて、軽くキイを叩いている。笑う。)

エマ(出て行く家族達に。)伯母様、お姉様、キャサリン、(ミントに。)大切なお客様・・・ネルソンの今の言葉を繰り返しますわ。どうぞぐっすりと、本当にぐっすりとおやすみなさい。

(家族の者達、小声で挨拶。退場。階上へ去る前に、食堂の入り口を通りすぎる。エマ、相変らず怒り狂っているのが分かる。ハーブシコードの蓋をボタンと閉め、もう一杯注ぐために立ち上がる。ミントが最後に部屋から出て行くところ。)

ミント おやすみなさい、レイディ・ハミルトン。

エマ ミント、あなた、いて頂戴。

ミント もう遅いですから。

エマ 十一時十分が遅いって？ いつから。

ミント えー、書類を片付けませんと・・・

エマ ミント、ミント！ 私のことを下品な、飲んだくれの、あばずれだと思っているの、貴方は。それに、他の者達と同じ。私が早く死ねばいいと思っている。でも私を一人で

放っておかないで。ゼウスのいかづちに私一人で打たれるの？

そうはさせないで。お願い。

(間。ミント、肩をすくめて留まることにする。)

ミント ゼウスの雷もすぐ子供の太鼓に変わってしまうのではありませんか。もしレイディ・ハミルトンがその気になりになりさえすれば。

エマ その気におなりになってどうするといつの。

ミント それは今までの御経験でとくにご存じの筈。

エマ ああ、あれね。レイディ・ハミルトンは勿論ご存じ。でもロード、ネルソンもそれをとくにご存じ。だから困るの。

(食堂で二人の艦長とネルソンが会議をやっているのが見える。再びテーブル上の銀器があちこち動かされる。)

エマ あるいは、困り始めているのね。

ミント(からかいの調子で。)でも、もしあれが効かなくなったら、この世はおしまいでしょう？

エマ ええ、私はおしまい。

ミント すると、彼もおしまい。

エマ そう。彼もおしまい。だからあれは失敗は許されないの。そうね？

ミント だから、失敗はなし。

エマ 今夜のこの時刻でなら、私も「失敗はなし」という気分だわ。でも明日の朝、フランチエス力が起きがけの一杯を持って来る時、あの時刻になると、自信がなくなる。また不安になってしまつ。ああ、ミント、貴方は五年前の私を知っているわ。あの時にもこんな下品な飲んだくれのばいだった

たの、私？

(彼の方を向いて。)

エマ そうね、貴方は答えてはくれっこない。貴方に代わって私が答えるわ。「下品？ええ、そうです。下品でいらっしやいました。鍛冶屋の娘、それがいつも見えていました……いつだって。」

ミント そんな、とんでもない。

エマ(軽蔑的に。)(ここで貴方の自由平等主義のインチキスピーチがあるのね。)(政治家の口調で。)(鍛冶屋の娘であれ、この自由の国イギリスでは、人生における最高の地位につくことが可能なのであります。例えばナポリ王国、イギリス大使夫人にまでも。そしてその卑しい生まれの痕跡さえとどめない。(ふざけて、架空のグラスを上げて。)(鍛冶屋の娘だって？)とてもそうは見えない。命を賭けて誓ってもいい。ただちよつと普段の振る舞いに、品のないところがあるな。それに言葉が少し乱暴だ。それからあの足……でつかくて……)

ミント(抗議する。)(足が大きいだなんて……)

エマ いいえ、足は大きい。それを小さなスリッパに無理矢理入れるもんだから、いつだって気分が悪くって仕方がない。でも本当のことを言えば、私が下品なのは、鍛冶屋の娘だからじゃない。私はただ単に下品なの。それだけのこと。たとえ伯爵の娘に生まれたってやはり下品。それに伯爵の娘にだってなるうと思えばなれたわ。父親になつてくれると言つたら伯爵の名前だつて、一、三人あげられる。フン、そうなつたら近親相姦ね。やれやれだわ。私だつてちゃんとしたイギ

リスの貴婦人らしくしようと思えばできた。あの老いばれのウイリアムの妻の座にいたつて。その気にさえなればね。だけど上品にしたつて何だつていうの。あのキャサリン マツチャムみたいに生きたつて。あれが人生と言えるの？(飲む。)(だから、私は品がなかった。いつだって。これからだつて。これが私の生き方。でも「ばいた」。ばいたつていうのはどうなの、ミント。)

ミント レイディ・ハミルトンの気前のよさは音に聞こえています。ベッドに関してだけけちになる理由はないでしょう。

エマ(思い出すように。)(そう。今までずっと気前がよかつた。お金を取つたのは十代の時だけ。そして夫のウイリアム、あの人に不満のあるう筈がない。もともと多くを望む人ではなかつた。かわいそうなウイリアム 隙間風の吹く部屋で、台の上に私を素裸で何時間も立たせて、自分はうるうると歩きまわる。あの人の歩き方！おかげで私、しよつちゆう風邪をひいていた。そう。私は私なりに、あの人の忠実な妻だつた。)

(ミント、驚いて眉を上げる。)

エマ そう、これがあの人のやり方。イギリス最大の英雄に妻を寝取られて不幸だつた？とんでもない。お陰で却つて生き生きした人生を送れたのよ。正直なことを言えばちよつと死ぬのが遅すぎた。あの頃の私達、漫画家のいい材料。絶好の！ドゥルーリー・レイン劇場のボックスで満面に笑みをたたえたサー・ウイリアム、その横に妊娠八ヶ月の私、おなかの赤ちゃんはホレイシア、もう一方の端にネルソン。音楽

と太鼓、それに愛国的な絵で、ステージからいつも挨拶を送られる。トム・ティットまで同じボックスに詰めこまれて・・・

ミント トム・ティットの坐る位置は？

エマ 私達のうしろ、勿論。あいつ、あの頃からもう、自分の場所を心得ていた。厭な奴。同情という同情はすべて一人締めにして！ あの優しい諦めた表情、すべてを理解し、許しているというあの微笑み、あんな奴、絞め殺してやればどんなにかせいせいするのに。

(間の後)

エマ ああ、ミント、貴方の考えは分かっている。なんていう怪物か、このエマ・ハミルトンという女は！ 自分がその地位を奪い、辱(はずかし)めた女を哀れみもせず、嫌うとは。そう、私は嫌っている。それが事実。それに嫌い方も人並みではない。あのトム・ティットは私を脅かしている。そして私は私を脅かすものは何でも大っきらいなの。

ミント あの人はもう何の危険もありません。脅かすとはまたどういう訳でしょう。

エマ 分らない。(ソクツと體を震わせる。) 多分生きてあそこにじつと待っているからだわ。

ミント ネルソンを待っていると？

エマ 分らない。でもとにかく待っている。そして、あの人を惨めな、罪深い者と感じさせている。あの人の父親は牧師だった。その父に鍛えられたピューリタンの原則があの人を苦しめている。トム・ティットを非難できない。こういう復讐の仕方もあるの。

ミント(微笑む。) 復讐の女神を演ずるのは、あの人には荷がかちすぎるんじゃない？

エマ 荷がかちすぎるって？ とんでもない。幕に乗った魔女だけが復讐の女神と思つたら大間違い。上品なりユウマチのイギリス婦人、礼儀作法に関する洗練されたセンス、膝の上には聖書、法律だつて味方をしている。そんな婦人の方がずっとよく(復讐の女神を)演じることが出来るのよ。もう一杯頂戴。怖いのを忘れるには一番いい薬なの。

ミント(グラスに注ぎながら。) 思い出して戴かなければ、レイディ・ハミルトン。これは酔つ払うにも一番いい薬なのです。

エマ そうね。それも学んだわ。ねえ、ミント、今までは「下品」と「ばいた」の二つだつたけれど、それに「酔つ払い」が加わつたわ。このことでは五年前と比べてどう？

ミント(グラスを渡しながら。) 生来はつらつとしていらつしやいます。それを人工的助けによつてさらに強化なされる。そうなさつても自然さを全く失われなかつたようにお見受け致します。

エマ フン、そうね。(ゴクゴクゴクとゆっくり飲んでゆく。その時間長い。)

ミント(真面目に。) 今では沢山飲まれても、酔が回つて来ないようにお見受け致します。

(間)

エマ そう。貴方鋭いわね、ミント。貴方の目を逃れる事はできそうにないわ。私朝から晩まで飲んでる。楽しみのためじゃない。もう他人を楽しませるためでもないし、自分

を楽しませるためでもなさそう。それなのにハーディの奴、よくも言ったわ。「それでもまだ目が見えるのか。」人の気も知らないで。私、ハーディも怖い。あいつはそのことを知っている。あの人達、食堂で何をしているのかしら。

ミント 作戦会議です。

エマ コーリングウッドが指揮するやつね。

ミント（敬虔に。）イギリスの為に祈りましょう、彼がそれで勝つようにと。

エマ それは勝つでしょう。ネルソンの作戦ですもの。（急に苛々と大股で歩き始める。）ハーディの奴、ネルソンに恥をかかせるようなことを言うて無理矢理「自分が行く。」と言わせるんじゃないかしら。狡い奴、ハーディって。義務、名譽、祖国、こういう短い言葉がネルソンにどんな効果を与えるか、よく知っている。今あの人にハーディの奴が言っているところ、ちゃんとね。心配。本当に心配。貴方が言っていた私の切り札、あれもハーディ艦長の角笛で效かなくなってしまう。

ミント（真剣に。）そうは思いません。

エマ（熱心に。）本当にまだ效くかしら。私、まだ大丈夫なのかしら。

ミント（丁寧な。）人を魅了する力はロムニーに肖像画を描かせたあの頃と同じです。

エマ（鋭く。）嘘をお言い！ 私はおべっかは好き。でも、ロムニーのことを言うなら、それはもう限度を越えている。それは嘘！

ミント（静かに。）私は美しいとは言いませんでした。人

を魅了する力と言ったのです。

エマ 蝋燭のあかりでね。それに半分盲の人に。（目を拭う。）ブランドーのせい。（この涙は。）

ミント ネルソンにとつては、ロムニーが見た通りのレイディ・ハミルトンなのです。今も、これからも、いつでも。蝋燭のあかりだろうと、日の光だろうと、半分盲だろうと、両眼がすっかり開いていようと。

エマ 私が自分にどう見えているか、それが貴方に分かつたら・・・朝になつて目がさめる。そして鏡を覗き込む。自分の顔を見る。「ばいた！」思わず叫ぶ。こんな顔ネルソンに愛される訳がない。なんて顔！なんてひどい姿！だから朝食の時フランチェスカにブランドー（入りのワイン）を二、三杯持つて来させる。すると夕方までにはなんとか再び「聖なる女」になることができる。そして自分で自分に言い聞かせている。「勿論ネルソンは私を愛している。あの人はなんで運がいいんだ。こんな私を手にいれたんだから。」（こんな風に言い聞かせる。）でも今夜は違つ。どうしてかしら。（エマ、再び目を拭う。ハンカチを脇に置く。）ああ、私のネルソン。どうしてこんなに慕わしいの。

ミント そのようですね、ええ。

エマ そのよう？ ああ、ミント、貴方には分からないわ。私の気持ちなんか。私、ネルソンを愛している。自分の命なんかどうでもいいの。（演技の型に入ろうとして。）いいえ、これは演技ではない。ネルソンに対する感情を演技にはいけない。（ああ、でもどうしてこんなに慕わしいのか。）きつとあの目だわ。ネルソンの私を見るあの目。あんな目を

して私を見てくれた人はいなかった。（突然怒る。）ああ、それにしては何で遅いの。これだけ時間をかければ十分な筈でしょう。

（ハーブシコードに進む。）

エマ 私の呼び出し、まだ効くかしら。

（ハーブシコードをあけ、キイをたたき始める。）

エマ 合図があるの。これは絶対の合図。これでもしあの人が出来なかったら、私はもうおしまいっていうこと。怖い・・・今夜のあの私の態度・・・あんなことをした後・・・でも、やってみるしかない・・・

（ルール・ブリタニアを弾く。大きな音でも大仰でもなく、優しく、可愛らしく。ネルソン、食堂で頭を上げる。明らかに音が聞こえている様子。再び頭を下げ、仕事に戻る。）

エマ 駄目なのかしら。

ミント リフレインのメロディの方が効き目があるのではないですか。

エマ いいえ。リフレインのところまで行ったことは今までのにないの。（その時までには必ずネルソンが現われる。）あの人、リフレインの旋律が下品と思っているの。

（エマ弾き続ける。しかし何も起こらないように見える。実際にはネルソン立ち上がり、急に食堂から出る。）

エマ（脅えて。）ミント、今夜の私、酷すぎたんだわ。あの人もう決して私を許してくれないのかしら。

（この質問に答えるかのように、ネルソンが入ってくる。エマ、ハーブシコードから立ち上がり、彼の方に進む。二人キスする。）

エマ（やっと。）ミント、貴方、読まなきゃならない書類があると云っていたわね。

ミント（扉のところで。）もう書き込みをやっている段階です。

（ミント退場。二人だけになるとエマ、優しい身のこなしで片膝をつき、頭を下げ、服従の姿勢を取る。）

エマ ネルソン、私の過ちでございます。どうぞお許し下さい。

ネルソン（抱き上げようとして。）エマ、エマ。

エマ ああ、御主人様、私は重大な過ちを犯してしまいました。この身を御主人様の偉大な意志の下にすべてお委（ゆだ）ね申し上げます。存分にお裁き下さいませ。

ネルソン（笑って。）僕の意志が何を求めているか、それはお見通しじゃないか、エマ。ただその「偉大な」というのは別の問題だ。「消そうとしても消しえない」というのは確かだがね。

（ネルソン、エマを持ち上げようとする。）

エマ いいえ、どうしてもお許しを戴きとうございます。

このように膝を曲げて・・・どうぞ・・・ここに誰もないじゃないか。

エマ（かすかに苛々して。）私のこういう姿、自分の罪を認めて心からお許しを乞う姿、それがご覧になりたいのではないかと思いましたが・・・

ネルソン 君の姿ならどんな姿でも見たいよ。だけど今、演技の姿はどうもねえ。

エマ 私の演技の姿がお嫌い？

ネルソン（やつとエマの體を持ち上げることが出来て。）
とんでもない。大好きに決まっているじゃないか。しかしい
つもじゃないんだ。二人だけの時は演技じゃない方がいい。

（ネルソン、熱情的にキスする。エマ、応ずる。）

エマ ひどくお行儀が悪かったわ、ひどく。

ネルソン もう忘れたよ。

エマ あの人のことを、「この男色野郎」って、私言っ
たわね。

ネルソン うん、まあ、あいつがそうでないことを期待す
ることにしよう。

エマ 私、偉大なネルソンの顔に泥を塗ってしまった。そ
んな私なのに、我慢して下さっている。何故？

ネルソン そんなことがまだ分らないのか。

（貪欲にキスする。）

エマ 艦長達への指示は終わったの？

ネルソン もう五分ある。

エマ じゃ私、夜の支度を・・・

ネルソン ちょっと待って。

エマ お化粧。ほんとに目のさめるような・・・今夜は。

ネルソン そんな特別なことは・・・いつもの通りで充分
だ。至福というものだ、いつもの通りで。

エマ 今度は演技をしているのはどなた？

ネルソン いや、これは演技じゃない。ねえ、大事な大事

なエマ。あの時の僕の喜びが分かったら・・・あれは奇跡だ・
・ほら、手が震えている。

エマ それだけではすまないように・・・もっと・・・す
ぐにいらして。私がネルソンに恥をかかせる時、それは私が、
ネルソンを失いはしないかと怖がっている時なの。愛のため
でそうなってしまうの。

ネルソン 僕を失うだなんて、どうしてそんなことが・・・
（キャサリン、入り口に現われる。ネルソンもエマも全く動
く気配なし。）

エマ おはいりなさい、キティ。

（キャサリン登場。場の状況に喜ぶ。驚きの表情なし。）

キャサリン お邪魔してすみません、兄さん、エマ。

ネルソン（エマをまだ抱擁した俤。）入って、キティ。何
だい？

キャサリン 息子のジョージなんですけど・・・今夜が最
後なので・・・明日の朝はとも早いのです。で、もうお会
いできないからと、お別れの挨拶を・・・

エマ 呼んで。ジョージは好きだわ。私がもう五つ若かっ
たら、ジョージのことで貴方に焼き餅を焼かせてあげること
もできるのに。

キャサリン（にやにや笑う。）まあ、エマ・・・いつも家
族に優しいことを言ってお下さって。

（扉へ進む。）

キャサリン それにちょっとした伝言があるようですわ、
兄さんに。

エマ（微笑。）私にはないのかしら。

キャサリン（御辞儀。）それはないようですわ。随分秘密
のこのようにしているんですの。お入りなさい、ジョージ。

(ジョージ登場。緊張。固くなって真面目な顔。)

キャサリン(ジョージに。) そんなにコチンコチンにならなくてもいいの。伯父様、伯母様にちゃんと挨拶してね。

(キャサリン退場。この時までピツタリくっついていたネルソンとエマ、ここで抱擁を解き、微笑み、ジョージを暖かく迎える。)

ジョージ 僕の人生で最も思い出深い四日間でした。有難うございました。

エマ(優しくキスして。) 可愛いジョージ、マートンに貴方を迎えられてよかったですわ。またすぐ来て貰えるようにこちらでも考えますよ、必ず。

ジョージ(会釈。) お心遣い感謝致します、レイディ・ハミルトン。

エマ またレイディ・ハミルトン?

ジョージ すみません。エマ伯母さん。

エマ(ネルソンに。) 早く切り上げて来てね。ハーディ艦長には「この男色野郎」のことでは悪かったって。

(エマ、ジョージに投げキスを送って退場。ネルソンと二人だけで残され、ジョージ、見た目にも緊張。しかし同時に、なされるべき義務も意識しているのが見てとれる。ネルソン、エマを凝視。ジョージには全く気を止めていない。ジョージ、ポケットを探る。)

ジョージ ホレイショー伯父さん。僕、これを渡さなければいけないんです。

(紙で包まれた品物を差し出す。)

ネルソン(包を開けて。) 何だい、これは。

ジョージ マラリアの発作に効くって言われているものなんです。バースのうちの小間使が是非伯父さんにつて。僕、頼まれたんです。

ネルソン それは親切だ。

ジョージ こんなもの郵便で何百つて送られてくるんだよって言ったんですけど、どうしても個人的に渡してくれって言うて。それから、これはうちのベツィからのものだってよく言うておいて欲しいって。

ネルソン(微笑。) そうか。じゃあ手紙を書かなきゃね。(食堂から持つて来ていたブリーフケースを持ち上げて。) いや、今書いた方がいいな。それでお前がその子に手渡せばいいんだ。鉛筆で許してくれるだろうな。

ジョージ ええ。でもそんなに気にしなくても・・・

ネルソン(書きながら。) 勿論これは書かなくちゃ。ベツィって言ったね。

ジョージ はい。

(間の後、ネルソンが書いている時に。)

ジョージ でも伯父さん、目を酷使してはいけません。特にたいして大事でもない手紙を書くために目を使ったりしては・・・

ネルソン それは違つよ、ジョージ。思いやりの心に対する礼状。これは大事なことだ。私に対してどんな噂がたっているか知らないが、私が礼儀まで忘れていたとは決して言わせない・・・御身ご自愛専一祈り上げ候。敬具。ホレイショー・ネルソン・ブロンテ。

(ネルソン、ジョージに手紙を渡す。)

ジョージ ベツイは大喜びで……いや分かりませんが、僕には。売ったりしなければよいがと思います。

ネルソン 売ればいいんだ。だけど、あまり安いのは嫌だな。

(ネルソン、机から出てきて握手を求める。)

ネルソン ジョージ、君が客に来てくれて楽しかった。だんだん若者になってきているね。エマがさっきも言ったように、マートンでは君はいつでも大歓迎だ。

ジョージ 有難うございます。

(ネルソンが立ち上がろうとする時。)

ジョージ もう一つあるんです……

(ネルソン、立ち止り、振り向く。)

ジョージ 怒られるかも知れません。

ネルソン 君に怒る？ それはありえないな。

ジョージ レイディ・ネルソンからの手紙を持って来たんです。

(ジョージ、ポケットから取り出す。ネルソン動こつとしない。間あり。)

ネルソン(静かに。) そんなことをしてはいけなかった。

ジョージ でも約束をしてしまったんです。

ネルソン それもすべきではなかった。誰に約束したんだ。

ジョージ フランシス伯母さんにです。

ネルソン(怒って。) あいつを伯母さんなんて呼ぶな!

(自分を抑えて。) レイディ・ネルソンにはどこで会ったんだ。

ジョージ バースで。偶然にです。

ネルソン 両親はどこにいたんだ。

ジョージ 丁度引越の為に馬車に乗っていたんです。

ネルソン で、お前だけだったんだな。

ジョージ はい。

ネルソン(苦々しげに。) 偶然! (が聞いて呆れる。)

(ネルソン、ジョージから手紙をひったくる。しかし開けようとほしくない。)

ネルソン これはあいつの筆跡じゃない。

ジョージ ええ。僕のです。

ネルソン どうしてなんだ。

ジョージ もう一通別にあつたのです。二年ぐらい前に自分で書いて出された。でもその手紙は宛先までは届かなかつたらしいのです。伯父さんはそれを読んではいない、と伯母さんは思っていました。それで今是非読んで戴きたいと。

ネルソン 宛先までは届かなかつた……どうしてそう思ったんだ。

ジョージ エー……僕には分かりません。

ネルソン 分かった。とにかくお前は自分の約束は果たしたのだ。

(ネルソン、手紙の封を切らず、テーブルの上に投げる。)

ネルソン それから、こんな約束はもうするな。

ジョージ 分かりました、ホレイシヨウ伯父さん。

ネルソン さてと。(ジョージの肩をたたいて。) お前が悪いんじゃないぞうだ。もう行って寝なさい。

ジョージ もう一つあるんです、約束が。伯父さんがそれ

を読んで下さるよに、と。

(間。)

ネルソン (静かな怒りをもって。) 随分私を無視した話じゃないか。

ジョージ 伯父さんがどんな風に感じるか、その時には分からなかったのです。でも僕は考えたのです。どんな事情があったにもせよ、夫が妻からの手紙を読めないなんて、そんなことはありえないと。特に伯父さんだったら。

ネルソン 特に私が？

ジョージ 特に夫が伯父さん、世界に誇れる伯父さんだから。

ネルソン 褒め言葉は恐れいる。だがな、このお前の世界に誇れる伯父は、自分の妻がもうこの世にいないければいいと思っているような伯父でもあるんだ。

ジョージ (強い調子で。) でも伯母さんはまだ生きています。死んではいないんです、ホレイショー伯父さん。あの小間使のベツイが生きているのと同じように生きています。伯父さんはさっき僕に礼儀の話をしてくれたばかりじゃありませんか。

(間あり。ネルソン、拳を握ったり開いたりする。怒が爆発するのをやると止めている様子。それから急に手紙を取り上げ、封を切り中身を取り出す。初めの數行を読んだだけで、手紙をぎゅっと捻って床に叩き付ける。)

ネルソン (今は怒り狂って。) よくも騙したな。この二股膏藥の犬め！ これは奸計だ。陰謀だ。この家から、今、この場で、お前を追い出してやる。二度とこの家に足を踏み

入れさせんぞ。

(ホールへの扉に向かって怒鳴る。)

ネルソン キティ、キティ。来てくれ。それにマツチャムもだ。すぐ来るんだ。(ジョージに。) よくも人を引つ掛けてくれたな。この陰謀を、一生お前に後悔させてやるぞ。

ジョージ 僕は引つ掛けたりはしません。伯父さん、僕は・

ネルソン これが引つ掛けじゃないと言つのか、お前は。俺が三年前にあいつにつつ返した手紙、あの悪意に満ちた手紙なんだ、これは。

ジョージ 悪意に満ちた？ どうしてそれが・・・伯父さん。

(キャサリン、この時まで息を切切って駆けつけている。)

キャサリン 兄さん、どうしたの？

(ネルソン、キャサリンを無視。ジョージを見つめている。夜着を着たマツチャム、キャサリンの後ろに現われる。)

ネルソン (ジョージに。) お前はこの手紙を読んだのか。

ジョージ はい。

ネルソン あいつはお前にこれを読めと言つたのか。

ジョージ 読んでもよいと。伯母さんとしては、悪意がないことを確かめたかったんです。それで僕に・・・(勇敢に。) 悪意なんかありませんでした、伯父さん。全然。エーイ、悪意がありさえすりゃーすぐ断れたんだ。

キャサリン (呟くように。) ジョージ、悪い言葉はいけません。

ジョージ (手紙を拾い上げて。) 僕には分からない。僕に

はどつしても。何故これがあんなにひどい上書きを書いてつつかえさなきやならないような手紙なのか。

ネルソン（非常に静かに。）特に世界に誇れるこの伯父さんがね。

（エマ登場。脅えているマツチャム夫妻を押し退ける。）

エマ 何ですか、これは。

ネルソン 君には関係のないことだ、エマ。

エマ 関係がない？ 家中に響き渡るような怒鳴り声をあげて、今でも瘧（おこり）に罹ったように全身震えていて、それで私に関係がないですって？ 話して頂戴、今すぐ。

ネルソン 今すぐは話さない。．．．いや、これから先も話すことはないだろう。ただ．．．この子をこの部屋から出してくれ、頼む。

エマ（キヤサリンに。）この子が何をしたって？

キヤサリン（困ったように呟く。）分かりません．．．トム・ティットからの手紙をこどずかって来たとかなんとか．．．

エマ（茫然とする。ジョージに。）え？ 本当なの？ ジョージ。

（ジョージ、全く思いがけないネルソンの反応に茫然自失。エマに答える余裕なし。）

エマ じゃあ、ネルソン、貴方答えて頂戴。今の話、本当なの。

ネルソン 言った筈だ。君には関係のないことだ、エマ。

エマ（雷に打たれたように。）トム・ティットからの秘密の手紙、それが私に関係がないんですって？

ネルソン（声を上げて。）放っておいてくれ。私は外出し

なければならん。

エマ 外出？ この天気には？ 気違い沙汰よ！

ネルソン マツチャム、カンテラを用意してくれ。頼む。

（マツチャム、ホールへ進む。ネルソン続こうとする。エマ、ネルソンを止める。）

エマ 外はひどい天気です、ネルソン。外出なんてとんでもない。それにちゃんとした説明をしてくださらないうちは、この部屋からだつて出しません。

ネルソン（突然、彼独特の命令口調になる。）（退（ど）い）てくれないか、そこを。

（マツチャム、再び登場。火のついたカンテラを持っている。）

エマ それを渡してはいけません。

ネルソン さあ、よこすんだ、マツチャム。

マツチャム でも、レイディ・ハミルトンが今．．．ネルソン ここは私の家だ。まだあつちには所有権は移っていない。時には自分の家と考えているようだが、あれの許しがなくても私が出たいと思えば、庭へでも、どこへでも、勝手に出る。さあ、カンテラをよこせ。

（マツチャム、ネルソンにカンテラを渡す。エマ、道を塞いでいる。）

エマ（體で止めて。）ネルソン、こんなことってないわ。それなら私も一緒に参ります。

ネルソン（冷たく。）いや、私は一人で行く。（エマ、相変らず道を塞いでいるので。）通して戴きたい、レイディ・ハミルトン。

エマ（ギョツとして、一步後ずさりする。）戴きたい。レ

イディ・ハミルトン。

(ネルソン、エマの傍を通り過ぎる。コートを見つけ、羽織り、振り返る。)

ネルソン(マツチャムに。)(あの子は自分の部屋に戻らせるように。)

エマ 自分の部屋に? 凝らしめの為に鞭で打ってやる。

ネルソン(冷たく、エマの言葉を途中で遮って。)(いや、あの子にはどんな罰も与えてはならない。あえて罰を与えようとする者は・・・あるいは罰を与えるよう命ずる者は、誰でも・・・)(エマを見て。)(よいか、誰でもだ・・・即刻この家を出て行って貰う。(マツチャム夫妻に。)(マツチャム、この子を自分の部屋に連れて行くんだ。明日はいづれにせよ、早く発たねばならないのだ。このことを私は覚えておくべきだった。マツチャム、君達を騒がせて悪かった。では失礼する。)

(ネルソン退場。エマ、ネルソンの後を追う。)

エマ(叫ぶ。)(ネルソン! (次に哀願するように。)(ネルソン!)

(ネルソン、エマの傍を通り過ぎる。後を振り向かない。)(照明、全く暗くなる。その間最初内心の激動を示す音楽が聞こえる。それから雨と風の音。時々雷の音が混じる。)

第二場

(再び照明が当たると、そこは食堂。ハーディがまだはつきりと目を覚まして、またブラックウッドは眠った状態で、待っている。数秒の後、ネルソンが玄関とおぼしき場所に登場。)

コートから雨が滴り落ちてきている。静かに玄関を登って行き、食堂にまだ明かりがついているのを見、そちらの方へ進む。ネルソン、部屋に入る。ハーディ、立ち上がる。)

ネルソン(入口に立って。)(どうやら長い見張りだったようだな。)

ハーディ はあ。しかし連れがありましたから。

(ブラックウッド、ネルソンの声に目を覚まし、立ち上がる。)

ブラックウッド か、閣下、ご無事でお帰りに。

ネルソン(微笑む。)(ご無事かな? まあ、朝になってみなければ分からん。)

(雨の滴るコートを脱ぎ、椅子に掛ける。左手を右腕の腋(わき)の下に入れ、擦る。)

ブラックウッド ハーディと二人で随分、お、お捜ししました。

ネルソン 私がどこにいるか、ハーディにも分からなかったのか。

ハーディ(ブラックウッドに。)(ブラックウッド艦長、もう君は寝ていい。夜明けにはポーツマスに出発しなきゃならんし、その時刻まであと二時間もない。)

ブラックウッド 分かりました、艦長。(海軍式に敬礼。)

か、閣下。私は大変ほ、ほっとしています。そこに立、立っていらつしやるのを見、見て。心配しました。わ、私だけではありません。みんな心配しました。レイディ・ハミルトンは捜索隊を出させたほ、ほとです。

ネルソン(ハーディに。)(あれは今どこだ。

ハーディ やつと床におつきです。

ネルソン（ブラックウッドに。）おやすみ、ブラックウッド艦長。おやすみと言つても、寝る時間はもうたいしてないかな。寝ていられる時間を騒がしてしまつて悪かつた。

ブラックウッド　そ、そんな、閣下。な、なんでもありません。（礼。）失礼します。

（ブラックウッド、部屋から出る。階段を上がつて寢室に行くのが見える。）

ネルソン（ハーデイに。）私の居場所が分からなかつたのか。

ハーデイ　勿論分かつていました。あの、御自分だけの隠れ家に入つてしまわれたらしいと想像がつかました。あそこは閣下の特別な場所ですし・・・慥にこんな晩には造りが悪くて、隠れるには御粗末すぎますが・・・人に来て貰いたくはない筈だと・・・私でもお厭たろうと思ひまして・・・（ネルソンのコートに触る。）一、二杯、クツとやらなきやいけません、閣下。

ネルソン（怒つたふり。）クツとやるだと、ハーデイ。これは俺の最上級のフランス製ブランデーだぞ。

（ハーデイ、グラスに注ぐ。ネルソン、二、三滴飲み込む。）
ネルソン　自分の女と一悶着起こして、庭の隠れ家の屋根裏に閉じこもり、風邪をひき死ぬ。これはとても音に聞こえた提督の死に方とは言えんな。

ハーデイ　でもあれは「一悶着」ではすまされないことのように見えました。

ネルソン　そうだ。それではすまんだらう。あの後、騒ぎはひどかつたか。

ハーデイ　三時までは自室にひっこんだ者はあまりいません。レイデイ・ハミルトンはその後も残つて・・・

ネルソン（微笑んで。）それで捜索隊を出したんだな、あれは。

ハーデイ　ええ、でも驚いたことに、御自分では決して外に出ようとはなさいませんでした。

ネルソン　そうだ。あれは自分では出ない。

ハーデイ　プライドのせいでしょうか、それとも天候のせい？

ネルソン　プライドだ。いつも最後にはこっちが行つてや
らなきやいけない。今回もだ。この震えが止つたら行つてやるつもりだ。（もう一杯、小さなグラスに注ぐ。）ジョージはどこにいる。

ハーデイ　自分の部屋です。

ネルソン　鞭で打たれはしなかつたな？

ハーデイ　ええ。打つてはならないと、お命じになりましたから。

ネルソン　手紙は？　あれはどんな話をしていた、こんな面倒なことになつたいきさつについて。

ハーデイ　ジョージが、レイデイ・ネルソンからと閣下あてに手紙を託（ことず）かつてきた。それを閣下に手渡した。あまりにひどい手紙で、それをジョージの顔にたたきつけた。そして出て行けと命じた。もうジョージの顔も見たくない、声も聞きたくないと。それから急に・・・これは生涯かかつて、私、レイデイ・ハミルトンに分かることはあるまいと思われるが・・・何かの理由で、閣下が彼女の方を向き、侮

辱し、「レイディ・ハミルトン」と他人行儀に呼んだ。そしてこの雨の夜の中を出て行った。それから、言うにこと欠いて「こんなこと私の知ったことじゃない」と、呆れた話ですが・・・以上です。こういう纏めで如何でしょうか。

ネルソン 勿論それよりは相当きつい事を言っているんだろうが、纏めとしては大変よろしい。(心配そうに。)その手紙だが、あれはそれを読んだのか。

ハーディ いいえ。あの子が隠して、あとは何と言おうとガンとして聞き入れませんでした。勿論閣下ご想像の通り、みんな非難轟々、あの子を難詰しました。

ネルソン で、ジョージは何か言ったのか。

ハーディ いいえ。

ネルソン 一言もか。

ハーディ 私の知る限りでは。

ネルソン あの子が自分で手紙を読んだということもか。

ハーディ それは丁度その時、母親が聞いていましたから。

ネルソン そうだったな。母親は確かに聞いていた。で、キャサリンは皆に話したんだな、子供が私に言ったことを。

つまり、高潔な人間であるなら、自分の妻に突つ返すような手紙では決してなかった。

ハーディ そんな話は誰も信じやしません。

ネルソン 信じない。何故だ、ハーディ。一体全体何故信じない。この件で知られている、他のあらゆることと、ちゃんと符号しているじゃないか。忠実で、愛情溢れる妻、それが夫に裏切られ、今絶望の中で孤独に暮らしている。何故か。その夫は妻を裏切るだけではすまわず、彼女を孤立させるた

め、親戚を買収し、友人達を脅迫したのだ。このようなひどい仕打ちを受けている惨めな妻はそれでもパースで、一人健気(けなげ)に孤高を保っている。一方その馬鹿な夫の方は、愛人、その間に生まれた私生児、と一緒に、酒と好色の生活を送り、自分の名譽、名声を自ら踏みじっている。これがあの子の解釈だ、ハーディ。そして世間も、あの子の目で見ているのだ。

ハーディ 世間は閣下の甥ではありません。

ネルソン 私の甥も世間の一つだ。私はそう思っている。

ハーディ 若い目というものは事実を歪んだ鏡に写して見るものです。世間もそうではないでしょうか。

ネルソン この場合、どこを歪めて見ていることになるのだ。

ハーディ 私には事実が充分分かっていません。

ネルソン 君には全ての事実が揃っている。

ハーディ (少し苛々して。)閣下が、御自分の妻に酷い仕打ちをされた。この事実は私にあります。私に示されていない事実、それは、妻の方が閣下にどういう酷い仕打ちをしたか、です。それは必ずあると確信しています。

ネルソン 確信? 何故だ。

ハーディ 何故? それは閣下が如何なる人物であるかを、私知知っているからです。・・・ネルソン提督なる人物は、何の根拠もなく、あの婦人に、あんな仕打ちをする筈がないのです。何か・・・よほど許し難い何かを、あの婦人はしたのです。それは明明白白であります。

(間。)

ハーディ 余程の何か。そうではありませんか。

ネルソン そうだ。

ハーディ とても許せない何か。

ネルソン そうだ。

ハーディ それが何かなど、お訊きしません。ただ私に言える事は、このように本当の事実が示されていない時、世間はどうして正確な判断が持てようか、ということですよ。

(ネルソン、急に立ち上がる。)

ネルソン ええい、なんていい加減なものなんだ、この同情ってやつは。君は全く分かっていない、ハーディ。

ハーディ 分かっていないのは分かっています。だから正確な事実さえ(分かれれば……)

ネルソン(怒りをぶつつけるように。君は正確な事実を知っている。六年前、ナポリにおいて、私は故意に、私の自由意志で、悪名高い毒婦を抱く為、貞淑な、愛すべき妻を追いだした。これが起こった時、ヴァンガードの更衣室で、君達みんながどれだけ笑ったか。「まさかあの女のために、妻を追いだすんじゃないだろうな。あの女……十四歳で、ヴォークスホールガーデンでストリップショーを演じ、グレヴィルが、借金のかたにハミルトンに売り飛ばし、サー・ウィリアムの妻になるまでに、イギリスの貴族の半数と寝た経験のある、あの女のために、あのエマ・ハミルトンのために、まさか妻を追い出したりはしないだろう。」そのあざけりがどんなに大きなものだったか、私が想像出来ないとも思つか。

(間。)

ハーディ 閣下、閣下がそのように見抜いておられるとは

誰も思いもかけないでしょう。私も、今の今まで、思ってもいませんでした。閣下はおくびにも出しておられませんでした。私は全く気がつかず……

ネルソン そいつはどうかしている、ハーディ。私はまだ正気なのだ。正気であってそれに気がつかない。それはありえないだろう？

(間。ハーディから顔を逸らせる。)

ネルソン 私の聖なる婦人だつて？ とんでもない、ハーディ。王を侮辱した後、エマはシャンパングラスを投げ付けた。あの時、私が見たものは、ハーディ、君が見たものと違つても思ふのか。酔つ払いの中年女。それが私を笑いにし、自分自身も笑ひ者になっている。そう私に見えないとでも言つのか。あのゲヒた言葉、あの品のない態度、その度毎に、身が縮む思いをし、あの酒の臭いのブンブンする息に反吐を吐きそうな気分になっている。皆と一緒にあの女という間中、何度恥ずかしさに穴があつたら入りたいと思ふことか。ハーディ、君はこのネルソンが、こう感じていないとも思っているのか。

(間。)

ハーディ では何故、そんな一日一日をじつと辛抱していらつしやるのでしょうか。

ネルソン(面と向かつて。何故なら、その一日の後には夜があるからだ。

(間。ネルソン、微笑む。)

ネルソン ここで勿論君は疑問を呈するだろう。ベッドでしか存在しない、そんな愛が愛と言えるか、と。

ハーデイ はい、それはどうなんですか。

ネルソン 愛だ。今の私には簡単に言える。しかし、五年前の私、四十歳のナポリの提督には簡単ではなかった。いいか、ハーデイ、大抵の男はあの楽しみをその年までには味わいつくしている。それにもうすっかり忘れていて。それくらいのもんだ。しかし、この提督はその喜びを知ったこともなく、楽しんでこともなかった。ベッドで心身が解き放たれる、あの深い満足、あの強い恍惚。人生が男に与えることが出来る全てがそこにある。この世に存在する目的そのものがそこにある。そう、この提督には思えたのだ。これが愛か。かわいそうな、未経験のこの提督には、この問題は簡単ではなかった。簡単どころではない、ハーデイ、実に難問だった。このことは頭に入れておいてくれなきゃならない。つまりその四十という年でも、私はまだ牧師の息子だった。揺籃（ゆりかご）の時から、肉体の愛を排し、聖なる結婚による、言葉では表現できない喜び、神によって保証された喜びを、と聞かされて育った、牧師の息子だったのだ。しかしとうとう私がエマに降伏した時、私は・・・そうだ、これを言ったところで何の恥ずかしいことがあるう。私は、肉体の愛は精神に関わってくることを発見したのだ。それは精神が肉体に関わるのと何の違いもありはしない。何故なら、肉体は結局精神であり、精神もつまるところ、肉体だからだ。少なくとも私にはそうなっている。だからハーデイ、私は今のエマで何一つ変えて欲しいところはないのだ。私はあれを愛している。今の儘のあれを欲しているのだ。それだけ私はあれに執着している。あの女を、あれごと欲しいのだ。

(間)

ハーデイ 閣下、それはベッドでだけの愛というものではないのではありませんか。

ネルソン そうだ。しかし、もしベッドがないとしたら、一体何なのだ。何もありはしない。しかしもう一方の愛！口にも言い表せない、幸せこの上もない、あの結婚の絆（きずな）・・・父によって祝福され、国家の英雄に最も相応しいと考えられたあの結婚・・・あの落ち着き払った微笑・・・決して心を許さない體・・・もしこれが愛する夫を幸せにするのなら、仕方がありません。お応え致しましょう。でもこんなこと、私の生まれ、育ちからすると、本当にうんざりなことなんですのよ。・・・おお、ハーデイ、なんていう侮辱だ。これこそが地獄だ・・・しかし今は私はこの地獄からは抜け出ている。有り難いことにな。

(ネルソン、顔を覆う。それから立ち上がる。ハーデイに首で合図し、階段へ進む。)

ネルソン 少し休んだ方がいい。

(ハーデイ、ネルソンに従う。)

ハーデイ (階段のところまで。) 有り難い事にと、おっしゃいましたね、提督。

ネルソン (階段を登りながら。) 気に入らなければ、別の言葉を捜したらいい。「満足のいくことには」ぐらいいにでもするか。

ハーデイ クラージス街で物笑いになるのが、満足のいくことですか。

(ネルソン、歩みを止める。)

ネルソン くだらんことだ。単なる有象無象だ。敵の奴等に雇われてやっているだけさ。

ハーディ 閣下の敵はフランス以外にありませんか。ひょっとするとやじり倒して提督を次の海戦に出させまいとするナポレオンの手ではないでしょうか。

(ネルソン、激しい勢いで振り向き、ハーディを睨みつける。)

ネルソン ハーディ、貴様って奴は・・・しかしその手にはのらんぞ。(ハーディを見下ろして。)俺はカディスには行かん、分かったな。

ハーディ 分かりました。

(ネルソン、突然今度は階段を下りて、居間の方へ行く。ハーディ、ネルソンの後を行く。居間に入り、ネルソン、自分の鞆を取り上げる。)

ネルソン (ハーディが後について来たのを知らず、声をあげて。)ハーディ、クラージス街で俺が笑われた昨日の朝からずっとお前はそればかり考えていたんだな。ネルソンの奴、どんな誓いをたてていようと構うものか。あいつの精神、健康、愛、そんなものがどうなったって構いはしない。あいつを次の海戦には何が何でもひっぱり出してやる。これがハーディの奴の考えだ。そうは問屋が卸さんぞ。今度は絶対に行かん。街で笑われようと、罵られようと、知ったことか。それからコーリングウッドが俺の代わりに新しい英雄になる。それならそうと、ならしてあげばいい。

ハーディ (ネルソンのすぐ傍で、静かに。)いいえ、そうはなりません。

ネルソン なんだと？ なるに決まっている。あいつが海

戦に勝てば。

ハーディ 勝たないのです。勿論負けると言っているのもありません。二、三隻は拿捕(だほ)、それに旗艦戦艦に多少の被害、味方の方は、二、三隻に被害を被る程度。それも敵味方、平行線の戦隊を組んでの戦いの結果である筈です。

ネルソン 平行線？ 馬鹿か、お前は。食堂に行つて俺の作戦をもう一度見て来い。

ハーディ 充分見ました。何時間もかけて研究しました。ナイフやフォークの銀器を並べて調べてみると、なかなか綺麗なものです。

ネルソン その研究の間、お前の目はどこにしていた。あのテーブルの上で、敵味方、平行線になる所がどこにあったというんだ。貴様、酔っ払っていたんじゃないのか。我々の艦隊は二列になって、敵の艦隊に直角につっこんで行くんだ。一列は敵の心臓目掛けて、もう一列は敵の肝臓目掛けてだ。この作戦の天才的ところは、今まで戦われた海戦のあらゆる常識を完全に覆したところにある。つまり、平行線を徹底的に廃したところにあるのだ。形ばかりの大砲の打ち合い、二、三隻の分捕り、それに旗艦戦艦へのちよつとした被害。(そんな海戦じゃない。)これは殲滅作戦なんだ、ハーディ。

ハーディ (礼儀正しく。)はい、閣下。その話は何度も伺っています。

ネルソン この海戦の後では、フランスとスペインの戦艦はただの一隻といえども、海に浮かべることが出来ない。ただの一隻といえども、ハーディ。貴様の目はどこについて

いる。この完全な。徹底的な殲滅、この戦いの後、イギリスは少なくとも百年間、世界の海を支配する。そういう意図があつて初めて私の作戦として意味があるのだ。(それが見えていないのか。)

ハーディ 分かっています。これはなかなか奇麗な作戦です。

ネルソン (我を忘れて。) この野郎、よくもほざいたな。奇麗だと? なかなかだと? 俺に両腕があれば絞め殺してやるところだ。

ハーディ 食卓の上にナイフとフォークを並べてみると、奇麗だと申し上げたのです。それからもう一つ、テーブルは大西洋ではないということも。

(問。)

ネルソン フン。考え落としていることがあると言いたいのか。

ハーディ はい。一つだけ。

ネルソン 何だ、それは。

ハーディ 閣下ご自身です。

(問。ネルソン、笑つ。)

ネルソン そうは問屋が卸さんよ、ハーディ。そんな簡単な罠には捕まらない。コーリングウッドは偉大な司令官だ。

ハーディ 「偉大な」ではありません。「優秀な」です。

ネルソン この作戦で勝てるだけの力のある「優秀さ」だ。

ハーディ もしその作戦を使えば・・・

ネルソン この作戦を使わないと言つのか。この間、あいつに会つた時、詳しく説明した。良い作戦だと認めていたぞ。

細かい所まで。

ハーディ それはそつでしよう。しかし、これから二、三週間経ちます。そして彼の眼前に、水平線上に、三十隻、あるいはそれ以上のフランス、スペインの戦艦が戦鬪の隊形を組んで並んでいるのを見ます・・・これは恐ろしい光景です。

五マイル以上にわたつて、弦側がこちらを睨んでいる。その数は味方より多いのです。閣下はどうお考えでしょう。コーリングウッドはこの作戦をとるでしょうか、それとも慣れたいつもの作戦を。

(問。)

ネルソン 私の作戦だ、それは。

ハーディ 閣下の方が正しいかもしれませんが。しかし、私の考えを申し上げます。この作戦はこれまで一度も試されたことのない革命的な作戦なのです。天才によつて考えられた

作戦で、午後の数時間で、自分の全艦隊を全滅させる可能性があり、これを考案した天才自身は自ら指揮を取ることを拒否した作戦なのです。私には、コーリングウッドどころか、世界中のいかなる指揮官といえども、この作戦を採用するとは思えません。

(ネルソン、沈黙。答えることが出来ない。ジョージの姿が見える。こつそりと階段を降り、玄関に向かつている。バッグを抱えている。)

ハーディ (この間に。) エー、閣下、もう上に上がつていいでしょうか。睡魔が襲つてきまして・・・

ネルソン (鋭く。) 誰だ、ホールにいるのは。

(ハーディ、素早く食堂から出て、ジョージを見つめる。ジョー

ジ、驚き、階上に戻ろうとする。この時までにはネルソン、ハーディを追って食堂の入口のところまで出ている。(訳註)

「ハーディ、素早く居間から出て」が正しいか。()

ネルソン ジョージだったのか。

ハーディ はい、そうです。

ネルソン 入りなさい、ジョージ。(ジョージ、躊躇っている。ネルソン、命令口調で。) 入るんだ、ジョージ。(ハーディに。) じゃあ、ハーディ艦長、おやすみ。

ハーディ(御辞儀。)では失礼します。

(ハーディ、階段を上がる。ジョージ、食堂に入ってくる。いやいやの様子。)

ネルソン こんな時間にどこへ行くつもりだ。お前は八時まで出てはいけないことになっている。それから八時になったら、両親と出て行くことになっている。そつだな。

ジョージ はい。

(間。)

ネルソン こんな夜更けに、どこへ行くつもりだった。

ジョージ ロンドンです。多分。

ネルソン 十九マイルあるぞ。それに雨が降っている。

ジョージ 雨は止みました。

ネルソン それを貸しなさい。(バッグを受け取る。) 坐りなさい。

(ジョージ、おぼおぼと坐る。)

ネルソン 逃げようという話だな。

(ジョージ、頷く。)

ネルソン 私から、それからレイディ・ハミルトンからだ

な。それは分かる。しかし何故両親からもだ。

(ジョージ、答えない。)

ネルソン 鞭で打たれると思ったのか。

ジョージ そんなこと、平ちゃらです。

ネルソン じゃあ、何故だ。

ジョージ この家を出たかったんです。それだけです。

ネルソン 三時間経てばいづれにせよ出る事になっていく。両親とな。

ジョージ 両親とは話したくないのです。僕に答えられない質問をするに決まっています。お願いです。僕は伯父さんとも話したくないんです。行っていいですか。

ネルソン 駄目だ。(グラスにワインを注ぐ。) 泣いたよ
うな顔だ。泣いたのか。

ジョージ いいえ、そんなには。

ネルソン これを飲むんだ。

ジョージ 欲しくありません。

ネルソン 少し気分が直る。

ジョージ 気分なんかよくなりません、どうやったって。
一生涯、何をしたらって。

ネルソン 飲むんだ。

(ジョージ、仕方なく受け取る。一口すする。急いで返す。)

ネルソン お前は事を深刻に受けとめ過ぎている。慥にお前のことを罵った。しかし本気であんなことを言ったんじゃないんだ。

ジョージ 罵られた覚えはありません。

ネルソン 分かった。私がどんなことをお前に言ったにせ

よ、それは忘れてくれなくちゃ困る。

ジョージ 努力します。もう行つていいですか。

ネルソン ジョージ・・私が何をした。

ジョージ 何もしません。

ネルソン (バッグを指差して。) ここにあの手紙があるんだな。

ジョージ はい。

ネルソン あれに返すのか。

ジョージ 勿論返しません。もしも会つたら、お約束通り渡しました、とだけ言つつもりです。そして伯父さんはそれを読んだと。

ネルソン そして「悪意に満ちた手紙だ」と言つたと。

ジョージ いいえ、それは決して言いません。

ネルソン 何故それをとつておく。

ジョージ もう一度読んでみるためです。

ネルソン 何のために。

ジョージ 分かるかもしれませぬ。

ネルソン そうかな。お前が分かるとは私にはとても思えない。

ジョージ 僕も思えません。

ネルソン それを決して他人には見せないと私に約束してくれるか。

ジョージ 伯父さんは僕を何だと思つて居るのですか。

(そんな当たり前の事を訊いたりして。)

(間。ネルソン、もう一杯、自分用にブランデーを注ぐ。)

ネルソン 最も男らしい、名誉ある、高潔な少年だと思つ

ている。お前のような甥がいて、私は誇らしい気持ちだ。

(ジョージ、自嘲的に笑つ。)

ネルソン 笑うんじゃない。最近では誰もが私の事をあざ

笑う。軽蔑するのは構わぬ。しかし、笑うのは止めてくれ。

今お前に関して私が言つたことは本心からだ。

(ネルソン、ブランデーを飲み干す。そしてジョージに面と向かう。)

ネルソン よーし、ジョージ、こうなつたら話そう。大人の感情というものがどんなものか。お前には少し早いかもし

れないが・・・

(静かに、思い出そうとする努力は全くなく。)

ネルソン 「一八〇一年十二月十八日。愛する貴方、先回

お手紙を差し上げて久しくなります。お返事をお待ち申し上げ

ておりましたけれど、とうとう耐え切れず、またこちらから

差し上げます。(ジョージ、目を見開いてネルソンを見る。)

どうぞこの無礼をお叱り下さいませぬように。七月の手紙に

は書いておきませんでした、受け取つて下さつていますわ

ね・・・住み心地のよい、暖かい家。」

(ネルソンが手紙を読んで居るばかりでなく、それを暗記し

ているという事実を知り、ジョージ、惨めに頭を垂れる。)

ネルソン (優しく、しかし容赦なく。)'いとしい貴方、

どうぞ一緒に暮らしましょう。ご一緒に暮らせるようになる

まで、私は決して幸せになることはありません。以前書きま

したことをもう一度繰り返します。私にはたった一つしか望

みはありません。貴方に喜んで戴くことです。すべてを忘却

の中に埋めてしまひましょう。今までのことは夢のようにか

らぬ。

らぬ。

らぬ。

らぬ。

らぬ。

き消えてしまふ筈ですわ。」

(ジョージ、ネルソンに「もういい」という仕草をする。)

ネルソン 最後まで聞くんだ。今夜はもう少し多く涙を流しても、たいした違いはない。「貴方にこれだけは信じて戴きたいの。私がいつまでも貴方の、誠実で愛する妻であることとを。フランシス・H・ネルソン」

(ネルソン、もう一杯ブランデーを注ぐ。)

ネルソン これで分かったな。お前もあれも心配することはない。私はちゃんとあの手紙を読んでいる。

ジョージ(やつと。それなのに送り返した・・・あんな言葉をつけて?)

ネルソン(頷いて。そう、このネルソンに最も相応しく。

ジョージ 何をしたというんでしょう、伯母さんは。伯父さんがそんな酷いことをしなければならぬような。とても酷いことですね、きつと。

ネルソン そうだ。

ジョージ どんなことですか、それは。

ネルソン あの手紙を書いたことだ。

(間。)

ジョージ でもあれは親切で、愛情溢れる手紙です。

ネルソン あれは残忍な手紙だ。

ジョージ 残忍? そんな・・・

ネルソン 残忍な行為というものは、屢々愛と親切から行なわれるのだ、ジョージ。それも最も残忍な行為となるのだ。

(ジョージのあつげにとられた顔を見て。) ああ、こいつを説明しなきゃならぬのか。お前にはこれがそんなに大切なこ

となのか。

ジョージ(あつさり)。ええ、これくらい大切なことは他にありません。

ネルソン それを説明したところで、私の名譽は救えないぞ。お前はひどくそれを大事にしてくれているが。

ジョージ もし今の話が真実でしたら、きつと救うことになると思います。

ネルソン 真実だ。そこは間違いない。

(ネルソン、ジョージの隣に坐り、非常に静かに話す。)

ネルソン ジョージ、いいか、誰かに悪いことをする。あからさまな悪いことだ。そいつが徹底的に辱(はずかし)められて二度と立ち上がれなくなるような、そんな酷いことをする。さてそこでだ、その相手から、その行為を「許す」と言われる。これは地獄だ。これ以上の侮辱はない。

(ネルソン、飲む。ジョージ、ネルソンを見つめる。声が出ない。)

ネルソン お前にはショックだろう、勿論。お前はお祖父さんの血をうけている。敬虔な牧師、私の父親、その孫だ。

だから「許す」という言葉に憎しみで応えるのは少なくともキリスト教徒らしくないと感じるだろう。しかし本当にそうだろうか。イエスは頬をたたかれた時の応え方は教えてくれた。しかし親切にされた時の応え方は教えてくれなかった。

私はキリスト教徒としてかなり敬虔な方だ、ジョージ。敵を愛する事だつて少しは出来た。「少しは」だ、勿論。何でもものには程というものがある。敵が溺れている時、自分の船の危険を省(かえり)みず、私は助けた。それに捕虜に対し

ても。誰にも恥しない名譽ある扱ひをした。しかしジョージ・

（ネルソン、言葉を続けるのが困難。ジョージの目は瞬（まばた）きもせず、ネルソンに向けられている。その目はジョージの良心そのものである。）

ネルソン　しかし、決して報復しない敵、これはどう扱えばいいのだ。こちらのあらゆる攻撃に対してこの敵はただマストに優しく旗をひらめかせ、「貴方が何をなさろうと、私の大事な貴方、私はいつも貴方を許します。そして貴方を愛し続けるでしょう。」と信号を送ってくる。こういう敵に対してはどうすればいいんだ、ジョージ。愛してくる敵、これぐらいどうしようもないものはない。そして私の愛する妻は、その一貫した態度で、私を完全にたたきのめしたのだ。私に何が出来る、そうなら。ただ憎むこと、これしか残されていないじゃないか。

（ネルソン、グラスを飲み干す。テーブルに戻る。模擬海戦の食器を眺める。長い間。）

ネルソン　お前への講義はこれで終だ。長くて難しかったな。人間の愛と憎しみ、これは扱にくい問題だ、誰にとっても。

（ネルソン、もう一杯ブランデーを注ぐ。ジョージ、それをじつと見つめる。ミント、夜着を着た儘、階段を降りてくる。）

ネルソン（飲み干した後。）正解が分からない問題だ。それに私は学校に行っていない。お前が行っているような学校にだ。十一歳の士官候補生はその気になれば相当のことを学ぶことが出来る。しかし人生について学ぶことはできない。

（ミント、声かしているのに気がつき、用心深く扉の方に進む。ジョージがいるのを知り、驚く。しかし老練な外交官の習性で、それをうまく隠す。）

ミント　邪魔でなければいいのですが。

ネルソン　ジョージと形而上のことについて議論していたところだ。こみいった問題があつて、それを解きほぐしていたところなんだが・・・（ジョージに。）分かつたかな、少しは。

ジョージ　いいえ。

ネルソン　いや、付き合つてくれて有難う。楽しかった。

（ホールにジョージを導く。）じゃあ、もう部屋に帰つて（ミントに聞かれないように。）家出するなんて馬鹿な考えを起こすんじゃないぞ。逃げるなんていうのは卑怯なことだ。分かつているんだらう？（ジョージ、頷く。）よし、じゃあ、部屋に帰るんだ。

（ネルソン、階段に連れて行く。ジョージが上がって行くのを見守る。）

ネルソン　お休み、ジョージ。

（ジョージ、暫く歩いて立ち止る。）

ジョージ　お休みなさい、ホレイシヨウ伯父さん。（また上り始めて。）ワイン有難うございました。

（ネルソン、素早く振り返り、食堂に入る。ミントがブランデーをすすっているのを見つめる。）

ミント（グラスを指差しながら。）飲むには早すぎなんでしょうが、遅すぎなんでしょうか。ちよつと難しいです。勿論こんなことはこれが初めてではありませんけれども・・・

エー、御伝言がございます。

ネルソン そうらしいな。

ミント 御推察の通りです、閣下。さっさとお伝えして肩の荷をおろしたいんですが。(ブランドーを飲み干す。)朝早すぎで、夜遅すぎの酒ですね、これは。ついさっきレイディハミルトンが私の部屋に御光来遊ばされ、畏れ多くも私をお起こしになりました。どうやらハーディ艦長と閣下の声を階段のところでお聞きつけになった。実際はそれで目をお覚しになった御様子です。

ネルソン (疲れた様子で。)で、すぐにあれのところに行つてやらねばならないのだな。

ミント いいえ、閣下。

ネルソン 違うだと？

ミント 御伝言は逆でございます。「今日の出来事で、私はすつかり辱(はずかし)めを受けました。もうどんなことがあつても寢室にはしつかり」(欠伸)失礼。「鍵をかけて入室を許すものではありません。名譽にかけてこれは誓います。」とのこと。また、私、ミントに、よくよく念を押して申し上げよ、と。「どんなにノックをしても、どんなに大声で、あるいは神妙に、開けてくれと頼まれても、正午以前に寢室の扉を開けることはありません。」(また欠伸。)あ、また。失礼。「正午は私の馬車を出すよう既に命じてあります。それに乗っているいろいろお屋敷を回ります。そして、貴方様よりもっと暖かく迎えてくれる軒場があれば、その軒端の下に参ることに致します。」以上。お言葉通り、正確にお伝え申し上げたと確信致します。特に最後の軒端の部分を間違

いなくお伝えせよとの御厳命でした。では提督、お許し戴ければ寢室に戻つてよろしうございましょうか。それから、これから再び起きる騒動からは邪魔されず、静かに眠つていとう存じますが、これもお許しを戴きたいのですが。

ネルソン ぐっすり眠るといい。ノックもないし、開けると頼むこともしない。安心しろ。明日屋敷を回ることに言いえば・・・そう、正午までにはまだ何時間もある。それに、どこの屋敷でも、そつおいそれと歓待するとは思えない。(歩きながらこの会話は交わされ、この時までミントとホールに出ている。ミント、階段を上り始めていて、ネルソンが再び食堂に戻つて行くのに気づく。)

ミント 閣下、どちらでお休みに。

ネルソン ああ、どこがあるだろう。先のことは分からんさ。なあ、ミント、あの鍵だつてちゃんとしてまわっていないか？も知れないし・・・

(悲しみが突然ネルソンを襲う。次の最後の言葉を言う時、笑顔を向けよつとするが、笑顔にならない。)

ネルソン 錠ももう、少し錆びついているかも知れないぞ。(手を顔にあてる。ミントに背を向ける。食堂に素早く戻る。椅子に頬(くずお)れる。ネルソンの全身が、急に乾いた音のない啜り泣きで震える。階段のところでミント躡(ためら)う。ネルソンの所へ戻るべきかどうか。ミント、正しく判断し、戻らない。階段を上がつて退場。)

(食堂でネルソン、震える手を伸ばしてブランドーを取る。やつとこのことで注ぎ、飲む。ネルソンのこの震えは、一つには深い悲しみが急に爆発したせいであるが、もう一つは、バー

スのベツイが心配していた、マリアの発作であることが観客には分かる。(

(かなりの時間がかかって睨り泣きとマリアの発作が終わる。テーブルの上に腕、その上に頭をのせて、疲労困憊の姿)

(暫くしてエマ、階段に現われる。裾の長い夜着、極度におどおどしている。一時は再び自分の部屋に戻ろうとした程。それから決心を固め、食堂の入口に進む。ネルソンを暫くの間眺め、隣の椅子に滑り込む。頭をネルソンの肩にのせる。)

エマ ああ、ネルソン。許して頂戴。

(ネルソン、見上げる。ちよつとの間。あまりに茫然としていて、エマがいると気がつかない。)

ネルソン (やつと)(何を許すんだい、エマ。

エマ 私のこと全部を。

ネルソン 何をしたかな。

エマ 貴方が教えて下さるんじゃないの。

ネルソン 教える? けど何もないな。

エマ 思い出して下さると思うわ。それに、とても酷いこと、きつと、とても酷いことだわ、私のしたこと。

ネルソン 酷いことなんか何もしていないよ、エマ。したこともないし、しようと思つたって君には出来ないんだ。

(手に触つて。)(冷たい。)

エマ 女は弱いわ。一人で寝るだけで凍えてくる。

ネルソン うん。それだけは少なくとも改良出来るな。

(ネルソン、立ち上がり、伸びをする。エマ、再び頭をネルソンの胸にあてる。優しく、おずおずと。)

エマ 怖かつたわ。

ネルソン 何が。

エマ 私から逃げて行つてしまつて。

ネルソン 君から逃げるなんて、それはありえない、エマ。死ぬまで。

エマ ブランデーを飲んでいたの?

ネルソン 相当大量に・・・のようだな。

エマ 私が先生ね。

ネルソン 弟子は先生の量にまでは達しなかつたな。

エマ(壇を取り上げて。)(初心者にしては悪くないわ。もう一杯いきましようか、一緒に。

ネルソン いい考えだ。

(エマ、二人のために注ぐ。)

エマ 何に乾杯しましょうか。

ネルソン エマに、そして、エマのネルソンに。他にはありえない。

(ネルソン、海戦の作戦図を眺める。急な動作で、きちんと整列していた銀器をめちやめちやにする。)

エマ 奇麗に並べてあつたのに。

ネルソン うん・・・奇麗だと思つた?

エマ 本当に奇麗に・・・そのままの配置で、決して動かさなかつたのに・・・カデイスの海戦をネルソンが如何にして勝つたか、それをお客に見せるために。

ネルソン(優しく。)(カデイスでのネルソンの海戦を如何にしてコーリングウッドが勝つたかを・・・)

エマ 私、「如何にしてネルソンが勝つたかを」と言つたわ。

ネルソン エマ・・・僕は君に頼んではないよ。

エマ ええ。でも、もう少ししたら頼むことになっていたわ。

ネルソン いやそれは違う、エマ。僕はどんなことがあっても決して頼まなかつたらう。

エマ ええ。(そうかもしれない。)でも私のことをまた「レイディ・ハミルトン」と呼んだでしょうね。それからコーリングウッドの戦いが近づくと、雨の中を一人で出て行く。私がいくら止めたって。私はネルソンが好き。それも一部じゃない。全部を愛するの。體の半分は海への憧れで恋焦がれ、體の半分しかここに残っていない、そんなネルソンは厭なの。

ネルソン ハーディがゆうべ君に何か言ったのか。

エマ あのだん(色野郎)・・・あの人？ あんな奴と話す唇なんか、持ち合わせてはいないわ。

ネルソン(エマを抱いて。)おお、エマ、エマ！

エマ ネルソンの半分じゃ厭うていう考えだけじゃないの、ネルソン。(魂の半分がどこかへ行っていても、それはいいの。)(夜中に私から逃げて、雨の中を一人歩き回って、風邪をひいて死にそうになったって、私、看病が出来るもの。ナポリでやったように・・・そしてトランプの独り遊びでも覚えるの。そう。だからその考えだけじゃないの・・・本当の事を言えば・・・

ネルソン 君はいつだって、本当のことしか言わないよ。

エマ ええ。でも大袈裟に言い過ぎることはあるわ。「いろいろお屋敷を回ります」だなんて。(二人笑う。手を取って。)(私、この国がネルソンを必要とした時、彼を引き止め

た女って思われたくないの。だって、これは私の国でもあるの・・・ね？

ネルソン この国がネルソンを必要としている・・・君もそう思うか。

エマ 世界にはたった一人しかネルソンはいない。そして、そのネルソンは私のもの。私一人のもの。

ネルソン そうだ。君一人のものだ。

エマ 私だけが決められるの、行ってもいいとか、行っては駄目とか・・・(涙が出そうになる。)(ただ・・・今度は・・・今度は気がつけてね。(言葉を続けることが出来ない。))

ネルソン うん。

エマ 貴方のエマを一人ぼっちにしないで。おいてきぼりにしないで。

ネルソン しない。

エマ ちゃんと誓って。今度は自分の全力を尽くして自身死なないうよう努力する、と。

ネルソン(真剣に。)(私の全力を尽くして、私自身が死なないうよう、エマが一人ぼっちにとり残されないよう努力する。これを神の前に、厳かに誓つ。

エマ 貴方は誓いは守る人だわ。誓いを守ろうと努力する人。今度だって「行かない」って言ったことを、随分守ろうとなさつたものね。

ネルソン(エマの手に口付けして。)(そうだ。守ろうとしたよ。おおエマ、愛しているよ。深く、深く。

エマ(立ち上がりながら。)(駄目。駄目駄目。こんなのじゃ。もつと記念になる何か。友達に自慢出来るような何か。私、

もう考えついているの。

ネルソン そうだろうな。そつだと思つた。

エマ ベッドで、ちゃんと日記帳に書いておいたわ。

(ネルソン、エマをじつと見る。)

エマ そうよ。庭でびしょ濡れになつて、マリアの発作になんか罹る必要はまるでなかつたの。何もなかつたつて、私、このことをゆうべ貴方に言つていたわ。でも私、自発的に許すと言いたかつたの。旗艦艦長の、こすつからい、あんな汚い手で、私から無理矢理連れ去られるなんてまっぴら。エーと、文章を思い出すわ。何だつたかしら・・・そう。「大好きなエマ、大事なエマ。この世界にもつと沢山エマがいれば、もつと沢山ネルソンがいるだろうに。」これ、どう？ネルソン(エマを見つめる。)気に入つた。これはいい。本当の話だ。

エマ 本当は違つたの。ネルソンは生まれるの。作られるのではないんだけど。

ネルソン 時々は生まれかわるんだ。

(ネルソン、テーブルに銀器を並べ始める。)

ネルソン 私の綺麗な戦いか。見ていろ。

エマ(ネルソンを見て。)ねえ、ネルソン。一つだけ教えて。また勝利なんでしょう？

ネルソン そう思つた。

エマ 大勝利？

ネルソン そう。大勝利。

エマ どうしても大勝利でなくつちや。

ネルソン(熱を込めて。)そつ。大勝利。戦略的に言つと・

エマ(笑つて。)私が戦略のことなんか言つと思つ？私が大勝利でなくつちやいけないつていうのはね、群衆が私達を見て笑つたから。

ネルソン 笑つた？

エマ クラージス街で笑つたじゃない。

ネルソン 万歳の声しか聞こえなかつたな。

エマ(ネルソンの腕を取つて。)貴方は聞こえていたわ。それに誰が笑われていたかもご存じ。そうね。私、最近太つたわ。笑われても仕方がない。少し食事を減らして、体重をおとさなくちや。それにお酒の量もおとして。勿論。

(無意識にブランデーをゴクゴクと飲む。ネルソン、優しくそれを見て微笑む。)

(エマ、ネルソンの手を取る。)

エマ ああ、ネルソン。エマ・ハミルトンみたいな女を養つていくのは大変よ。本当に大きな勝利を得なくちやならないわ。そうしたらあの人達、もう私のこと笑わない。「ネルソン万歳」よ。それに「エマ万歳」になるかもしれない。ええ、そうなるかも知れないわ。(二つのソース入れを取つて。)

これは何？

ネルソン 二列で攻撃する。その先頭の二隻。

エマ じゃあ、そのうちの二つはヴィクトリーになつたのね、きつと。

ネルソン うん、そうなるね。それからもう二つはロイヤル・ソヴリン。二つとも重い船でなくつちやいけな。二列縦隊という私の作戦の先頭を切る船だからな。

エマ（つつかかるように。）海戦のことについては、何も私が知らないと思っっているんですよ。だから、貴方が作戦の説明をしている時だって、私が聴いてはいないと思っっているのね。（非難するように。）でも私、本当に何度も聞いたわ。貴方があの人達に、「この二つの船はな、」（エマ、ソール入を振る。）「猛烈に重い大砲を積まなきゃならん。だから射撃を開始する前に沈没する可能性があるくらいだ。」って言っっているのを。

ネルソン 沈みはしないよ。

エマ でも敵の船は一斉射撃。（怒って。）弦側からどんどん撃ってくる。どうして進行方向に大砲が撃てる戦艦を作らないんでしょう。何故弦側からしか撃てないの。

ネルソン（銀器を並べるのに忙しい。）そのうち出来るさ。

エマ でもまだだわ。この位置で一時間、あるいはそれ以上。貴方はデッキの上を歩き回っている。敵の砲弾はどんどん飛んでくる。（船を指差して。）そして船首を向こうに向けているから、一発だってお返しに撃つことができない。

ネルソン 三十分だ。いや、風向きが良ければ、それ以下でつくさ。

エマ どうしてヴィクトリーにいたくないの。

ネルソン（軽い調子で。）いや、ヴィクトリーにいたくったっていいんだ。コーリングウッドには旗をどこか後ろの普通の戦艦に上げると言っただけだ。作戦の指揮にはその方がいいからね。

エマ ええ、ええ。そうでしょうとも。貴方、ネルソンの旗が普通の戦艦に上がるんですよ。どこか後ろのね！

ネルソン 恥じやないさ、何も。

エマ（涙が出そうになる。）コーリングウッドには恥じやないでしょう、きっと。でも貴方の旗が？ ああ、ネルソン、貴方って、時々平気で嘘をつくのね。

ネルソン（真面目な調子。船を並べながら。）嘘だなんて、とんでもないよ、エマ。

エマ ネルソン、貴方、私にさっき誓った事を覚えているわね。

ネルソン うん、はつきりと。

エマ じゃあ、もう一つ誓って。ね、これも。

（エマ、ソール入れの一つを取り上げ、それを注意深く後ろに置く。）

ネルソン エマ、君がヴィクトリーを置いた場所はね、戦艦アガムノーン、戦艦エイジャックス、それに戦艦オリオ

ンと衝突する位置なんだ。（ネルソン、ソール入れを取り上げ、どこにも置かないで持っている。）ねえ、エマ、このことに関しては、僕の好きにやらせてくれなきゃ困るな。勿論僕が一番いいと思っただけだ、完全じゃない。しかし、少なくともそうすれば、敵との会戦の前に主力戦艦四隻を沈没させる危険は避けられるんだ。

エマ ええ、でもこの誓いだけはして頂戴……

ネルソン ひとあさで二つも誓いを立てるっていうのは神様には多すぎじゃないか。それにこの場合、一つあればもう一つはそれに含まれるっていうんだから……

エマ 本当に含まれるのかしら。

ネルソン それはそうじゃないか。

エマ（ネルソンを抱いて。）それなら作戦はもうここまで。上に上がりましょう。時間がないわ。

ネルソン うん。喜んで。心から。

エマ 貴方の言わなきやならない台詞、覚えてる？

（エマ、入口に行く。）

ネルソン 僕の台詞？

（ネルソン、ソース入れを正確にもとあつた場所に置く。エマは階段のところまで進んでいる。）

エマ ほら、私が日記に書いておいた・・・

ネルソン ああ、あれね。

（ネルソン、後を追う。エマ、待っている。）

ネルソン エーと、何だったっけ。「ああ、エマ、もし君みたいな女の人をもつと世界にいたら・・・」

（ネルソン、階段のところまで追いつく。）

エマ 駄目、駄目。「大好きなエマ、大事なエマ。この世界にもつと沢山エマがいれば、もっと沢山ネルソンがいるだろうに。」

ネルソン ああ、そうだったね。「大好きなエマ、大事なエマ。もしこんな素晴らしいエマが・・・」

（二人、階段を上り始める。）

エマ 「この世界に、もっと沢山エマがいれば」はい、もう一度。

ネルソン 「大好きなエマ、大事なエマ。この世界にもつと沢山エマがいれば」エーと、そしたら何が起るんだっただけ。

エマ（キスして。）「もっと沢山ネルソンがいるだろうに。」

（照明暗くなる。遠くから大砲の音が聞こえる。物憂い、水兵の囃し歌のかすんだ音が、風にはためく帆の音にかき消されそうになりながら、観客の耳に届く。）

第三場

（ヴィクトリーの、ネルソンの船室に照明があたる。二人の水兵が船で用いる箱（一個）小さなテーブル（一個）と椅子（一個）を運び入れる。テーブルの上には書類と筆記用具。遠くから聞こえる大砲の音はこの場の間中続く。暫くして、平服を着て（勿論星はついていない）、ネルソン登場。二人の水兵に「下つてよい」と頷く。水兵退場。ネルソン、一人残されると、膝をついて祈る。）

ネルソン 全宇宙をしるしめす偉大なる神よ、我が祖国のために・・・

（ハーディ、ブラックウッド登場。後ろにハーディの部下（士官候補生）。ネルソン、彼らに微笑み、暫く黙っているように合図。入つて来た三人、頭を下げる。）

ネルソン そしてヨーロッパ全体の幸せのために、大きな栄えある勝利を我が軍に与えられんことを。各将兵は正しく行動し、その勝利を穢すことのないように。また勝利後のイギリス艦隊に、敵を愛する気持ちが支配的ならんことを。私個人に関して、私を作り給（たま）うた神に命を託さん。

どうか神が祖国に誠実に仕える私の努力を嘉（よみ）したまわんことを。私が守るべきこの祖国、及び私自身の運命を、神の御心に委ねん。アーメン、アーメン、アーメン。

（ネルソン、また暫く両膝をついたまま。そして、さつと立

ち上がる。この瞬間から彼の態度は静かで、諦めのついた幸せなものである。()

ネルソン ハーディ、ブラックウッド、敵はどうやら弾丸を無駄遣いしているようだな。ここまで届かないんだらう。

ハーディ もうあと二、三百メートルです。しかし、一発は越えて行きました。

ネルソン うん。もうすぐガンガン来るぞ。(時計を見て) こつちから挨拶を返せる距離になるには、少なくともあと四十分はかかるな。レイディ・ハミルトンの提案は、進行方向に大砲が撃てるよう、軍艦を設計すべきだというのが。どうだ、いい考えだろう。

ハーディ 砲弾が前方へ飛びだす船、それはちよつと海では似合わないのではないですか。風船のようで。(訳註 舳先の角度を鈍角にし、その両弦に大砲をつける事を考えている様子。)

ネルソン いや、前だけを向いているんじゃない。大砲を何本か、回転台の上につけるんだ。ここでの会戦を参考に、設計の連中が新方式を編み出してくれることを期待しよう。しかし、今のところは回転砲台はないんだから、風向きがいいことを祈るばかりだ。ロイヤル・ソヴリンはどうだ。

ハーディ 勇敢な動きです、閣下。あちらの方が我々よりも先に作戦行動に移るでしょう。

ネルソン(機嫌よく。) コーリングウッドの奴は真新しい船か。このヴィクトリーにはなにしろ二年分のぶじつばがくつついているからな。ブラックウッド、君はもう自分の船に帰るんだ。

ブラックウッド ご命令を待っておったであります。

ネルソン 誰の命令だ。

ブラックウッド ネルソン閣下であります。さ、昨夜の合同会議で、閣下は小生の艦にて指揮をとられる場合もあるとの話でありました。

ネルソン 私がそんなことを言ったか。

ブラックウッド は、発言は他の提督殿でありました。しかし、か、閣下がこれに賛成されたと、しよ、小生は理解しました。閣下の文書による命令によれば、司令長官は……

ネルソン くだらん。

ブラックウッド は? 何と?

ネルソン 「くだらん」と言ったのだ。司令長官が普通の戦艦にのる、と書いたのは、コーリングウッドのためを思つてだ。さあ、君は自分の船に戻るんだ。気をつけてな。

ブラックウッド はつ。分かりました。

ハーディ(ブラックウッドを引き止めて。) 提督、再考をお願いします。ヴィクトリーは敵の戦艦四隻を相手にすることになります。たった一隻で。護衛艦なしに。

ネルソン ほう、君は四隻の予定にしていたか。私は五隻のつもりだった。

(間。)

ハーディ 少なくともテメレルをやり過ごして、我々の前を行かせる。それぐらいの手はうってもいいでしょう。テメレルは我々のすくうしろについています。

(ネルソン無言。ハーディ、この無言を同意と受け取る。)

ハーディ(彼づきの士官候補生に。) 信号係に言つて、

(テメレルの)ハーヴェイ艦長に伝える。「テメレルが先頭にたて」と。

士官候補生 はい。伝えます。

(士官候補生、退場)

ネルソン(よく聞いていない。)成程うまいやり方だ。だがまづやって貰いたい事がある。丁度君とブラックウッドがここにおいて都合がよい。君達二人のサインが欲しいのだ。私のサインはほら、もうすんでいる。

(二人、書類を屈みこんで見ると。ハーディ、最初にペンをとる。)

ネルソン 書類を全部読む必要はない。しかし我々が焼け死んだり、溺れたりした時の用心のために内容の要点だけは話しておこう。この書類はレイディ・ハミルトンにはつきりと、何が何でも必ず次のものを残すと・・・うん、口で言うとなると面倒だな。最後の一文を読むことにする。(素早く読む。)「従って私は国王及び国家に、エマ・ハミルトンを遺産として残す。即ち国王及び国家は、彼女に、この地位を守るに充分な生計の糧を、与えねばならない。」署名してくれるか、この署名で、これはすべて正式なものになる筈だ。

(ハーディ、署名する。ブラックウッドが次に。士官候補生が帰ってくる。)

士官候補生 命令は実行されました、艦長。

(ネルソン、ステージの先端に行き、弦窓・・・架空のもの・・・から覗く。)

ネルソン 何だ。あのハーヴェイのポケナスめ。テメレルをどこへ持って行くこうっていうんだ。ハーディ、驚いた奴

だ。どうやらこつちを追い抜こうという腹らしいぞ。すぐ止める。自分の位置を守れ、と言ってやれ。

ハーディ(辛抱づよく。)(自分の位置とはどこでありますか、閣下。

ネルソン ヴィクトリーの後ろだ、勿論。他にはない。

ハーディ しかし、先程の閣下の命令で、私はその丁度反対を指示したところでありますが。

ネルソン くだらん。

(間。)

ハーディ はっ、分かりました。(溜息をついて、士官候補生に。)

士官候補生 はい。取り消します、艦長。(退場。)

ネルソン そうだ、ハーディ、見たか、私の全艦隊への信号を。連中を楽しませるためにやったんだが。

ハーディ はい、見ました。

ネルソン 「イギリスは本日、諸君にイギリスの運命を託す。」

ハーディ 「託す」の信号はありませんでしたので、通信士はこれを「あづける」に変えて送りました。

ネルソン 「イギリスは運命をあづける」? 響きが悪いな。「あづける」じゃ話にならん。君は下にいたんだな。連中は楽しんでいたか。(訳註 *confirm* を *confirm* に変えてう

つ。 *confirm* には「體をまかす」なる性的な意味あり。)

ハーディ それが、あまりは。誰かが声を出したのが聞こえました、それは「提督の頭、おかしくなっただんじやねえか。俺達は態々提督から言われなくなっただって、自分の義務く

らい知つてらあ。」と。しかし、信号を送つたのはネルソン提督です。当然連中は歓呼の声を上げました。

ネルソン 大きい声だったのか。

ハーディ やつと聞こえるぐらいの。しかし閣下の次の信号には、腹を抱えて笑いました。あの「接近戦」のやつで。

(ネルソン笑う。)

ネルソン うん、連中は好きだよ。あのやくざなところがまたいい。(ブラックウッドに。)じゃあ、自分の船に帰つてくれ、ブラックウッド。

ブラックウッド では帰ります、閣下。(手を差し出す。)

い、今までに経験したことのない、完全な、徹底的な勝利を祈ります。

ネルソン うん、有難う。しかし、私の計画は、本当に完全な勝利だ。この計画を越える勝利はありえないな。ま、とにかく決めるのは神だ。では頼む、ブラックウッド。

ブラックウッド それから、か、会戦のあとニュースをロンドンに運ぶ役目は、またユーリアラスですか。

ネルソン (ぼんやりと。) そうだ。ああ、ハーディ、それが私の意志だとコーリングウッドに伝えてくれ、頼んだぞ。

ハーディ 勝利の時、閣下がその命令をお下しになるのですか……

ネルソン それはそうだ。ただ私が忘れていた場合の事を考えて言つたんだ。

(ブラックウッド退場。ハーディ、ネルソンの平服を見る。)

ハーディ 平服を、と申し上げたことをお聞き届け下さつて嬉しいです。星をピカピカさせてデッキを歩き回るのは自

殺行為です。

ネルソン うん、そうだな。

ハーディ 敵のマストには狙撃兵がちゃんとへばりついています。太陽顔負けの金ピカの星で胸を飾つてデッキをぶら下げば……

ネルソン おいおい、ハーディ、私はぶらつきはせんぞ。

ハーディ はっ。

ネルソン (弦窓 舞台にはない から覗いて。)あのテメレールの馬鹿奴が。まだこつちを抜こつちしているぞ。

ハーウェイを軍法会議にかけてやる。これは本気だぞ。ハーディ、お前、自分で行つて命令してこい。

ハーディ (溜息をついて。) はっ、分かりました。

(一瞬沈黙がある。それから、お互いの本能が命じたかのようになり近づき、抱き合う。)

ネルソン いろいろあつたが、結局のところ、私はそれほど罪深くはなさそうだ。どうだ?

ハーディ はい。

ネルソン (背中を軽くたたいて。) うん。それから、少なくとも連中は私のことを「あいつは自分の義務だけは果たしたな」と言ってくれるだろう。これに対してどうやら私は、私を作つてくれた神に感謝せねばならないようだ。

ハーディ はい、閣下。

(ハーディ、船室を出る。大砲の音増す。一人になると、ネルソン、箱に近づき、そこからいつもの星のついた軍服を取り出す。片手のため、苦労しながら軍服に着替える。袖で星を磨き、にやりと笑う。これが終わると縁にそりのついた提

督の帽子を、角度に充分気をつかつて被る。船室を出、デッキに上がって行く。船室の照明、急に消える。しかしターナー風の背景画には、照明、そのまま残る。大砲の音、ますます激しくなる。それから、大砲の音に混じって、教会の鐘の音（単独 複数は鳴らない。）が聞こえてくる。背景画の照明も急に消え、大砲の音も静かになる。教会の音楽が聞こえてくる。）

第四場

（教会の鐘の音、大きくなる。照明がつくと、そこはマートン。喪服に身をつつんだフランシスが居間に、非常に静かに立っている。家具は塵除けのシートが被せてある。深い悲しみの表情で、フランチェスカが階段を降りてくる。）

フランチェスカ Lady Hamilton, vi vuole vedere, eccellenza, ma forse sarebbe... (レイディ・ハミルトンはお会いになりたいと、でもどうかお帰りになって下さいませんか。)

（フランシスが分からない様子なので。）
フランチェスカ レイディ・ハミルトン・・・よくない・・・よくなくなったとき・・・あとで・・・

フランシス ええ、では何か置き手紙をして・・・
フランチェスカ Sì, sì, eccellenza. (はい、はい、奥様)では、紙を持って・・・来ます。

（エマがホールの方向へ歩いてくるのが見える。足が覚束ない。夜着を着ていて、アンドロマケの役の時着た、紫のマントを着ようとしているが、なかなか入らない。）

エマ（舞台裏から。）フランチェスカ、フランチェスカ。

Dove stai, idiota. (どこなの、お前。馬鹿。)

（フランチェスカ、階段を駆け上がり、エマをとめ、フランシスに会わせまいとする。）

フランチェスカ Se ne andata - se ne andata, tornate a letto. (お客様はお帰りになりました。お帰りに。どうかベッドにお戻り下さい。)

エマ L'ho vista, bugiarda. (嘘つき。私には見えたのよ。)

車はまだ外にあるじゃないか。
（エマ、フランチェスカを押しつけて居間にはいる。フランシス、既に、挨拶をするために立ち上がっている。鐘の音響く。）

エマ レイディ・ネルソン。 (少しふらつきながら、膝をついて挨拶する。)

フランシス レイディ・ハミルトン。 (威厳をもって挨拶を返す。)

エマ (フランチェスカに。) Aiutami. (着せし。)

（エマ、マントを指差す。フランチェスカ、涙が出そうになるのを抑えて、マントを着せる。)

（鐘の音、また響く。)

エマ (この間にフランシスに。) 衣装棚を長い間捜しましたが、喪に相応しい衣装はこれしか見つかりませんでした。黒いものは着たことがなかったのです。それにずーっと寝たつきりで起き上がったことがなくなって。(ですから喪服を作らせることも出来なかった。)

（フランチェスカに。) 何をもたもたしているの。自分でやります。あっちへ行きなさい。
（フランチェスカ退場。)

エマ これは余興の芝居をした時に着た衣装です。紫は喪でしたわね、慥か。とにかくこれは、アンドロマケーの衣装です。この衣装を着てアンドロマケーを演じたのです。最後に演じたのはここ。丁度この部屋。夕食後でした。観客には貴方の夫、ネルソンも。

(この「夫」という言葉を使うのはエマには辛い。)
(鐘響く。)

エマ お訪ね下さって洵に光栄ですわ、レイディ・ネルソン。ご用件は何なのでございましょう。

フランシス 深いお悲しみのところを大変不躰(ぶしつけ)とは存じましたが、本当に急を要することですので失礼をかえりみずまいりました。

エマ ええ、そのようなご用件と御察し致しましたわ。

フランシス お聞き戴きたい大変重要なニュースがございますの。(お身の上に直接関係のある事なのです。)(明日には新聞に出ましよう。そしてお読みになることとございましょう。でもこのニュースは私が御伝えるのが一番と思つたのです。

(鐘、また響く。)

エマ 新聞はもう私、読んでいません。(回りを見て。)

このように家をとりちらかしていて申し訳ありません。ここは綺麗な家でした。そしてこの部屋はその中でも一番綺麗な。実は使っている者達が、みんななくなつたのです。フランチェスカを除いてみんな。給料の支払遅延で。こんな話お分

かりにはならないでしょうね。下世話な、こんな話・・・
フランシス どうか、レイディ・ハミルトン、私のお持ち

しましたニュースをお聞きになって下さいませんか。

エマ ニュース？ ええ、ちょっと、ちょっとお待ちになつて。(回りを見回す。)(何か飲み物を・・・折角いらして下さ・・・)

フランシス お構いなく、どうぞ。飲み物はいりませんか・・・

エマ ええ、でも私の方はいるわ。失礼して・・・

(ただ一つカバーのしていないテーブルからブランデーの壇を取り上げ、大コップに注ぐ。)

エマ コップがなくなつて。(こんな大コップで。)(食堂

には少しあるんですけど、歩いて行くには遠すぎますわ。そう、お帰りになる前には、必ず食堂を見て行つて下さい。いつかの晩、あの人がコップ類、銀器を使って、あの海戦の作

戦を説明したんですの。そのままの配置が残っています。海⁸戦はあの作戦通り展開しました。ほとんどあの通りに。いろいろ聞いてみますと・・・トラファルガー沖で。スプーンと

かナイフ、少し取られてしまいました。でも海戦の概略はまだ充分つかめますわ。本当に綺麗・・・でしたわ、まだ・・・

この間、私が見た時は。

(再び飲む。)

(鐘、響く。)

エマ(突然、金切声を上げる。)(ああ、あの鐘、あんなもの

のどうして鳴らすの。ネルソンが死んだつて、もう知らないものはいないじゃない。それに、あれは勝利だつたんでしょ

う？ それも大勝利。(声が上がす。)(あの人の予告通り。坐つてもいいですか、レイディ・ネルソン。長いことベツ

...

ドにいて、足が弱っていて。それに勿論ブランドーのせいも。ブランドーのこと、隠したって無駄ですものね、奥様に
は。

フランシス 私、来るのではありませんでした。今やっと
分かるなんて。

エマ 来ない方がよかった？ だって来なければ偵察出来
ませんわ。

フランシス 偵察？ 私が？ どうしてそんな。でも分
らないのね、自分の心だつて。自分のつもりでは正しいこと
を、と思つていても、その本当の理由は別のところにあつた
のかも知れない。

エマ 私がもしあなたの立場にいたら、きつとここへ偵察
にやつて来たでしょうね。

フランシス まさか。あなたはそんな方ではありませんわ、
レイディ・ハミルトン。

エマ いいえ、私は「そういう方」なの。ここに偵察に来
てにやりと笑つたでしょうね。だって私、そういう女なの。

フランシス それは私は信じません。ご想像の通り、あな
たの噂は沢山聞きました。それに随分あなたのことを調べま
したわ。私の立場にいらつしやれば、あなただつてそうなさつ
たでしょうけど。(エマ、頷く。)で、分かつたことは、気
風(きつぷ)がよくて鷹揚(おうよう)で、ということだけ
ですわ。(意地悪など薬にしたいくてもなかつた。)

(間。エマ笑う。)

エマ まあまあ。言葉つて何ていいかげんなんでしょう。
気風がよくつて鷹揚。ただ「ばいた」つていうだけのこと。

あなたの夫を盗んだ、ば、い、た。

フランシス あの人は私のベッドを出て行って、あなたの
ベッドに行った。いつかは出て行かなければならなかつたの。

誰かのベッドを求めて。それは分かつていた。もうずっと前
から。だから偶々それがあなたのだつたつていうだけのこと。

私はあなたに恨みはないわ。

エマ 私はあなたを恨んだ。だって私の敵だつたもの。あ
なたは私の容赦ない、冷酷な敵だつた。私のこと憎んだでしょ
う？ あなた。

フランシス(静かに。)ええ、憎んだ。丁度あなたが私を
憎んだと同じように。

エマ でも私には理由があつた。あの人は私のものになつ
ていた。完全に私のものに。體の隅々まで、どこからどこま
で、私のものに。でもあなたはじつとそこにいた。陰に隠れ
て。待つていたの。そうなんでしょう。

フランシス ええ。

エマ そこにじつと坐つて・・・編み物をして、繕い物を
して、待つていた。ペーネロペーね。オデュッセウスが家に
歸つて来るのを待つている。

フランシス ええ、そう。私のオデュッセウスを待つてい
たの。待つていた。でも、この私のオデュッセウスは歸つて
こなかつた。それでも、私の待つていた事、こんなに長い年
月(としつき)、それは演技ではなかつたわ。あ、ご免なさい。
これは意地悪な言い方だつたわ。

エマ あの、結局はあなたのところへ歸つているところ
なのね。今ビスケー湾あたりまで来てい。ブランドーの樽

に漬かつて。あの人の帰るところはあなた・・・あなたって今何でしたかしら・・・子爵夫人？ いえ、ネルソン伯爵夫人ね。その人のところへ。私のところへじゃないわ・・・絶対に。アルコール漬けになって、あなたのところへ。あなたが待っていたものは、あれなのかしら。

フランスス いいえ。

エマ（笑って。）あなたが待っていたあの人って・・・生きたあの人だったのかしら。

フランスス ええ、そう。子供じみていたわ。今考えると。でも正直に言えば、そう。私、あの人が帰って来るのを待っていた・・・生きて。

エマ あなた・・・トム・ティット・・・のところへ？

フランスス 年老いてくれば・・・そうすれば少なくとも、私の方にと。

（間。）

エマ（コップを持ち上げて。）じゃあ、乾杯しなくっちゃ。年老いたネルソンに！（エマ飲む。）医者ほこんなに飲んでいと死ぬことになるって言っている。ええ、たいして長くはないでしょう。それにその方がいい。借金地獄で生き長らえるなんて、考えてもいい気持ちがない。来るわ、借金地獄は。もう目に見えている。

フランスス 借金地獄はありません、レイディ・ハミルトン。そのことをお話ししようと伺ったのですわ。

エマ どういうことでしょう。

フランスス 他の書類にまぎってある書類が届いたのです。

それにはネルソンの署名があり、ブラックウッド艦長、ハーディ准将の正式な副署（名）がついていました。

エマ あらあら、ハーディは今准将？

フランスス ええ。

エマ あの人のことを「男色野郎」だなんて呼んだの、私。昇進やら、勲章やら、大変だったでしょうね。それで・・・その書類は？

フランスス それは夫の・・・ネルソン卿の、生存中最後の書類です。それには、あなた、エマ・レイディ・ハミルトンを、国家への遺産として遺（のこ）す、と明記されていたのです。

（長い間。鐘、響く。）

エマ（頭を後ろに倒し、叫ぶように笑う。）国家への遺産？ 私を？ なんて馬鹿な話。そんなことになったら、私、死8なくっちゃ。
（ヒステリーぎみに笑い続ける。フランスス心配して見つめる。）

エマ 国家への遺産？ 私を。議事堂の台座の上に、裸の私の彫像が飾られるっていうの？ 丁度夫のウィリアムが生きていた時、あの人の悪戯にひっかかって、みんなの前で裸にされて見せ物になった、あの時みたいに。国家への遺産、宮廷で王と女王の間の玉座に私が坐るの？ 玉座には飾り板がついていて、「エマ・ハミルトンの座。ネルソン子爵より王と国家へ遺されしもの。故国家の英雄のばいたの座」と書かれている。ああ、なんていう人、ネルソンで。なんていう赤ちゃんなんでしょう。あ、そう。でも約束があつたん

だわ。あの人と私が交わした、あの晩の。決してお前を一人ぼっちにはさせない。そうね。国家の遺産になったら、一人ぼっちにはなるうと思つたつて、なれやしない。まあ、なんて赤ちゃん。なんて子供なの、あの人。こんな馬鹿なことを考えつくなんて。

(鐘、鳴る。)

フランシス ネルソンの遺言が実行に移されるよう、あらゆる努力がなされるであらうと、侯爵ご自身がこれに賛意を・

エマ 侯爵？ 侯爵って誰？

フランシス ネルソン侯爵・・・ウィリアム ネルソン。私の夫の兄。

エマ ああ、あの人、今は侯爵？ ごますり一番、ケツナメ男のあの司祭長。お経なんて読んだことのない・・・いえ、この間は読んだわ、きつと。弟が海戦で死にますように、そして、私が侯爵になりますように。ネルソン一族、艦隊の他の乗り組み員達はどうなったのかしら。ウィリアムの息子は？ あれは何かに？

フランシス トラファルガー子爵。

エマ トラファルガー子爵？ あの鼻たれ小僧が？ ああ面白いわね、世の中つて。

(鐘、鳴る。)

エマ そして全員今度は、あなたの方に戻って行つたのね。私の方にはもう誰もいない。で、ミントは？ ミントにお会いになつて？

(フランシス、頷く。)

エマ そうね。一番逃げ足の早い男。保証するわ。そう、今じゃ、あなた大勝利だわ。

フランシス 大勝利？ たとえそうでも、それを嬉しがるような私だとは思つて戴きたくないわ。一瞬の間でも。

エマ どうしてかしら。

フランシス そんなことを楽しむような女ではないの、私は。もしそんな女だったら、態々ここへ来るようなことはしなかつたでしょう。あなたには私が理解出来ないの、レイディ・ハミルトン。

(間。)

エマ ええ、理解したことはなかつたわ。そう、今まで一度も。

(鐘、鳴る。)

(エマ、フランシスの傍に来て、彼女を見つめる。)

エマ 善い人であるつていうこと、それはどんな気持ちなんでしょうね。

フランシス 辛いわね。いつもそうであるつとすれば。

エマ 私のこと、分かつたことがあるのかしら。

フランシス いいえ。

エマ 世の中つて、奇妙な具合。

フランシス もうベッドにお戻りになつた方がいいわ。これでお暇します。おつきのあの人を呼びましようか？

エマ 私が呼びます。(叫ぶ。)フランチェスカ。Vieni subito! (早く来て。)

(フランチェスカ登場。)

エマ フランチェスカ、accompagna la signora contessa alla

sua corrozza. (フランチェスカが馬車までお送り致しますわ。)
フランシス ご主人様をみてあげて。私は自分で出来ます。
(エマに。)私を信じて下さい、レイディ・ハミルトン。私
の力の及ぶ限り、夫の遺言は必ず守るよう取り計らいますわ。
そして少なくともあなたの負債は全て議会から支払われるよ
うに。

エマ しようとして下さる、そこは信じますわ。(一口飲
んで。)でも勿論うまくいく筈がない。議会ですって？採
決に回されるころまでだっ行って行きっこない。(自分のマン
トを見て。)ああ、戦を飾る花輪が萎(しぼ)み、年端もゆ
かぬ男女が・・・あら忘れてしまった。若い男女が何をす
んだったかしら。そうね、どうせ男女がやることなんか、決
まりきっているわ。(フランシスに。)ご免なさい。あの夜、
私、クレオパトラの台詞を入れたの。かなりの量の台詞を。
ハーディの奴を困らせてやるうって。あの人ちつとも困りは
しなかった。シェイクスピアを知らないんだから。今じゃ、
私も忘れてしまった。覚えているのはここね。物のけじめは
失われ、回り来る月の下には、何一つ際だったものがなくなっ
てしまったのだ。

フランシス どうか希望をお捨てにならないで。力の及ぶ
限りやってみますわ。お約束します。

エマ 約束は不要ですわ。(世間話をする時のように。)
そうね、レイディ・ネルソン、こんな馬鹿なことを考えて・・・
でもちょっと興味があるわ。百年後、私達のうちどちらがネ
ルソンの女として記憶されるでしょう。やはりあなたね。私
はただのおなべさみ。じゃ「おなべさみ」のために乾杯だわ。

(また一飲みする。鐘、鳴る。エマ、金切声を上げる。)あ
あ、どうしてあれを止めないんでしょう。

フランシス ではこれで失礼しますわ。(フランチェスカ
に。)ご主人様をどうかしっかりと見てあげて。

(独特のピョコピョコする歩き方で、部屋から出ようとする。
しかし、フランチェスカの声を聞き、振り返る。)

フランチェスカ(エマを支え止めて。)E ma, eccellenza, per
l'amore di Dio, tonde a letto. (どうか奥様、ベッドにお戻りに
なつて。)

(エマ、フランチェスカを振り払い、よろよろとハーブシコー
ドに進む。やつのことで蓋を開け、スツールに坐る。左手
だけでルール・ブリタニアの最初の部分を弾く。宙を見上げ
て答が返って来るのを待つ。)

(鐘、鳴る。)

(エマの頭、酔のためか、絶望のためか、ガクンと下に落ち、
キーボードをたたき。ハーブシコード、雑然とした音をたて
る。ブランドーの壘を持った右手が傾き、床にブランドーが
流れ落ちる。フランチェスカ急いで駆け寄る。)

フランシス(ホールから心から同情をもって。)かわいそ
うに。レイディ・ハミルトン。

(フランシス、暗闇の中に、小鳥の歩き方で退場。)

(幕)

平成三年(一九九一年)七月十九日 訳了

<http://www.01.246.ne.jp/~tnoumi/noumi1/default.html>

A Bequest to the Nation was first produced at the Theatre Royal, Haymarket, London, on September 23rd, 1970, with the following cast:

Characters in order of their appearance

George Matcham Snr Ewan Roberts

Katherine Matcham Jean Harvey

Betsy Deborah Watling

George Matcham Jnr Michael Wardle

Emily Una Brandon Jones

Frances, Lady Nelson Leueen MacGrath

Nelson Ian Holm

Lord Barham A. J. Brown

Emma Hamilton Zoe Caldwell

Francesca Marisa Merlini

Lord Minto Michael Aldridge

Captain Hardy Brian Glover

Rev. Willaim Nelson Geoffrey Edwards

Sarah Nelson Eira Griffiths

Horatio Stuart Knee

Captain Blackwood Geoffrey Beevers

Midshipman Stuart Knee

Footmen, sailors, maids Stanley Lloyd

Conrad Asquith

Graham Edwards

Chris Carbis

Deborah Watling

Alison Coleridge

Directed by Peter Glenville

Rattigan Plays The Trustees of the Terence Rattigan Trust

Agent: Alan Brodie Representation Ltd 211 Piccadilly London W1V

9LD

Agent-Japan: Martyn Naylor, Naylor Hara International KK 6-7-301 ☎

Nampei-daicho Shibuya-ku Tokyo 150 tel: (03) 3463-2560

These are literal translations and are not for performance. Any application for performances of any Rattigan play in the Japanese language should be made to Naylor Hara International KK at the above address.